

○口頭辨論及準備書面

- 第四 出廷シタル原告及法律上代人訴訟代人及附添人ノ氏名
  - 第五 審問ヲ公行シ又ハ公行セザリシコト
  - 第六 第四百四十六條 審問ノ經過ハ單ニ之ヲ略記スヘキモノトス  
左ノ件々ハ之ヲ筆記ニ載セテ確定スヘキモノトス
  - 第一 申立テタル請求ノ全部又ハ一部ヲ完結ニ至ラシムル承認拋棄及和解
  - 第二 規定上確定スヘキ申立及陳述
  - 第三 證人及鑑定人ノ供述但其供述以前聽カレザリシトキ又其以前ノ供述ニ違フトキニ限ル
  - 第四 檢證ノ結果
  - 第五 裁判所ノ裁判(判決、決議及命令)但其裁判ヲ書面ニ作リ筆記ニ添ヘサルモ限ル
  - 第六 裁判ノ言渡
- 筆記中ノ記載ハ附録トシテ筆記ニ添ヘ其旨ヲ之ニ掲ケタル書面中ノ記載ト同一ナルモノトス
- 第三百三十一條 前條第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ノ部分ハ法廷ニ於テ之ヲ關係人ニ讀聞カセ又ハ閱覽ノ爲メ之ヲ關係人ニ示ス  
調書ニハ前項ノ手續ヲ履ミタルコト及ヒ承諾ヲ爲シタルコト又ハ承諾ヲ拒ミタル理由ヲ附記ス可シ

- 第三百二十二條 調書ニハ裁判長及ヒ裁判所書記署名捺印ス可シ  
裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ニ代リ署名捺印ス區裁判所判事差支アルトキハ其裁判所書記ノ署名捺印ヲ以テ足ル
  - 第三百二十三條 受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事カ法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシム
  - 前四條ノ規定ハ右ノ審問調書ニ之ヲ準用ス
  - 第三百二十四條 口頭辨論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守ハ調書ヲ以テノミ之ヲ證スルコトヲ得
  - 第三百二十五條 此法律ニ從ヒ口頭ヲ以テ訴、抗告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲シ又ハ證言ヲ拒ム場合ニ於テハ裁判所書記ハ其調書ヲ作ル可シ
- 〔解義〕 第三百三十一條ハ調書ノ讀聞及ヒ閱覽ニ關シ第三百三十二條ハ調書ノ署名ニ關シ第三百三十三條ハ法廷外ノ調書ニ關シ第三百三十四條ハ調書ノ立證效力ニ關シ第三百三十五條ハ口頭ヲ以テテ訴又ハ申立等ニ關スル調書ノコトヲ示定セリ
- 第三百三十一條 裁判所書記前條第一號乃至第四號ニ掲ケタル調書ヲ作リタルモハ法廷ニ於テ直ニ關係人ニ讀聞カセ又關係人ヨリ閱覽ヲ求ムルモ之ヲ示サ、ル可ラス而シテ調書ノ末

○口頭辨論及準備書面

尾ニ閱讀タルコト閱覽ノ爲メ示シタルコト又調書ノ如ク承認シタルコト若クハ承諾ヲ拒ミタルコトヲ附記セサル可ラス而シテ第三百三十條第二項第五第六之ヲ讀開ケスシテ可ナリトス

若シ調書ニシテ本條ノ手續ヲ履行セサルハ第三百三十四條ニ定ムル立證ノ効力ナキモノトス

第三百三十二條 調書ニハ裁判長及裁判所書記署名捺印シテ其公正ヲ保證セサル可ラス若シ裁判長差支アルハ其差支ノ旨ヲ記シ官等最モ高キ陪席判事代テ署名捺印ス又區裁判所ハ單獨判事ニシテ他ニ代ル可キノ人ナキヲ以テ若シ差支アルハ書記一人之ニ署名捺印スルヲ以テ是レリトス

第三百三十三條 受命判事若クハ受託判事又ハ區裁判所判事カ法廷外ニ於テ爲ス審問ニモ書記ヲシテ立會ハシメ而シテ其調書ニハ前四條ノ規定ヲ適用スルモノトス

受命判事受託判事又ハ區裁判所判事カ法廷外ニ於テ審問スル場合ハ本法第二百九十六條第三百十八條第三百五十八條ニ規定セリ

第三百三十四條 口頭辯論ノ爲メ規定シタル方式ノ遵守セラレシヤ否ハ法廷調書ヲ以テ之ニ證スル者トス又法廷ノ調書ハ官吏ノ調製ニ係ルヲ以テ其證據力ニ至テモ他ノ公正證書ト同一ノ効力アルモノナリ故ニ偽造ノ證アラサルヨリハ之ヲ抗擧スル能ハサルモノトス  
第三百三十五條 此法律ニ於テ口頭ヲ以テ訴、抗告、申立、申請及ヒ陳述ヲ爲スコトヲ許セ

ルル又ハ證言ヲ拒ム場合ニ於テハ裁判所書記之カ調書ヲ作ラサル可ラス

〔參照〕 獨 第四百四十八條 筆記ハ第四百四十六條第一ヨリ第四百四マテニ關スル場合ニ限リ關係者ニ之ヲ讀開カセ又ハ通閱ノ爲メ之ヲ示スヘキモノトス其筆記ニハ其手續ヲナシ及承諾ヲ得又ハ如何ナル異議ヲ申立テタルヤヲ記スヘシ

獨 第四百四十九條 筆記ハ裁判長及裁判所書記之ニ署名スヘキモノトス

裁判長差支アルトキハ之ニ代リ年長ノ陪席裁判官署名スルモノトス區裁判官差支アル場合ニ於テハ裁判所書記ノ署名ヲ以テ是レリトス

獨 第四百五十條 口頭上審問ニ付キ定タル手續ノ遵守ハ單ニ筆記ヲ以テ之ヲ證明スルコトヲ得此手續ニ關スル筆記ノ主旨ニ對シテハ偽造ノ證明ニ限り之ヲナスコトヲ許スモノトス

獨 第四百五十一條 法廷外ニ於テ區裁判官受命裁判官又ハ受託裁判官ノナス審問ニモ亦裁判所書記ヲ立會ハシムヘキモノトス

第二節 送 達

第三百三十六條 送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシム

裁判所書記ハ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任シ又ハ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達ノ施行ヲ執達吏ニ委任ス可キコトヲ囑

託ス

裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ亦送達ヲ爲サシムルコトヲ得

第二項ノ場合ニ於テハ執達吏又第三項ノ場合ニ於テハ郵便配達人ヲ以下ニ規定スル送達吏ト爲ス

〔解義〕 本條ハ送達ニ關スル一般ノ原則即チ送達ヲ掌ル者及ヒ送達ヲ爲スノ方法ヲ示定セ

送達ニ二種ノ方法アリ曰直接送達曰間接送達是ナリ直接送達トハ訴訟人ヨリ直接執達吏ニ送達ヲ委任スルヲ云ヒ間接送達トハ裁判所書記ヲ經テ執達吏ニ委任スルヲ云フ獨逸法ニ於テハ一般直接ニ送達ヲ採用セリト雖トモ我國ニ於テハ間接送達ノ慣習アリ又法律ニ通曉セサル者ヲ保護セシムルニハ此間接送達ニ因ルニ若カサルナリ是ニ於テカ我立法者ハ間接送達ヲ採用スルコト、爲シ本條第一項ニ於テ送達ハ裁判所書記職權ヲ以テ之ヲ爲サシムト規定セリ故ニ訴訟人ハ送達ス可キ書類ヲ必ス裁判所書記課ニ差出シ裁判所書記ヲ經テ執達吏ニ送達ヲ委任セサル可ラス若シ直接執達吏ニ委任スルトモ送達ノ效アラサルモノトス

裁判所書記ハ其裁判所附屬ノ執達吏ニ送達ノ施行ヲ委任ス可ク又法律上ノ共助ニ依リ送達ヲ施行ス可キ地ヲ管轄スル區裁判所ノ書記ニ送達ノ施行ヲ其地ノ執達吏ニ委任ス可キコトヲ囑託ス就中送達ス可キ地カ他ノ地方裁判所ノ管轄ニ係ルトキハ必ス此囑託ヲ爲ササル可ラス何トナレハ執達吏ハ其所屬區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ管轄區域外ニ於テハ其職務ヲ行フノ權限アラザレハナリ

送達ハ執達吏ヲシテ之ヲ施行セシムルヲ原則ト爲スト雖トモ裁判所書記ハ郵便ニ依リテモ亦送達ヲ爲サシムルコトヲ得ヘシ故ニ裁判所書記ハ執達吏ヲシテ送達ヲ施行セシムルモ又郵便ニ依リテ之ヲ送達セシムルモ殆ソト隨意タリト雖トモ通例其手数料ヲ比較シ執達吏郵便ノ中其手数料ノ少ナキ方ニ因テ送達ヲ爲サシム可キモノナラン然ソトモ急速ヲ要スルモノナルカ又送達ノ煩雜ナル場合ニ於テハ手数料ノ多少ニ拘ラス執達吏ヲシテ施行セシメサル可ラサルコトアリ故ニ此等ニ至テハ一概ニ之ヲ豫定スルコトヲ得サルナリ以上執達吏ヲシテ送達セシムルトキハ執達吏ヲ以テ送達吏ト爲シ又郵便ニ依リテ送達ヲ爲ストキハ郵便配達人ヲ以テ送達吏ト爲スモノトス  
此ニ注意ス可キハ右郵便ニ依ル送達ト第四百四十三條第三項ニ定ムル郵便ニ付スル送達トノ差異之レナリ郵便ニ依ル送達ハ郵便配達人ニ於テ送達手續ヲ爲シ又第五百十一條ノ送達證書ヲ作ルモノニシテ渾テ執達吏ト全一ノ職務ヲ行フト雖トモ第四百四十三條ノ郵便ニ付スル送達ハ通常ノ郵便ト全シテ郵便箱ニ投スルノミニ因リ送達ノ效アルモノニシテ更ニ本法ノ送達手續ヲ行フモノニ非ラサルナリ  
郵便ニ依ル送達ニ付テノ手数料ハ明治二十四年勅令第五十四號ヲ以テ制定セラレタリ

○送達

〔参照〕 獨 第五百二十二條 送達ハ裁判所使吏之ヲナスモノトス  
 代書訴訟ニ於テハ裁判所使吏ニ直接ニ委任スヘキモノトス其他ノ訴訟ニ於テハ原告ノ  
 機定ニ依リ直接ニ其委任ヲナシ又ハ訴訟裁判所ノ裁判所書記ヲ經テ其委任ヲ爲スヘシ  
 獨 第五百十三條 送達ヲナスノ權ヲ裁判所使吏ニ與ヘ及送達ヲ裁判所使吏ニ委任スル  
 ノ權ヲ裁判所書記ニ與ルニハ原告ノ口頭上陳述ヲ以テ足レトス  
 裁判所使吏送達ヲナシタルトキハ反對證ノ舉カレマテハ其送達ヲ原告ノ委任ヲ受ケテ  
 ナシタルモノト看做ス

獨 第五百十四條 裁判所書記ヲ經テ送達ヲナスコトヲ許シタル場合ニ限り裁判所書記  
 ハ必要ナル送達ヲ裁判所使吏ニ委任スヘキモノトス但原告自ラ裁判所使吏ニ委任セシ  
 ト欲スルコトヲ陳述スルトキハ此限ニアラス

第二百二十七條 送達ハ其送達ス可キ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交  
 付ス可キ規定アルトキハ其正本又ハ其謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲シ其他  
 ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス原告若クハ被告數人ノ代理  
 人ニ爲シ又ハ同一ナル原告若クハ被告ノ代理人數人中ノ一人ニ爲ス可  
 キ送達ハ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足ル

〔解義〕 本條ハ送達ス可キ書類ノコト及ヒ當事者若クハ代理人數人アル場合ニ於ケル書類

送達方ヲ示定セリ

送達ハ書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ規定アルルハ正本又ハ謄本ノ交付ヲ  
 以テ爲シ其他ノ場合ニ於テハ謄本ノ交付ヲ以テ之ヲ爲ス

書類ノ正本又ハ認證シタル謄本ヲ交付ス可キ場合ハ本法第六十二條第二百三十八條第  
 四百八條第四百四十四條第四百七十三條第七百九十九條第五百十條等ニ規定セリ

原告若クハ被告數人ニ對シ一人ノ代理者アルル又同一ノ原告ニ對シ數人ノ代理人アル  
 ルハ其中ノ一人ニ謄本又ハ正本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足レトス

本條第二項ノ裏面ヨリ推考スルルハ當事者數人アリテ各自代理人ヲ出スカ自身出廷スル  
 場合ハ各自ニ書類ヲ交付セサル可ラサルハ明カナリ

〔参照〕 獨 第五百十六條 送達ハ公製書ヲ送達スヘキトキハ其交付ヲ以テ之ヲナシ其他

ノ場合ニ於テハ送達スヘキ書類ノ公證ヲ受ケタル謄本ノ交付ヲ以テ之ヲナスモノトス  
 其公製ハ裁判所使吏之ヲナシ代理人ノ擔當ヲ以テ送達スヘキ書類又ハ代書訴訟ニ於テ送  
 達スヘキ書類ニアリテハ代理人之ヲナシ職權ヲ以テ送達スヘキ書類ニアリテハ裁判所書  
 記之ヲナスモノトス

獨 第七十二條 關係者數名ノ代人又ハ代人數名ノ一名ニ送達ヲナスノ際書類ノ公製  
 書又ハ謄本ヲ交付スルヲ要スルトキハ公製書又ハ謄本ノ一通ヲ交付スルヲ以テ足レト  
 ス關係者數名ノ送達受領人一名ニハ關係者ノ員數ニ應スル公製書又ハ謄本ヲ交付スヘキ

○送達

モノトス

第三百二十八條 訴訟能力ヲ有セサル原告若クハ被告ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ之ヲ爲ス

公又ハ私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ又訴ヘラルルコトヲ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ハ其首長又ハ事務擔當者ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル數人ノ首長若クハ事務擔當者アル場合ニ於テハ送達ハ其一人ニ之ヲ爲スヲ以テ足ル

第三百二十九條 豫備、後備ノ軍籍ニ在ラサル下士以下ノ軍人、軍屬ニ對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス

〔解義〕 第三百二十八條ハ訴訟能力ヲ有セサル當事者又ハ公私ノ法人ニ對シ爲ス可キ送達方ヲ示定シ第三百二十九條ハ現役ノ下士兵卒ニ對シ爲ス送達ノコトヲ示定セリ

第三百二十八條 訴訟能力ヲ有セサル當事者ニ對スル送達ハ其法律上代理人ニ爲シ又公私ノ法人又ハ其資格ニ於テ訴ヘ訴ヘラルルコトヲ得ル會社其他ノ社團ニ對スル送達ハ其首長若クハ事務擔當者ニ爲サル可ラス又首長若クハ擔當者數人アルハ其中ノ一人ニ爲スヲ以テ足レリトス

訴訟能力ヲ有セサルハ如何ナル人ナルカ法律上代理人トハ如何ナル人ヲ云フカ又公私ノ

法人若クハ會社社團トハ如何ノ問題ニ付テハ前既ニ解釋セリ

第三百二十九條 現役ノ下士以下ノ軍人、軍屬ニ對スル送達ハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ之ヲ爲ス可キモノトス

現役ノ軍人、軍屬トハ如何ナル人ヲ指稱スルカニ付テモ亦前既ニ解釋セリ

〔參照〕 第三百五十七條 原告告一方ニナスヘキ送達ハ訴訟能力ヲ有セサル人ニ對シテハ其法律上代人ニ之ヲナスモノトス

官署町村及團結並協會ニシテ其資格ヲ以テ出訴シ又ハ出訴セラルルコトヲ得ル者ニアリテハ其長ニ送達スルヲ以テ足レリトス

法律上代人及長ノ數名アル場合ニアリテハ其一名ニ送達スルヲ以テ足レリトス  
獨 第三百五十八條 陸海軍現役ノ下士官又ハ兵卒ニ對スル送達ハ其本屬指令官署ノ長(步兵中隊、騎兵中隊、砲兵中隊等ノ長)ニ之ヲナスモノトス

第四百十條 囚人ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス

〔解義〕 本條ハ已未決囚徒ニ對スル送達ハ監獄署ノ首長ニ之ヲ爲ス可キコトヲ示定セリ

第四百十一條 送達ハ財産權上ノ訴訟ニ付テハ總理代人ニ之ヲ爲シ又商業上ヨリ生シタル訴訟ニ付テハ代務人ニ之ヲ爲スヲ以テ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ効力ヲ有ス

第四百二十二條 訴訟代理人アルトキハ送達ハ其代理人委任ノ趣旨ニ依リ原告若クハ被告ノ代理ヲ爲ス權ヲ有スルトキニ限り其代理人ニ之ヲ爲ス

然レトモ原告若クハ被告ノ本人ニ爲シタル送達ハ其訴訟代理人アルトキト雖モ効力ヲ有ス

〔字解〕 代務人トハ即チ番頭ト云フニ同シ其詳細ハ商法ニ規定セリ

〔解義〕 〔理由〕 第四百四十一條ハ總理代人若クハ代務人ニ送達ヲ爲ス可キ場合ヲ示定セリ

二條ハ訴訟代理人ニ送達ヲ爲ス可キ場合ヲ示定セリ  
第四百四十一條 財産權上ノ訴訟ニ付テハ若シ總理代人アルハ之ニ送達ヲ爲ノ可ナリ又商業上ヨリ生スル訴訟ニシテ若シ代務人アルハ之ニ送達ヲ爲スコトヲ得ヘシ

右總理代人又代務人ニ爲シタル送達ハ原告ノ本人ニ爲シタルト同一ノ効力アラシムルハ必竟送達本人ノ便利ヲ慮カリタルモノナルヲ以テ送達本人ノ了簡ニテ本人ニ送達スルヲ便利トスルキハ素ヨリ之ニ送達スルモ可ナリトス

抑總理代人及ヒ代務人ハ其代理ノ關係ニ於テ恰モ原告ノ法律上代人ニ同シキ者トス故ニ法律上代人ハ財産ノ管理權ヲ有スルニ因テ亦訴訟ヲ爲スノ權利アルカ如ク總理代人(即チ財産ニ關スル一切ノ管理ヲ本人ヨリ委任セラレタル者)及ヒ代務人モ亦訴訟ヲ爲ス

爲メ特別ノ委任ヲ受クルヲ要セサルノミナラス其代務人ノ如キハ商工業ニ關スル事件ハ法律上訴訟ヲ爲シ得ルノ全權アルナリ必竟總理代人又ハ代務人ハ財産ニ關シ若クハ商工業ニ關シ其本人ノ全權ヲ代理シ且既ニ總理委任又ハ代務人タル權利ヲ本人ヨリ付與シタル深密ナル信用アル所ニ因レハ假令重大事件ニ關スルモ授任者ト受任者トノ間既ニ全權ヲ付シアルカ故ニ特更ニ委任ヲ爲スノ必要アラサルナリ從テ送達又ハ訴訟ヲ受クルノ權利及ヒ義務アルト本人ニ異ナル所ナキモノト視認セサル可ラス

第四百四十二條 訴訟代理人アルキ其委任ノ旨趣ニ依リ原告ノ代理ヲ爲ス權アルトキハ之ニ送達ヲ爲スモ可ナリトス然レモ自己ノ選ニ依リ本人ニ送達スルモ素ヨリ不可ナルコトナシトス

訴訟上ノ代理人トナルキハ訴訟上ノ行爲ニ付當然委任サレタルモノト見做ス可キヲ以テ此時ハ其旨趣ヲ探究スルヲ要セス一般之ニ送達スルモ効力アルモノト決セサル可ラス  
〔參照〕 獨 第五百十九條 送達ハ總理代人並ニ商業上ヨリ生シタル訴訟ニ於テハ番頭ニ之ヲナスモ原告本人ニナシタルト同一ノ効力アルモノトス

第四百十三條 受訴裁判所ノ所在地ニ住居ヲモ事務所ヲモ有セサル原告若クハ被告ハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出ツ可シ  
假住所選定ノ届出ハ遅クトモ最近ノ口頭辯論ニ於テ之ヲ爲シ又其前ニ

書面ヲ差出ストキハ其書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

前項ノ届出ヲ爲ササルトキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏員交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達ヲ爲スコトヲ得此送達ハ其書類ノ原告若クハ被告ニ到達スルト否トヲ問ハス又何時ニ到達スルトヲ問ハス郵便ニ付シタル時ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

〔解義〕 本條ハ假住所ヲ選定スルコト及ヒ其選定ヲ怠ルトキノ制裁ヲ示定セリ 訴訟ノ當事者ニシテ受訴裁判所所在地ニ住居又ハ事務所ヲ有セサルハ其所在地ニ假住所ヲ選定シテ之ヲ届出テサル可ラス假住所ヲ選定シテ届出ヲ爲ストハ訴訟中裁判所々在地ノ誰某方ニ假住居スル旨ヲ届出ツルヲ云フ而シテ假住所ヲ届出タリトキ身必ス其住所ニ在ラサルモ可ナリ只裁判所ノ呼出又ハ書類送達アリタルハ假住居ノ宿主ヨリ其通知ヲ受クルコトヲ約シ置キ已ノ失權ヲ招カサルニ注意スルヲ以テ是レリトス然レハ假住所ノ届出アルハ法律上本人ノ常ニ同所ニ在ルモノト看做ス可キヲ以テ同所ニ向ケ書類ヲ送達シタルハ原告本人ニ爲シタルト同一ノ効力アルモノトス而シテ裁判所所在地ニ住スル者ヲ訴訟代理人ト爲スカ又ハ辨護士ヲ差出スルハ蓋シ已ノ假住所ヲ届出サルモ可ナルヘシ右假住所選定ノ届出ハ遅クモ第一ノ口頭辨論ニ於テスルカ又口頭辨論前書面ヲ差出

ス、ア、ル、キ、ハ、其、書、面、ニ、於、テ、セ、サ、ル、可、ラ、ス、即、チ、原、告、ナ、レ、ハ、訴、狀、ニ、被、告、ナ、レ、ハ、答、書、中、ニ、假、住、所、ヲ、定、メ、記、載、セ、サ、ル、可、ラ、ス、區、裁、判、所、ニ、於、テ、口、頭、ヲ、以、テ、訴、ヲ、爲、ス、キ、ハ、其、時、届、出、ヲ、爲、ス、キ、相、當、ト、ス

若シ前ニ掲クル時期ニ於テ届出ヲ爲ササルトキハ裁判所書記又ハ其委任ヲ受ケタル吏員(即チ執達吏)ハ交付ス可キ書類ヲ原告若クハ被告ノ名宛ニテ郵便ニ付シテ送達スルコトヲ得ヘシ是原被告カ假住所ノ届出ヲ怠レルヨリ生スル結果即チ制裁ナリトス

又此場合ニ於テハ郵便ニ付シタル時ヲ以テ原被告へ交附シタルモノト看做ス可キヲ以テ其書類ノ原被告ニ到達スルト否又何時到達シタルヤハ毫モ之ヲ問フ要セサルナリ

然レハ郵便ニ付スルニハ豫メ原被告ノ里程ヲ量リ之ニ相應ナル餘日ヲ與ヘサル可ラス何トナレハ若シ遠隔ノ地ニ在ル者ニ對シ呼出狀ヲ發シタル當日直ニ出頭ヲ命センニハ到底之ニ不能ヲ責ムルモノナレハナリ

然レハ假住所ヲ届出テサルハ元ト已ノ怠慢ニ出ツルヲ以テ之カ爲メ訴訟ヲ遅延シ相手方ニ損害ヲ生スルハ素ヨリ之ヲ辨償セサル可ラサルナリ

又郵便ニ付シテ送達ヲ爲スコトヲ得トアルヲ以テ通常ノ如ク執達吏ニテ送達セシムルモ可ナリトス

又原告被告ヨリ時期ヲ後レ假住所ノ届出ヲ爲シタルハ素ヨリ之ヲ受理セサルノ道理アラサルヲ以テ此以後ノ送達ハ假住所ニ爲ササル可ラサルナリ

〔理由〕 假住所ノ選定ヲ届出テシムルハ送達ノ便利ヲ計リ訴訟ノ速ニ落着センヲ期圖スルニ出ツルモノナリ

〔參照〕 獨 第六十條 原告告訴裁判所ノ所在地及其所在地ノ區裁判所管轄内ニ住居セサル場合ニ於テ其所在地又ハ管轄内ニ住居チ有スル訴訟代人ヲ任セサルトキ裁判所ハ申立ニ依リ原告ニ對シ之ニ送達スヘキ書類ノ領收チ其所在地又ハ管轄内ニ住居チ有スル者ニ委任スヘキコトヲ命スルヲ得此命令ハ豫メ口頭上審問ナクシテ之ヲナスコトヲ得此決議ニ對シテハ不服ヲ申立ルコトヲ得ス

原告獨逸國內ニ住居セサルトキハ豫メ裁判所ノ命令ナキモ送達書受領人ヲ指名スルノ義務アルモノトス但原告第一項ニ記載シタル所在地又ハ管轄内ニ住居チ有スル訴訟代人ヲ任シタルトキハ此限ニアラス

獨 第六十一條 送達受領人ハ裁判所ノ最初ノ審問ノ際之ヲ指名シ又原告豫メ書面ヲ對手ニ送達セシムルトキハ其書面ニ指名スヘキモノトス之ヲナサルトキハ總テ以後ノ送達ハ後日指名スルマテ裁判所使吏其送達スヘキ書面ヲ原告ノ名宛ニテ其住所ニ郵送シテ之ヲナスコトヲ得其送達ハ郵送物ヲ配達シ能ハサルモノトシテ返却スルモ郵便ニ託シタルヲ以テ之ヲナシタルモノト看做ス  
郵送物ニハ原告ノ求メニ依リ増稅ヲ支拂ハンコトヲ陳述スルトキハ書留ノ文字ヲ載スヘキモノトス

第四百十四條 送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受ク可キ人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得然レトモ其人カ其地ニ住居又ハ事務所チ有スルトキ其住居又ハ事務所ノ外ニ於テ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサルシトキニ限り效力チ有ス

第三百二十八條第二項ノ場合ニ於テ特別ノ事務所アルトキハ其事務所ノ外ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ爲シタル送達ハ其受取ヲ拒マサルシトキニ限り效力チ有ス

第四百十五條 送達ヲ受ク可キ人ニ住居ニ於テ出會ハサルトキハ其住居ニ於テスル送達ハ成長シタル同居ノ親族又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ其送達ハ交付ス可キ書類ヲ其地ノ市町村長ニ預置キ送達ノ告知書ヲ作り之ヲ住居ノ戸ニ貼附シ且近鄰ニ住居スル者二人ニ其旨ヲ口頭ヲ以テ通知シテ之ヲ爲スコトヲ得

第四百十六條 住居ノ外ニ事務所チ有スル人ニ對スル送達ハ事務所ニ於



テ之ニ出會ハサルトキハ其事務所ニ在ル營業使用人ニ之ヲ爲スコトヲ得此規定ハ辯護士ニモ亦之ヲ適用ス但此場合ニ於ケル送達ハ筆生ニモ亦之ヲ爲スコトヲ得

第四百十七條 第三百二十八條第二項ノ場合ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニ於テ出會ハス又ハ此等ノ者受取ニ付キ差支アルキハ送達ハ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得  
第四百十八條 前二條ノ規定ニ從ヒ送達ヲ施行スルコトヲ得サルトキハ第四百十五條第二項ニ準シ送達ヲ爲スコシ但住居ニ於ケル送達ヲ施行スルヲ得サルコトノ明白ナルトキニ限ル  
前項ノ場合ニ於テハ送達告知書ノ貼附ハ事務所又ハ住居ノ戸ニ之ヲ爲ス

第四百十九條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受取ヲ拒ムトキハ交付ス可キ書類ヲ送達ノ場所ニ差置ク可シ

第五百十條 日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニハ執達吏ノ爲スコキ送達ハ裁判

官ノ許可ヲ得ルトキニ限り施行スルコトヲ得

前項ノ規定ハ郵便ニ付シテ爲ス送達ヲ除ク外ハ夜間ニ爲スコキ送達ニ之ヲ適用ス夜間トハ日没ヨリ日出マテノ時間ヲ謂フ

右ノ許可ハ受訴裁判所ノ裁判長又ハ送達ヲ爲スコキ地ヲ管轄スル區裁判所ノ判事之ヲ與ヘ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ完結ス可キ事件ニ在テハ其判事之ヲ與フ

許可ノ命令ハ認證シタル謄本ヲ以テ送達ノ際之ヲ交付ス可シ

本條ノ規定ヲ遵守セサル送達ハ之ヲ受取リタルトキニ限り効力ヲ有ス

〔解義〕 第四百十四條ハ送達ノ場所ニ關シ第四百十五條乃至第四百十八條ハ送達ノ補充ニ

關シ第四百十九條ハ受取ノ拒否ニ關シ第五百十條ハ送達ノ日時ニ關シ示定セリ

第四百十四條 送達ハ送達ヲ受ク可キ名宛人ニ爲スヲ以テ主眼トナス故ニ何レノ場所ニテモ其人ニ出會ヒタル地ニ於テ之ヲ爲シ得ヘキナリ然レモ其人其出會ヒタル地ニ住居又ハ事務所ヲ有スルト例ヘハ全所ノ旅舎ニ於テ送達スル時ノ如キハ其人其受取ヲ拒マサル

其地ニ住居若クハ事務所ヲ有スル場合ニ於テ其受取ヲ拒ムルハ其居所又ハ事務所ニ送達セサル可ラズ

○送 達

百九十六

若シ住居者クハ事務所外ノ地ナルニ猶ホ之カ受取ヲ拒ムルハ第四百四十九條ニ從ヒ交付ス可キ書類ヲ其場所ニ差置クノミニ因リ送達ノ効アル者トナス  
本條ニ之ヲ爲スコトヲ得トアリ故ニ初メヨリ住居又ハ事務所ニ送達スルハ送達執行人ノ隨意ナリトス

又本法第三百三十八條第二項ノ公私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ訴ラル、チ得ル會社又ハ社團ニ對スル送達ニ付テハ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ於テ其受取ヲ拒マサルルニ限リ事務所外ノ送達ヲナスモ其効アルモノトス

第四百四十五條 送達ヲ受ク可キ人住居ニ在ラサルトキ又在宅スルモ之ニ直接スルコト能ハサルルハ成長シタル同居ノ親族若クハ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ  
成長シタルトハ丁年者ト云フノ義ニアラス假令未丁年者ニテモ送達ノ何物タルチ理會スルホトニ成長セハ足レリトス

同居ノ親族トアリ故ニ別居ノ親族其當時偶々來合シ居リタリトテ之ニ交付スルモ効ナシ必ス平生同居シテ寢食ヲ共ニスル親族ナラサル可ラス  
雇人トハ現ニ使役セラルル者ニシテ又常ニ雇ハレ居ル者ヲ云フ故ニ偶々日雇ニ來レル者ニ送達ヲ爲スルハ其効ナシトス

若シ送達ヲ受ク可キ者學家他出シ之ニ送達ヲ爲ス能ハサル等ノ場合ニ於テハ交付ス可キ書類ヲ其地所轄ノ市町村長ニ附託シ之ト同時ニ附託ノ告知書ヲ作り其者ノ住居ノ門戸ニ貼附シ且郵信ニ名ニ口頭ヲ以テ其趣ヲ通知スルトキハ猶ホ送達ノ効アリトス  
第四百四十六條乃至第四百四十八條 住居ノ外ニ事務所チ有スル人即チ商工營業人等ニ對スル送達ハ亦其事務所ニテ爲スコトヲ得ヘシ而シテ若シ事務所ニテ本人ニ遭ハサルキハ其事務所ニ在ル代務人、使用人其他ノ雇人ニ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ又辨護士ニ於テ事務所チ有スルキモ同一ナリトス但辨護士ノ事務所ニテ本人ニ遭ハサルキハ其筆生ニ之ヲ爲スモ亦効アリトス

第三百三十八條第二項公私ノ法人及ヒ其資格ニ於テ訴ヘ訴ラル、會社又ハ社團ニ對スル場合ニ於テ法律上代理人又ハ首長若クハ事務擔當者ニ事務所ニテ出會ハス又此等ノ者受取ニ差支アルトキモ事務所ニ在ル他ノ役員又ハ雇人ニ之ヲ爲シテ効アリトス  
右住所外ニ事務所チ有スル者及ヒ第三百三十八條第二項ノ場合ニ於ケル法律上代理人首長又ハ事務擔當者ニ對シ前ノ規定ニ從ヒ送達ヲ爲ス能ハサルキハ第四百四十五條第二項ニ準シ送達スルコトヲ得ヘシ然レハ此場合ニ於テハ住居ニ於テ送達ヲ爲シ能ハサルキニ限レリ  
又此場合ニ於テハ送達告知書ハ事務所又ハ住居ノ戸ニ之ヲ貼附スルモノトス

第四百四十九條 名宛本人ニ於テ之ヲ受取ラサルカ又前掲クル所ノ同居ノ親屬雇人其他營業使用人等ニ於テモ受取ヲ拒ムルハ交付ス可キ書類ヲ其場所ニ差置クノミヲ以テ送達ノ効アリトス  
然レハ名宛違ナルカ別居ノ親族ナルカ又雇人營業使用人等ニ非ラサル等正當ノ事由アル

○送 達

百九十七

其ハ之ニ送達スルモ素ヨリ其効ナキモノトス  
第百五十條 本條ハ一讀明了ニシテ解釋ヲ要セス

〔參照〕 獨 第百六十五條 送達ハ何レノ地ヲ問ハス送達ヲ受クヘキ人ニ出會フ所ニテ之ヲナスコトヲ得

其人此地ニ住所又ハ職業場チ有スルトキ其住所又ハ職業場外ニ於テ之ニナシタル送達ハ其受領ヲ拒絶セザルトキニ限リ効力チ有スルモノトス

獨 第百六十六條 送達ヲ受ク可キ人ノ住所ニ於テ之ニ出會ハザルトキ其住所ニ於テチナシタル送達ハ家族ニ屬スル成丁ノ同居人又ハ家族ニ傭役セラル者ニ之ヲナスコトヲ得此等ノ人ニ出會ハザルトキ其送達ハ同家ニ住居スル家主又ハ貸家主其書類ノ受領ヲ肯スルトキ之ニナスコトヲ得

獨 第百六十七條 此規定ニ從ヒ送達ヲナスコトヲ得ヘカヲザルトキ其送達ハ交付スヘキ書類ヲ送達地ノ管轄區裁判所ノ書記局又ハ此地ノ郵便局又ハ町村長又ハ警察長ニ預ケ置キ告知書ヲ住所ノ戸ニ貼付シテ其預ケ置キタルコトヲ通知シ並ニ成ルヘク隣佑二名ニ口頭上通知シテ之ヲナスコトヲ得

獨 第百六十八條 特別ノ職業場チ有スル營業人ニナス送達ハ其職業場ニ於テ之ニ出會ハザルトキハ其場内ニ在居スル營業手傳人ニ之ヲナスコトヲ得  
送達ヲ受クヘキ代理人ニ其職業場ニ於テ出會ハザルトキ其送達ハ其場内ニ在居スル手傳

人又ハ書記ニ之ヲナスコトヲ得

獨 第百六十九條 送達ヲ受クヘキ法律上代人又ハ官署町村團結又ハ協會ノ長ニ其事務所ニ於テ通常ノ執務時間ニ出會ハザルトキ又ハ受領ニ差支アルトキ其送達ハ其事務所内ニ在居スル官吏又ハ傭使ニ之ヲナスコトヲ得

法律上代人又ハ長ニ其住所ニ於テ出會ハザルトキハ別段ノ事務所アルトキニ限リ第百六十六條第百六十七條ノ規定ヲ適用ス

獨 第百七十條 法律上ノ理由ナクシテ送達ノ受領ヲ拒ムトキ其交付スヘキ書類ハ之ヲ送達ノ場所ニ差置クヘキモノトス

獨 第百七十一條 日曜日及一般ノ祭日ニハ裁判官ノ許可アルニアラサレハ送達ヲナスコトヲ許サス但郵便ニ託シテ送達スル場合ハ此限ニアラス

其許可ハ訴訟裁判所ノ裁判長之ヲナスモノトス亦其許可ハ送達ヲナスヘキ地ノ管轄區裁判官之ヲサシ及受命裁判官又ハ受託裁判官ノ完結スヘキ事件ニアリテハ此裁判官之ヲナスコトヲ得

其許可ヲナス命令ハ送達ノ際謄本ヲ以テ之ヲ交付スヘキモノトス  
本條ノ規定ヲ遵守セザル送達ハ其受領ヲ拒マザルトキ効力ヲ有スルモノトス

第百五十一條 送達ニ付テハ之ヲ施行スル吏員ハ送達ノ場所、年月日時、方法及受取人ノ受取證竝ニ送達吏ノ署名捺印ヲ具備スル證書ヲ作ル

○送達

ユトト要ス

受取人受取ヲ拒ミ若クハ受取證ヲ出タスコトヲ拒ミタルトキ又ハ受取證ヲ作ルコト能ハサル旨ヲ述フルトキハ之ヲ送達證書ニ記載ス可シ

第四百四十三條第三項ノ場合ニ於テハ郵便ニ付シタル吏員ノ報告書ヲ以テ送達ノ證ト爲スニ足ル

第五百二十二條 外國ニ在ル本邦ノ公使及ヒ公使館ノ官吏竝ニ其家族、從者ニ對スル送達ハ外務大臣ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第五百二十三條 前條ノ場合ヲ除ク外外國ニ於テ施行ス可キ送達ハ外國ノ管轄官廳又ハ外國ニ駐在スル帝國ノ公使又ハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第五百二十四條 出陣ノ軍隊又ハ役務ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル人ニ對スル送達ハ上班司令官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スコトヲ得

第五百五十五條 前三條ノ場合ニ於テ必要ナル囑託書ハ受訴裁判所ノ裁判長之ヲ發ス

送達ハ囑託ヲ受ケタル官廳又ハ官吏ノ送達施行濟ノ證書ヲ以テ之ヲ證

ス

〔解釋〕 第五百五十一條ハ送達證書ニ關シ第五百五十二條ハ外國ニ派遣セラル、本邦公使及公使館ノ官吏及ヒ其他ノ從屬者ニ對スル送達ニ關シ第五百五十三條ハ外國ニ於テ施行スル送達ノ事ニ關シ第五百五十四條ハ出陣ノ軍隊又ハ公務ニ服スル軍艦ノ乗組員ニ對スル送達ニ關シ第五百五十五條ハ前三條ニ於ケル囑託書ヲ發スル人ニ付キ之ヲ示定セリ

第五百五十一條乃至第五百五十五條ハ行文明瞭ニシテ別ニ解釋ヲ要セス

〔參照〕 獨 第四百七十四條 送達證書ニハ左ノ件々ヲ記載スヘシ

第一 送達ノ場所及日時  
第二 送達ヲナサシムヘキ人又職權ヲ以テ送達シタルトキハ其命令ヲ發スル裁判所

第三 送達ヲ受ク可キ人  
第四 送達ヲ受ケタル人又第四百六十六條第四百六十八條第四百六十九條ノ場合ニ於テハ其者ニ送達ヲナシタルコトヲ至當トスル理由第四百六十七條ニ依リ處分ヲナシタルトキハ同條ニ記載セシ規定ヲ遵守シタルノ方法

第五 受領シ拒ムノ場合ニ於テハ其旨及交付スヘキ書類ヲ送達ノ場所ニ差置キタルコト  
第六 送達スヘキ書類ノ公製書又ハ謄本及送達證書ノ謄本ヲ交付シタルコト  
第七 送達ヲナス官吏ノ署名

第四百七十五條 郵便ニ託シテ送達(第四百六十一條)ヲナシタルトキ其送達證書ハ前條

○送達

第二第三第七本規定ニ適シキモノトシテ其他其證書ヲ以テハ何レノ日時ニ於テ何レノ名宛キテ及何レノ郵便所ニ託シタルヤヲ判然ス可シ

獨六第百八十二條 外國ニ於テナスヘキ送達ハ外國ノ權限ヲ有スル官署又ハ外國ニ在留スル獨逸國ノ領事又ハ公使ニ依頼シテ之ヲナスモノトス

獨七第百八十三條 治外法權ノ權利ヲ有スル獨逸人ニ對スル送達ハ其獨逸人獨逸國ノ派出官ニ屬スルトシテハ獨逸宰相ニ依頼シテ一邦ニ派出官ニ屬スルモノハ其邦ノ外務卿ニ依頼シテ之ヲナスモノトス

獨八第百八十四條 外國ニ在留スル軍隊又ハ出陣ノ軍隊又ハ戰役ニ服シタル軍艦ノ乗組員ニ屬スル者ニ對シテハ送達ハ其所屬指令官署ニ依頼シテ之ヲナスコトヲ得

獨九第百八十五條 必要ナル依頼書ニ訴訟裁判所ノ裁判長之ヲ發スルモノトシテ送達ハ依頼書受ケタル官署又ハ官吏ノ送達ヲ受ケタル旨ノ證書ヲ以テ之ヲ證明スルモノトス

獨十第百八十六條 原告若シハ被告ノ現在地知レザルトキ又ハ外國ニ於テ爲ス可キ送達ニ付テハ其規定ニ從テ之ヲ行フ能ハズ若シハ之ニ從フモ其效ヲ得ズトシテ豫知スル下キハ其送達ハ公ニ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第百五十七條 公示送達ハ原告若シハ被告ノ申立ニ因リ裁判所ノ命ヲ以テ裁判所書記之ヲ取扱フ

此送達ハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ揭示板ニ貼附シテ之ヲ爲ス判決及ヒ決定ニ在テハ其裁判ノ部分ノミヲ貼附ス可シ

右ノ外裁判所ハ送達ス可キ書類ノ抄本ヲ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載ス可キヲ命スルコトヲ得其抄本ニハ裁判所ノ當事者並ニ訴訟物及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ掲グルルコトヲ要ス

第百五十八條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四日ヲ經過シタル日ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス然レハ裁判所ハ公示送達ヲ命ズルニ際シ此ヨリ長キ期間ヲ必要トスルトキハ相當ナル期間ヲ定ムルコトヲ得 同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若シハ被告ニ對シ爲ス其後ノ公示送達ハ貼附ヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

〔解義〕 第百五十六條乃至第百五十八條ハ公示送達ノ爲メ場合及ヒ其方法ヲ示定セリ 第百五十六條 他ノ送達ニ因テ爲シ能ハズ又ハ爲スノ目的ヲ止ムヲ得サル場合ニ於テ法律ハ之ノ公示送達方法ヲ設クテ以テ本人ニ送達シタルト同一ノ効アラシメリ 原告若シハ被告ノ居所不明ナル中又ハ外國ニ於テ爲テ可キ送達ヲ通常方法ヲ以テ實行シ

得ス或ハ送達スルモ其効ヲ奏スルノ見込アラサルハ公示送達ヲ爲スコトヲ得ヘキナリ而シテ此公示送達ハ本來送達ノ補充方法ニ過キサルモノトス

原告若クハ被告ノ現在地知レサルトキトハ獨リ本人ノミナラス若シ代人アルハ代人ノ現在地モ亦不分明ナラサル可ラス故ニ本人ノ現在地分明ナラサルモ法律上代人又ハ訴訟代人アリテ其居所分明ナルハ之ニ送達セサル可ラス又代人ノ現在地分明ナラサルモ本人ノ現在地分明ナレハ固ヨリ之ニ送達ス可キナリ

而シテ現在地ノ不分明ト否トニ付テハ裁判所ノ意見ニ任ス可シト雖ニ一般之ヲ請求スル者ヨリ其不明ヲ證明セサル可ラス

又本條ハ現ニ起レル訴訟ニ加入セシメサル可ラサル者ニ對シテモ適用ス可キナリ(本法第五十九條以下)

第五十七條 公示送達ハ原告若クハ被告ヨリ申立アルルキ之ヲ審案シ其事由アリト認ムルルキ之ヲ允許スルモノニシテ若シ之ヲ允許セシキハ裁判所書記職權ヲ以テ其手續ヲ爲スモノトス

若シ裁判所ニ於テ其申立ヲ却下シタルルハ之ニ對シ抗告ヲ爲シ得ヘキナリ(本法第四百五十五條)

然レハ本法第二百四十五條末項ニ定ムル場合ノ如ク裁判所ノ職權ヲ以テ爲ス送達ニ付テハ決シテ當事者ノ申立アルヲ要セサルナリ

而シテ公示送達ヲ爲スニハ交付ス可キ書類ヲ裁判所ノ掲示板ニ貼附シテ之ヲ爲シ若シ判決決定ナルルハ其裁判ノ部分ノミヲ貼附スヘキモノトス又右ノ外裁判所ニ於テ書類ノ抄本ヲ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ一回又ハ數回掲載ス可キモノト認メタルルハ之ヲ命シ得ヘキナリ而シテ其抄本ニハ裁判所ノ稱號、當事者ノ氏名、訴訟物件及ヒ送達ス可キ書類ノ要旨ヲ掲記セサル可ラス

右送達ス可キ書類中ニハ呼出狀モ包含セルハ明カナリ新聞紙ニ掲載スルノ必要ハ却テ此場合ニ存セリ

第五十八條 公示送達ハ書類ノ貼附ヨリ十四日ヲ經過シタルルハ之ヲ爲シ了レルモノトナス然レハ裁判所ハ場合ニ依リ之ヨリ長キ期間ヲ定ムルコトヲ得ヘキナリ

又同一ノ事件ニ付キ同一ノ原告若クハ被告ニ對シ公示送達ヲ爲スニハ貼附ノミヲ以テ之ヲ爲シタルモノト看做ス

〔參照〕 獨 第八十六條 原被告一方ノ滞在所不明ナルトキ其送達ハ公告ヲ以テ之ヲナスコトヲ得

公告ヲ以テスル送達ハ外國ニ於テナスヘキ送達ノ場合ニ於テ其送達ノ爲メ存スル規定ヲ遵守スルコトヲ得ヘカラサルトキ又ハ之ヲ遵守スルモ其効ナシト認ムルトキニモ亦之ヲ許スモノトス

獨 第八十七條 公告ヲ以テスル送達ハ原被告ノ申立ニ依リ訴訟裁判所之ヲ許可シタ

○期日及期間

ル後裁判所書記職權ヲ以テ之ヲサスモノトシ其申立付テ之ヲ裁決ハ豫メ口頭上審問ナクシテ之ヲ言渡スコトヲ得

公告ヲ以テスル送達ハ送達スヘキ書類ノ公證アル原本ヲ裁判所ノ掲示板ニ貼付シテ之ヲナスモノトス其書類ニ喚出ヲ掲クルトキハ其他訴訟裁判所ノ所在地ニ於テ官報ヲ載スル公告紙ニ其書類ノ抜書ヲ二回記載シ并ニ獨逸官報ニ一回記載スルヲ要ス

訴訟裁判所ハ其抜書ヲ尙ホ其他ノ公告紙ニ撤回記載スヘキコトヲ命スルヲ得

獨逸官報ニ載ル者ノ出廷スヘキ日時ヲ記載スヘキモノトス

獨逸官報ニ載ル者ノ出廷スヘキ日時ヲ記載スル書類ハ其抜書ヲ公告紙ニ最後ニ記載シタルヨリ一月ヲ經過シタル日ニ之ヲ送達シタルモノト看做ス訴訟裁判所ハ公告ヲ以テスル送達ヲ許可スルノ際二月ヨリ長キ期限ノ經過ヲ必要ナラトシテ言渡スコトヲ得

書類ニ喚出ヲ掲ケサル場合ニ於テ其書類ハ之ヲ裁判所ノ掲示板ニ貼付シタルヨリ二週ヲ經過シタルトキ之ヲ送達シタルモノト看做スヘキモノトス

貼付スヘキ書類ヲ早ク貼附ノ場所ヨリ取除クモ送達ノ効力ヲ變更セサルモノトス

第三節 期日及期間

第一百五十九條 期日ハ裁判長日及時ヲ以テ之ヲ定ム

第一百六十條 期日ハ已テ得サル場合ニ限り日曜日及ヒ一般ノ祝祭日ニ之

ヲ定ムルコトヲ得

第六十一條 期日ニ付テノ呼出ハ裁判長ノ命ニ從ヒ裁判所書記正本ノ

送達ヲ以テ之ヲ爲ス但在廷シタル者ニ期日ヲ定メ出頭ヲ命シタルトキ

ハ之ヲ送達スルコトヲ要セス

第六十二條 期日ハ裁判所内ニ於テ之ヲ開ク但臨檢又ハ裁判所ニ出頭

スルニ差支アル人ハ審問其他裁判所内ニ於テ爲スコトヲ得サル行爲ヲ

要スルトキハ此限ニ在ラス

第六十三條 期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マル

原告若シハ被告カ期日ノ終ニ至ルマテ辯論ヲ爲ササルトキハ期日ヲ怠

リタルモノトシ看做ス

〔注解〕 期日ハ訴訟裁判所ノ於テ訴訟關係アル行爲ヲ行フカ爲メノ指定日時ヲ云ヒ期間トハ

其定メ行爲ヲ爲ス或ハ準備スル爲メ與ル所ノ時間ヲ云フ

〔解釋〕 第一百五十九條ノ期日ハ裁判長之ヲ定ム可キモノトシ第六十條ハ日曜日ノ祝祭日ニ

期日ヲ定ムル場合ヲ第六十一條ハ期日呼出ノ方法ニ付テ第六十二條ハ期日開廷ノ

○期日及期間

○期日及び期間

第五百五十九條 期日ハ指定ハ裁判長ノ職權ニ屬シ且期日ハ日及び時ヲ以テ定ムルモノナ  
期日ノ指定ハ概テ當事者ヨリ相手方ノ呼出ヲ請求スルニ因テ起ルモノニシテ即チ相手人  
其他訴訟ニ關係スル人(從參加人、訴訟告知人)ニ對スル呼出ヲ請求シ裁判長ニ於テ之カ  
期日ヲ指定シ而シテ後チ呼出ノ取扱コ及ハシムルモノナリ  
裁判長ニ於テ期日ヲ指定スルト雖モ本法中之カ例外ニ屬スルモノアリ即チ本法第三百七  
十八條之ナリ

抑原告ノ一方ヨリ相手方又ハ訴訟關係人ノ呼出ヲ請求スルモハ一應之カ呼出コ及フヲ  
以テ原則トナス何トナレハ裁判所ハ訴訟ニ於テ陳述スル所ヲ聽キ始テ判決ヲ爲ス可キモ  
ノナレハナリ獨リ特例トシテ本法ニ掲グルモノハ第七百十五條之ナリ  
期日示定ノ權ハ特リ裁判長ノニナラス區裁判官受命判事受託判事ニモ亦屬スヘキナリ  
(本法第七百七十二條)

裁判長期日ヲ指定スルニハ須ラク現場ノ景況及ヒ法律上最短ノ期限ニ注意シ若シ又訴訟  
入ヨリ特別ノ申立アルトキハ之ヲ參酌シテ定ムヘキナリ(本法第九十四條第九十  
九條第三百七十三條第三百七十七條第三百九十四條第四百三條第四百四十條第四百九十六  
條)  
言渡シタル裁判(判決、決定)ニ指定セル所ノ期日ノ爲メニハ特ニ呼出ヲ要セス(本法第百

六十一條)又口頭審理ノ席ニ於テ言渡シタル期日ハ呼出ノ代用ヲ爲スモノナリ然レモ本  
法第二百五十二條第二百五十四條第二百六十九條ニ定ムル場合ニ於テハ缺席スル者ヲ新  
定ノ期日ニ呼出サ、元可シサルナリ職權ヲ以テ期日ヲ延期シ若クハ更改シ又ハ豫メ審理  
期日ヲ言渡サスシテ之ヲ中止シ若クハ開テタル審理ヲ再々開クトキハ之ニ關スル決議又  
ハ命令ヲ送達シ原被告ニ其期日ヲ指定スルモノナリ本法第二百一十一條第二百二十二條第百  
二十四條第二百四十五條第二百七十七條第二百七十八條第二百八十二條第二百八十六條之  
ナリ  
第三百六十條 已チ得サル場合(急速ヲ要スル事件)ノ外日曜日、祝祭日ヲ期日トナサル  
モノトス

第三百六十一條 本條ハ一讀明了ニシテ解釋ヲ要セス  
第三百六十二條 期日ハ、訴訟ニ於テ開始シ終了スルモノトス然レモ臨檢又ハ裁判所ニ出頭  
スルニ差支アル等ノ爲メニ訴訟ニテ審問ヲ爲ス能ハサルモハ例外ニ屬スルモノトス(本  
法第三百七十七條第三百五十七條以下第二百九十六條第三百十八條)  
第三百六十三條 期日ノ開延ハ事件ノ呼上即チ認延ノ呼込ヲ以テ始マルモノナリ  
原告若ハ被告ニ於テ期日ヲ終リニ至ルマテ出頭セサルカ又ハ出頭スルモ辯論セサルモ  
期日ヲ怠リタル者トナシ缺席裁判ヲ言渡スヘキナリ(本法第七十三條第二百四十六條)  
期日ハ指定シタル時刻前事件ヲ呼上ヲ爲ス可ラス又時刻ニ至リ一旦之ヲ呼上ケタルモ事

○期日及び期間



○期日及ヒ期間

務ノ都合ニ依リ他ノ時刻ニ審問ヲ延ハシ得ヘキナリ(第百六十九條)  
以上期日ノ開始ハ裁判長ノ爲スヘキ公式ノ規則ナリ(本法第百九條)

期日ノ終ニ至ルマテトハ期日審理ノ終了ナルマテト解釋セサル可ラス故ニ適當ノ時期ニ呼上ヲ爲シタル時原被告ノ一方ノモ出廷シアリテ且審理ヲ受クルニ方リ其缺席スル一方遲参シタル場合ニ於テ裁判長未タ審理ノ終結ヲ言渡サ、ル間ナレハ其缺席ノ懲戒ヲ爲シ能ハサルナリ又一旦終結シタル審理ヲ再開スル時遲参スル場合モ同一ニ決定セサル可ラス

原被兩造共ニ出廷セサルハ本法第百八十八條ニ依リ訴訟ヲ休止ス可ク若シ又兩造遲参スルハ其當日之ヲ審理スルト否トハ裁判所ノ斟酌ニ任ス可キナリ(本法第百六十九條)

〔理由〕 第百五十九條ニ於テ期日ノ指定ヲ裁判長ノ權内ニ委シタル所以ハ裁判所ニ於テ事務整理ヲ確保シ且事件ノ景况ノ異同ニ從テ能ク之ヲ斟酌處理セシメシカ爲メナリ

〔參照〕 獨 第百九十三條 喚出狀ハ裁判期日ヲ定ル爲メ裁判所書記ニ之ヲ呈出スヘキモノトス

裁判期日ノ定メハ二十四時内ニ裁判長之ヲナスモノトス日曜日及一般ノ祭日ハ已ムヲ得決ル場合ニ限リ之ヲ裁判期日トシテ定ムヘキモノトス

獨 第百九十五條 裁判言渡ヲ以テ定メタル裁判期日ニアリテハ原被告ノ喚出ヲ要セス獨 第百九十六條 裁判期日ハ裁判所ニ於テ之ヲ開クモノトス但實地ノ檢證處分又ハ差

支アルカ爲メ裁判所ニ出廷スルヲ得サル人ノ審問又ハ其他裁判所ニ於テナスコトヲ得ヘカラサル處分ヲ要スルトキハ此限ニアラス

各邦君主及其家親並ニ「ヤーヘンツォル」公家ノ家族ハ親ヲ裁判所ニ出廷スルノ義務ナキモノトス

獨 第百九十七條 裁判期日ハ事件ノ喚上ヲ以テ始マルモノトス

裁判期日ハ原被告ノ一方其終リマテ辯論セサルトキハ其一方ニ於テ之ヲ怠リタルモノトス

第百六十四條 裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間ノ進行ハ期間ヲ定メタル書類ノ送達ヲ以テ始マリ又其送達ヲ要セサル場合ニ於テハ期間ノ言渡ヲ以テ始マル但期間指定ノ際此ヨリ遲キ起期ヲ定メタルトキハ此限ニ在ラス

〔解義〕 本條ハ期間經過ノ起點ニ付キ示定セリ

期間ハ一定ノ行爲ヲ爲シ或ハ準備スル爲メ與フル所ノ時間ニシテ二種アリ則チ裁判官ノ定ムル期間ト法律上ノ期間ト之ナリ

法律上ノ期間トハ法律ニ於テ一定ノ時間又ハ最多限若クハ最少限ヲ付シタル時間ヲ豫定スルモノニシテ此期限ニ屬スル重ナルモノヲ舉クレハ左ノ如シ

○期日及ヒ期間

○期日及ヒ期間

第一 就審期限即チ書面(訴狀、控訴狀、上告狀)ノ送達ト口頭審理ノ期日トノ間ニ存スル期限(本法第九十四條第三百七十七條第四百三條第四百四十條第四百九十六條)

第二 呼出期限即チ各裁判所ニ於テ呼出狀ノ送達ト出廷期日トノ間ニ存スル期限(本法第六十一條)

第三 準備書面ノ送達期限(本法第九十九條第四百三條)

第四 不變期限即チ伸縮ス可ラサル一定ノ期限即チ故障申立、控訴、上告、即時抗告及ヒ再審、除權判決ニ關スル不服訴訟、仲裁々判役ノ判定ニ對スル不服訴訟ニ付キ規定セル期限之ナリ(本法第二百五十五條第四百三十七條第四百六十六條第四百七十四條第四百七十七條第四百七十五條第四百八十四條)

而シテ裁判官ノ定ムル期間トハ即チ裁判官ノ指定スル所コソテ而カモ其期限ノ長短ニ付テハ法律ヲ以テ之ヲ明示シ又ハ法律ヲ以テ許ルシアル制限内ニ於テ裁判官任意ニ斟酌シ得ヘキモノ是ナリ之ニ屬ス可キハ答辨期限呼出期限準備書面ニ付キ定ムル期限ナリ又法律上期限ハ裁判官ノ指定ヲ待テ進行ヲ始ムルモノニアラズシテ必スヤ法律ニ依リ一定ノ行為ニ直接ニ係累シテ始マルモノトス之ニ屬スルモノハ不變期限、原狀回復ノ期限、事實ノ更正、裁判追補、辨償督促命令ニ對スル異議ノ申立等ナリ(第七十五條第三百八十六條)而シテ此二種ノ區別ハ本法第七十條ニ依テ見ルモ又明カナリ

本條ハ裁判所又ハ裁判官ノ定ムル期間ノ進行ハ別ニ期間ニ付キ指定スルコトナキハ書類

ノ送達ヲ以テ始マリ又其送達ヲ要セサル場合ニ於テハ期間ノ言渡ヲ以テ始マルトアリ即チ本條ハ裁判所又ハ裁判官ノ定ムル期間ノミニ付テ定ムルモノニシテ法律上ノ期間ニ付テ定ムルモノニアラサルナリ法律上期間ハ常ニ書類ノ送達ニ依テノミ始マルモノトス

又期間ハ一方ニ對スル而已ナラス雙方ニ對シ進行スルモノナリ又書類ノ送達ニ因テ期間進行スルコトハ其言渡ノ適法ナルヲ要ス若シ送達ノ不完備ナルトハ雙方ニ對シ期間ノ進行ヲ始メサルナリ

〔參照〕 獨 第九十八條 裁判官ノ定ムヘキ期限ノ經過ハ其確定ノ際別段ノ定メアルニアラサレハ期限ヲ確定シタル書類ノ送達ヲ以テ始マリ其送達ヲ要セサルトキハ期限ノ言渡ヲ以テ始マルモノトス

送達ヨリ起算スル法律上ノ期限又ハ裁判官ノ定ムヘキ期限ノ經過ハ送達ヲナサシメタル原告ニ對シテモ亦其送達ヲ以テ始マルモノトス

第六十五條 期間ヲ計算スルニ時ヲ以テスルモノハ即時ヨリ起算シ又日ヲ以テスルモノハ初日ヲ算入セス

第六十六條 一日ノ期間ハ二十四時トシ一個月ノ期間ハ三十日トシ一今年ノ期間ハ曆ニ從フ

期間ノ終カ日曜日又ハ一般ノ祝祭日ニ當ルトキハ其日ヲ期間ニ算入セ

○期日及ヒ期間

ス

第六十七條 法律上ノ期間ハ裁判所ノ所在地ニ住居セサル原告若クハ被告ノ爲メ其住居地ト裁判所所在地トノ距離ノ割合ニ應シ海陸路八里毎ニ一日ヲ伸長ス八里以外ノ端數三里ヲ超ユルトキモ亦同シ  
 裁判所ハ外國又ハ島嶼ニ於テ住所ヲ有スル原告若クハ被告ノ爲メ特ニ附加期間ヲ定ムルコトヲ得

〔解義〕 第六十五條及第六十六條ハ期間ノ計算方ニ付キ又第六十七條ハ裁判所所在地以外ニ住居スル原告ノ爲メ法律上期間ノ外若干ノ期間ヲ與フルコトニ付キ示定セリ右三條ハ行文明瞭ニシテ解釋ヲ要セス

〔參照〕 獨 第九十九條 日ヲ以テ定メタル期間ノ計算ニハ其期限ノ始マルヘキ時ニ方ル日又ハ事故ノアル日ヲ算入セサルモノトス

獨 第二百條 週又ハ月ヲ以テ定メタル期限ハ名稱又ハ數ニ於テ最初期限ノ始マリタル日ニ應スル末週又ハ末月ノ日ノ經過ヲ以テ終ルモノトス此日末月中ニ存セザルトキ其期限ハ此月ノ最終日ノ經過ヲ以テ終ル  
 期限ノ終リ日曜日又ハ一般ノ祭日ニ當ルトキ其期限ハ其次ノ常日ノ經過ヲ以テ終ルモノトス

第六十八條 期間ノ進行ハ裁判所ノ休暇ニ依リテ停止ス其期間ノ殘餘ノ部分ハ休暇ノ終リ以テ其進行ヲ始ム期間ノ初カ休暇ニ當ルトキハ其期間ノ進行ハ休暇ノ終リ以テ始マル  
 前項ノ規定ハ不變期間及ヒ休暇事件ノ期間ニハ之ヲ適用セス不變期間ハ此法律ニ於テ不變期間トシテ掲ケタル期間ニ限ル休暇事件トハ裁判所構成法第二百二十八條、第二百二十九條ニ掲ケタル事件ヲ謂フ

〔解義〕 本條ハ法律上ノ期限及ヒ裁判官ノ指定スヘキ期限ノ起始及ヒ經過ニ對シテ裁判所ノ影響ヲ及ボスヘキコトニ付キ示定セリ

期間ノ經過ハ休暇中ニ起始セシメス又休暇ト共ニ進行スルヲ許サス休暇中ニ當ル期限ノ起始ハ休暇ノ終リタル日ノ翌日ヨリ起算シ又期間中休暇ニ遭ヘハ則其期限ノ殘剩ハ休暇ノ終リ再ヒ進行セシメテ休暇中ハ之ヲ中斷スルモノナリ  
 然レ此規則ハ不變期間及ヒ休暇事件ニ適用セス則此二者ノ期間ニ付テハ裁判所ノ休暇ニ其影響ヲ及ボサス仮令休暇中ト雖モ暇々期間ヲ進行シテ決シテ之ヲ停止セザルモノナリ

不變期間ハ此法律ニ於テ特ニ不變期間トシテ掲クルモノノミヲ指稱スルモノニシテ其數本法律第六十四條ノ解義中ニ揭示セリ

又休職事件トハ裁判所構成法第二百二十八條第二百二十九條ニ掲クル事件ヲ指稱スルモノナ

〔参考〕

裁判所構成法

第二百二十七條 裁判所ノ休暇ハ七月十一日ニ始マリ九月十日ニ終ハル

第二百二十八條 休暇中ハ左ノ事件ノ外既ニ着手シタル民事訴訟ヲ中止ス且新ナル訴訟ニ着手セズ

第一 爲替手形若クハ約束手形其他ノ流通證書ニ關ル請求

第二 船舶又ハ運送貨又ハ積荷ニ對スル請求

第三 財産差押事件

第四 住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取明渡使用占據若クハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃借人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

第五 資料ノ請求

第六 保證ヲ出サシムルノ請求

第七 取掛リタル建築ノ繼續ニ關ル事件

第八 前數條ニ掲ケタルモノヲ除ク外區裁判所ノ判事ニ於テ又ハ民事訴訟法ノ定ムル所

ニ從ヒ休暇部若クハ休暇部長ニ於テ直ニ着手スヘキ緊急ノモノト認メタル請求若クハ事件

第二百二十九條 休暇中ニ拘ラヌ刑事訴訟非訟事件判決執行破産事件並ニ民事訴訟法ニ依リ略式ヲ以テ取扱フコトヲ得ヘキ訴訟ハ之ヲ停止スルコトナシ

〔參照〕 獨 第二百一一條 期限ノ經過ハ裁判所ノ休暇ニ依リ之ヲ停止シ其期限殘余ノ分ノ經過ハ休暇ノ終リヲ以テ始マリ期限休暇中ニ始マルトキ其經過ハ休暇ノ終リヲ以テ始マルモノトス

前項ノ規定ハ不變期限及ヒ休職事件ニ於ケル期限ニハ之ヲ適用セサルモノトス  
不變期限ハ此法ニ於テ不變期限トシテ記載スル期限ニ限ル

第六十九條 期日ノ變更、辯論ノ延期、辯論續行ノ期日ノ指定ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得但申立ニ因ル期日ノ變更ハ合意ノ場合ヲ除ク外顯著ナル理由アルトキニ限り之ヲ許ス

〔解義〕 本條ハ期日ノ變更、辯論ノ延期及ヒ辯論續行ノ期日ノ事ニ關シ示定セリ

期日ノ變更即チ審理ヲ開ク以前其期日ヲ廢シテ新期日ヲ定ムルコト、辯論ノ延期即チ既ニ開キタル期日ヲ取消シテ他日ニ讓ルコト、辯論續行ノ期日ノ指定即チ審理繼續ノ爲メ新期日ヲ選定スルコトハ當事者ノ合意又ハ一方ノ申立又ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ヘキナリ

○期日及び期間

二百十八

然レハ申立ニ因レル期日ノ變更ハ若シ雙方ノ合意ニ出テサルハ顯著ナル理由アルキニ  
限リ之ヲ許可スルモノトス故ニ期日變更ノ外即チ辨論ノ延期、辨論續行ノ期日ノ指定ト  
ハ必ス顯著ナル理由ヲ示サルハ裁判所ニ於テ之ヲ許シ得ヘキハ自ラ明カナリ

審理期日ニ至リ原被兩造ノ不参ニ依リ訴訟ヲ休止ス可キハ(本法第百八十八條第二項)  
即チ期日ノ變更ニ付キ雙方ノ合意アリタルト同一ノ効力アルモノトス

若シ一方期日若クハ期間ヲ懈怠シ又ハ自己ノ過失ニ因リ期日變更、辨論ノ延期、辨論續行  
ノ爲メニスル期日ノ指定、期間ノ延長其他訴訟ノ遲滞ヲ生セシメタル原被告ハ之カ爲メ  
ニ生シタル費用ヲ負擔セサル可ラス(本法第七十五條)

〔參照〕 獨 第二百五條 原被告ハ裁判期日ノ廢棄ニ付キ契約ヲナスコトヲ得

裁判期日ノ變更ヲ申立ルトキハ亦期限伸張ニ付テノ規定ヲ適用スルモノトス

獨 第二百六條 裁判期日ノ變更審問ノ延期及審問繼續ノ爲メニスル裁判期日ノ定メハ  
職權ヲ以テモ亦之ヲナスコトヲ得

第七十條 期間ハ不變更期間ヲ除ク外當事者ノ合意ノ申立ニ因リ之ヲ短  
縮シ又ハ伸長スルコトヲ得

裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ申立ニ  
因リ顯著ナル理由アルトキハ之ヲ短縮シ又ハ伸長スルコトヲ得然レハ

法律上ノ期間ノ短縮又ハ伸長ハ此法律ニ特定シタル場合ニ限リ之ヲ許  
ス

伸長ニ係ル新期間ハ前期間ノ滿了ヨリ之ヲ起算ス

第七十一條 期日ノ變更又ハ期間ノ短縮若クハ伸長ニ付テノ申請ノ理  
由ハ之ヲ説明ス可シ其申請ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

申請ノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲スコトヲ得

同一期日ノ再度ノ變更又ハ同一期間ノ再度ノ伸長ハ相手方ノ承諾書ヲ  
提出セサルトキハ相手方ヲ審訊シタル後ニ限リ之ヲ許スコトヲ得又相  
手方カ異議ヲ述フルトキハ顯著ナル差支ノ理由及ヒ差支ヲ除去スルコ  
トノ特別ナル困難ヲ生シタルコトヲ證スルトキニ限リ之ヲ許スコトヲ  
得訴訟代理人ノ差支ニ原因スル期間ノ再度ノ變更又ハ期間ノ再度ノ伸  
長ハ相手方ノ承諾アルニ非サレハ之ヲ許サス

期日ノ變更又ハ期間ノ伸長ニ付テノ申請ヲ却下スル裁判ニ對シテハ不  
服ヲ申立ツルコトヲ得ス

〔解義〕 〔理由〕 本兩條ハ期間ノ伸縮ニ關シ示定セリ

○期日及び期間

二百十九

第七十條 抑訴訟上ノ期間ヲ短縮シ若クハ伸長シ又ハ期日ノ休止ニ關シテハ通則上原告ノ意思ヲ制縛スルノ必要アラサルナリ本條期間ノ短縮若クハ伸長ニ付キ當事者ノ合意ニ任シタルハ蓋シ之カ爲メナリ

然レハ不變期間ニ至テハ元ト公益上ヨリ之ヲ規定セラル、チ以テ私ノ合意ヲ以テ之カ變更ヲ爲スヲ許サルナリ  
裁判所又ハ裁判長ノ定ムル期間及ヒ法律上ノ期間ハ合意ナキモ顯著ナル理由アルキハ一方ノ申立ニテモ之ヲ伸縮スルコトヲ得ヘシ然レハ法律上ノ期間ニ付テハ伸縮ハ法律ニ特定セル場合ニ制限セリ

顯著ナル理由ヲ證明スル方法ハ本法第二百二十條ニ準據ス可ク又法律上ノ期間ヲ伸縮スルコトニ付キ法律ノ特定セルハ本法第五十八條ノ如キヲ云フモノナリ

第七十一條 本條ハ期日期間ノ申請ニ付テハ審理手續ヲ規定セルモノニシテ行文上解釋ヲ要ス可キモノナシ

〔參照〕 獨 第二百二條 期限ハ不變期限ヲ除キ原告ノ契約ヲ以テ之ヲ伸縮スルコトヲ得

裁判官ノ定ムヘキ期限及ヒ法律上ノ期限ハ申立ニ依リ重要ナル理由ヲ證明シタルトキ之ヲ伸縮スルコトヲ得但法律上ノ期限ハ特ニ定メタル場合ニ限ル

其伸長シタル場合ニ於テ新ナル期限ハ前期限ノ經過ヨリ起算スルモノトス但各箇ノ場合

ニ於テ別段ノ定メアルトキハ此限ニアラス

獨 第二百三條 期限ノ短縮又ハ伸長ニ關スル申立ニ付テハ豫メ口頭上ノ審問ナクシテ之ヲ裁決スルコトヲ得

其短縮又ハ再度ノ伸長ハ豫メ對手ヲ尋問シタル後ニアラサレハ之ヲ許可スルコトヲ許サス

期限ノ伸長ニ關スル申立ヲ却下シタル決議ニ對シテハ不服ヲ申立ルコトヲ得ス

第七十二條 本節ニ於テ裁判所及ヒ裁判長ニ與ヘタル權ハ受命判事又ハ受託判事モ亦其定ム可キ期日及ヒ期間ニ付キ之ヲ行フコトヲ得

〔解義〕 本條ハ受命判事又ハ受託判事ノ職權ニ關スル規定ナリ  
本條ハ行文明瞭ニシテ別ニ解釋ヲ要セス

〔參照〕 獨 第二百七條 此節ニ於テ裁判所及裁判長ニ與ヘタル權限ハ受命裁判官又ハ受託裁判官其定ムヘキ裁判期日及期限ニ付之ヲ有スルモノトス

第四節 懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

第七十三條 訴訟行為ヲ怠リタル原告若クハ被告ハ其訴訟行為ヲ爲ス權利ヲ失フ但此法律ニ於テ追完ヲ許ストキハ此限ニ在ラス

法律上懈怠ノ結果ハ當然生ラルモソトス但此法律ニ於テ失權ヲ爲サシ

○懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

○懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

ムルコトニ付キ相手方ノ申立ヲ要スルトキハ此限ニ在ラス

〔解義〕〔理由〕

本條ハ訴訟行爲ノ怠慢ヨリ生スル結果ヲ示定セリ

抑訴訟ノ目的ヲ能達スルニハ原告告カ訴訟行爲ヲ拋棄シ或ハ訴訟行爲ノ爲メ定メアル時期ヲ恪遵セサル時須ラク之カ損害ヲ受ク可キ規定ナカル可ラス即チ此損害ヲ目シテ怠慢ノ結果トハ云フナリ

又原告告ハ命令法若クハ訓諭法ノ規定ニ係ル行爲又ハ審理若クハ其爲スヘキ審理中ノ行爲ノ怠慢ニ因テ此結果ヲ發生スル而已ナラス尙ホ其行爲ノ不完全ニ因テ亦生スヘキモノトス即チ訴訟上行爲ヲ爲スコトナク若クハ適當ノ時期ニ於テ爲サル原告告ハ又親ラ之ヲ爲スヲ欲セザリシモノト看做シ一般怠慢ノ結果ニ處ラシムルナリ而シテ原告告訴訟上行爲ノ怠慢ニ因リ其訴權ヲ失フニハ自ラ此ニ至リ又ハ法律ノ力ニ因テ之ニ至ルチ一般トシ又特例トシテ對手人ノ申立アルチ要スルナリ

右訴訟行爲ノ怠慢ヨリ生スル効果ニ付テノ原則ヲ擧クレハ  
第一 期日及ヒ期間ノ怠慢ハ職權ヲ以テ指定スルモノヲ除キ即チ再應ノ呼出ヲ爲ス場合ノ外(本法第二百五十二條第二百五十四條第二百六十九條)第一回ノ期日怠慢ニ因リ欲席裁判ヲ爲スヘキモノトス  
第二 訴訟行爲怠慢ノ結果ニ付テハ敢テ戒嚴ヲ要セズ但本法第三百八十六條第七百六十五條第七百八十一條ニ定ムル場合ハ格別ナリ

第三 訴訟行爲怠慢ノ結果ハ其訴訟行爲ヲ爲スノ權利ヲ失ヒ且其失權ハ法律上當然生スルモノトス但相手方ノ申立アルチ要スル場合及ヒ法律上追完ヲ許スルチハ格別ナリ  
右法律ヲ以テ特ニ之ヲ許ス場合ニ限リ怠慢ノ追補ニ因リ其怠慢ノ結果ヲ廢止シ又ハ權利自護ノ方法ヲ以テ亦之ヲ廢止セシムルチ許セリ今本法中怠慢ノ結果ヲ廢止セシムルニ關スル箇條ヲ擧クレハ概テ左ノ如シ

第二百五十五條第二百六十五條(缺席故障)第三十五條第三項第二百六條第三項第二百七十二條第二項第二百八十四條第二百九十五條第三百四十七條第四百十四條第四百三條  
又法律ニ於テ失權ヲ爲サシムルコトニ付相手方ノ申立ヲ要スル場合ハ本法第二百二十八條第七百七十八條第二百四十六條以下第二百七十一條第四百二十八條第四百五十四條第四百九十二條ニ規定セリ

本條ニ於テ注意スヘキハ凡ソ口頭審理ナルモノハ一回ヲ以テ全部ト看做ス可キコト是ナリ故ニ再度審理ヲ開クル原告告ハ怠慢ニ係ルモノニ付キ之ヲ陳辨スルノ權利ヲ有ス(本法第二百九條第二百十四條第二百八十四條)

以上概言セハ原告告訴訟行爲ヲ懈怠スルチ即チ一定ノ時間内若クハ一定ノ期日ニ於テ訴訟行爲ヲ怠ルチハ其結果即チ損害ヲ負任スルモノトス  
其結果ハ概テ左ニ掲クル如シ  
原告告其怠ラタル訴訟行爲ヲ爲スコトヲ得ス

○懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

○懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

其怠慢ヨリ生ズル費用ヲ負擔セサル可ラス  
此他自認アリタルモノト看做スコト相手方ノ證書ヲ承認セルモノト看做サル、コノ結果ヲ生ズルコトアリ

右結果ニ付キ參看ス可キハ本法第三十條第六十八條第九十條第一百十一條第一百四十三條第一百七十八條第二百四十六條第二百四十七條第二百四十八條第二百六十三條第二百六十九條第三百七十一條第三百七十二條第三百四十一條第三百五十三條第三百九十一條第三百九十五條第四百二十八條第五百四十七條第六百九條第六百三十二條第六百三十三條第六百三十七條第七百四十六條之ナリ

然レ此法律ニ於テ追完ヲ許スル即チ怠慢ノ結果ヲ廢止スルヲ許サル、トキハ格別ナリ  
(此法文ハ前ニ揭示セリ)

又訴訟行為ノ怠慢ヨリ生ズル効果ハ法律ノ力ニ依リ當然生ズルヲ以テ原則トシ相手方ノ申立アルヲ要スル場合ヲ以テ之カ例外トナセリ例外ニ關スル法文ハ前ニ揭示セリ

〔參照〕 獨 第二百八條 訴訟上行爲ノ懈怠ハ原告被告其ナスヘキ訴訟上行爲ヲ禁ゼラル、一般ノ結果ヲ生ズルモノトス

獨 第二百九條 懈怠ノ法律上結果ノ嚴戒ハ之ヲナスコトヲ要セス其結果ハ此法律ニ於テ權利上損失ヲ被ラシムルノ申立ヲ要セザルトキニ限リ自ラ生ズルモノトス  
此場合ニ於テ申立ヲササス及申立ニ付テノ口頭上審問ヲ終ラサル間ハ其懈怠シタル訴訟

上行爲ヲ補フコトヲ得

第七十四條 天災其他避ク可ラサル事變ノ爲ニ不變期間ヲ遵守スルコトヲ得サル原告若クハ被告ニハ申立ニ因リ原狀回復ヲ許ス

原告若クハ被告カ故障期間ヲ懈怠シタルトキハ其過失ニ非スシテ關席判決ノ送達ヲ知ラサリシ場合ニ於テモ亦之ニ原狀回復ヲ許ス

第七十五條 原狀回復ハ十四日ノ期間内ニ之ヲ申立ツルコトヲ要ス  
右期間ハ障礙ノ止ミタル日ヲ以テ始マル此期間ハ當事者ノ合意ニ因リ之ヲ伸長スルコトヲ得ス

懈怠シタル不變期間ノ終ヨリ起算シテ一年ノ滿了後ハ原狀回復ヲ申立ツルコトヲ得ス

〔解義〕 本兩條ハ不變期限ノ經過回復ニ關シ示定セリ

第七十四條 懈怠ヨリ生ズル損害ノ結果ニ後ニ至リ之ヲ除外スル場合三個アリ  
第一 審理期日ヲ懈怠シタルカ爲メ言渡サシタル缺席判決ハ後ニ適當ノ時期ニ故障ヲ爲  
以テ依リ之ヲ廢棄シ得ル

第二 一定ノ場合ニ於テ懈怠シタル訴訟行為ヲ一定ノ理由ニ基キ追補スルコトヲ得ヘシ  
本法第三十五條第二百六條第二百七十二條第二百八十五條第四百十七條第八百三條

○懈怠ノ結果及ヒ原狀回復



○懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

二百二十六

第三 不變期限ノ懈怠ニ對シテハ一定ノ場合ニ限リ原狀回復ヲ許セリ

右三個ノ中第三ノ場合ニ對シ本條ハ之ヲ規定ナセリ即チ原被告抗拒ス可ラサル變事ニ因リ不變期限ヲ守ル能ハサルハ又故障期限ノ懈怠ニ對シテハ原被告自己ノ過失ナクシテ

欲席判決ノ送達ヲ知ラサルハ限リ原狀回復ヲ認許セリ  
原被告自己ノ過失ナクシテ欠席判決ノ送達ヲ知ラサル場合トハ准送達受取人、真正ノ送達受取人、補充受取人等其請取タル書類ヲ本人ニ交付セス若クハ適當ノ時期ニ交付セサル時又公示送達ノ場合ニ於テ本人ノ遂ニ之ヲ知了セサル時ノ如キ之ナリ

然レモ代理人其他ノ訴訟代人カ其本人ニ對スル欲席判決ノ送達ヲ正ニ受收シ之ヲ本人ニ通知セヌ本人ハ強制執行ニ至テ初テ警愕スルカ如キ事狀ハ原狀回復ノ理由ト爲ス能ハサルナリ蓋此法律ハ相當ナル送達受取人ニ爲シタル送達ハ本人ニ爲スト同一ノ効力ヲ有セシムレハナリ

第七十五條 本條ハ原狀回復ノ申立期間若クハ期間ノ起、始又ハ該期間ノ雙方合意ニ因テ伸長ス可ラサルコト及ヒ申立ヲ爲スハ不變期間ノ終ヨリ一ケ年内ニ制限スルコトヲ示定セリ

本條ハ行文明瞭ニシテ別ニ解釋ヲ要セズ

〔參照〕 獨 第二百十一條 天災又ハ其他抗拒シ得ヘカヲサル事變ニ依リ不變期限ヲ遵守スルコトヲ妨ケラレタル原被告ノ一方ニハ其申立ニ依リ故態恢復ヲ許スヘキモノトス

原被告ノ一方異議ノ期限ヲ懈怠シタル場合ニ於テハ其過失ナクシテ懈怠判決書ノ送達ヲ知了セザリシトキニモ亦之ニ故態恢復ヲ許スヘキモノトス

獨 第二百十二條 故態恢復ハ二週ノ期限内ニ之ヲ申立ツヘキモノトス  
其期限ハ故障ノ消滅シタル日ヲ以テ始マルモノトス其期限ハ原被告ノ契約ヲ以テ之ヲ伸長スルコトヲ得ス

懈怠シタル不變期限ノ終リヨリ起算シ一年ヲ經過シタル後ハ故態恢復ヲ申立ルコトヲ得ス

第七十六條 原狀回復ハ追完スル訴訟行爲ニ付キ裁判ヲ爲ス權アル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ申立ツ可シ  
此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 原狀回復ノ原因タル事實

第二 原狀回復ノ疏明方法

第三 懈怠シタル訴訟行爲ノ追完  
即時抗告ノ提出ヲ懈怠シタルトキハ原狀回復ノ申立ハ不服ヲ申立テラ  
レタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ抗告裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

○懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

二百二十七

第七十七條 原狀回復ノ申立ニ付テノ訴訟手續ハ追完スル訴訟行為ニ付テノ訴訟手續ト之ヲ併合ス然レトモ裁判所ハ先ツ申立ニ付テノ辯論及ヒ裁判ノミニ其訴訟手續ヲ制限スルコトヲ得

申立ノ許否ニ關スル裁判及ヒ其裁判ニ對スル不服ノ申立ニ付テハ追完スル訴訟行為ニ於テ行ハル可キ規定ヲ適用ス然レトモ申立ヲ爲シタル原告若クハ被告ハ故障ヲ爲スコトヲ得ス

原狀回復ノ費用ハ申立人之ヲ負擔ス但相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生シタルモノハ此限ニ在ラス

〔解義〕 本兩條ハ原狀回復ノ申立及ヒ審理方法ニ付キ示定セリ

第七十六條 抑原狀回復ノ申立ハ拘束スル又ハ拘束シタル訴訟ト互ニ關係ヲ有スルモノニシテ怠慢シタル期間ニ付テ行フヘキ訴訟上行爲ト同一ニ成立テ同一ニ進行スルモノナリ

原狀回復ハ追完スル訴訟行為ニ付キ裁判ヲ爲ス權アル裁判所ニ申立テヲ爲サ、ル可ラス而シテ何レノ裁判所ニシテ此權限ヲ有スルカニ付テハ本法第二百五十五條以下第三百九十四條第三百九十七條第四百三十三條第四百六十六條第四百七十二條第四百七十四條第四百八十五條ニ規定セリ

原狀回復ノ申立ハ書面ヲ以テ爲サ、ル可ラス而シテ書面ニハ本條列記ノ事項ヲ掲クルヲ要ス

原狀回復ノ原因タル事實トハ本法第七十四條ノ回復ノ理由ノミヲ指スニ非ラスシテ本法第七十五條ノ期限ヲ守リタル事實ヲモ明示セサル可ラス

本條第三項ハ本法第四百五十七條第四百六十六條ニ因據セシモノナリ

第七十七條 原狀回復ノ申立ハ案ト其本案ノ審理ニ因リ生スルモノナルカ故ニ亦特行ノ審理ヲ爲シ得ヘカヲサルナリ此故ニ原狀回復ノ申立ヲ爲スル本案ニ付テ怠慢シタル所ヲ追補シ若クハ已ニ追補シタル所ニ貫聯シアラサルヘカヲサルナリ因テ回復申立ノ審理ト怠慢追完ノ審理トヲ相合併スルヲ常例トナス然レトモ場合ニ依リ之ヲ分離シテ審理スルコト惟裁判官ノ意見ニ任セリ

原狀回復ノ申立ニ付テハ恰モ其怠慢シタル訴訟上行爲ハ已ニ適當ノ時期ニ於テ追完シ了リタルモノ、如クニナシテ之ヲ審理シ而シテ即時抗告ノ場合ニ於テノミ口頭審理ヲ要セサルナリ(本法第四百六十二條第四百六十六條)然リ而シテ回復ノ申立ニ付テハ其怠慢シタル訴訟上行爲ニ付キ行フヘキ規則ニ依テ申立ノ許否ヲ審査スヘキナリ(本法第二百五十七條第四百九十九條第四百五十四條第四百六十三條第四百七十六條)

申立ノ許否ニ關スル裁判ニ對スル不服ハ故障申立ヲ除キ餘ハ悉ク爲シ得ヘキナリ即チ控訴上告ハ通常ノ如ク之ヲ爲シ得ヘキナリ

○懈怠ノ結果及ヒ原狀回復

回復申立ノ費用ハ究竟普通ノ原則ヲ適用スルニ過キス

〔參照〕 獨 第二百十四條 故態恢復ハ書面ヲ送達シテ之ヲ申立ルモノトス其書面ニハ左

ノ件々ヲ記載スヘシ

第一 故態恢復ノ理由トナル事實

第二 故態恢復ヲ證明スル爲メノ方法

第三 懈怠シタル行爲ヲ補フコト又ハ其行爲ヲ既ニ補フタルトキハ其旨

即時故障ノ呈出ヲ懈怠シタルトキ故態恢復ノ申立ハ書面ヲ裁判所ニ呈出シテ之ヲナスモノトス其呈出ハ不服ヲ受ケタル裁決ヲ言渡シタル裁判所又ハ故障裁判所ニ之ヲ爲スコトヲ得

第二百十三條ノ場合ニ於ケル故態恢復ハ懈怠シタル不變期限ノ經過シタル後一月ノ期限内ニ裁判期日ノ爲メニスル喚出狀ヲ送達シタルトキハ口頭上審問ノ爲メ定メラザル裁判期日ニ於テモ亦豫メ書面ヲ送達スルコトナクシテ之ヲ申立ルコトヲ得

獨 第二百十五條 故態恢復ノ申立ニ付テハ補フタル訴訟上行爲ニ付テ裁決ヲナスノ權アル裁判所之ヲ裁決スルモノトス

獨 第二百十六條 故態恢復ノ申立ニ付テノ裁判手續ハ補フタル訴訟上行爲ニ付テノ裁判手續ト合併スヘキモノトス但裁判所ハ其裁判手續ヲ先ツ申立ニ付テノ審問及裁決ニ限リナスコトヲ得

申立ノ許否ニ付テノ裁決及其裁決ニ對スル不服ニ付テハ其補フタル訴訟上行爲ニ付キ此等ノ關係ニ於テ現行スル規定ヲ適用スルモノトス但其申立ヲナシタル原被告ハ異議ヲ申立ルノ權ナキモノトス  
故態恢復ノ費用ハ對手ノ理由ナキ抗辯ニ依リ生セサリシ部分ニ限リ申立人之ヲ負擔スルモノトス

第五節 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

第七十八條 原告若クハ被告ノ死亡シタル場合ニ於テハ承繼人カ訴訟手續ヲ受繼クマテ之ヲ中斷ス

受繼ヲ遲滞シタルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ受繼及ヒ本案辯論ノ爲メ其承繼人ヲ呼出ス

承繼人期日ニ出頭セサルトキハ申立ニ因リ相手方ノ主張シタル承繼ヲ自白シタルモノト看做シ且裁判所ハ關席判決ヲ以テ承繼人訴訟手續ヲ受繼キタリト言渡ス又本案ノ辯論ハ故障期間ノ滿了後始メテ之ヲ爲シ又其期間内ニ故障ヲ申立テタルトキハ其完結後始メテ之ヲ爲ス

〔解義〕 本條ハ原被告ノ死亡ニ因リ審理ヲ中斷スルコトニ關シ示定セリ

○訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

○訴訟手續ノ中断及モ中止

抑權利拘束トナリタル訴訟ハ更ニ停止スルコトナク之ヲシテ終局ニ至ラシメサル可ラサルナリ於是本節ハ訴訟行爲ニ付キ特ニ法則ヲ設ケ以テ審理ノ進行ヲ促シ一ハ原告一方ノ行爲ニ一ハ裁判所職務上ノ義務ニ歸セシメタリ然レハ裁判所ノ義務トシテ促スハ必ス原告カ訴訟ノ終局ヲ希望スル意思ノ存スル時ニ限レリ若シ原告明諾黙諾ニ依リ定時間若クハ不定時間訴訟ヲ休止セシメトスルハ裁判所ニ於テハ之ニ關涉スルヲ得サルナリ

然リ而シテ原告被告ノ意思ニ關係スルコトナク至リ訴訟ヲシテ中断若クハ中止セシメサル可ラサルコトアリ

今其場合ヲ舉グレハ左ノ如シ

- 第一 原告ノ死亡、訴訟能力ノ消滅、法律上代人ノ解任(本法第七十八條第八十條)
  - 第二 破産法ノ規則ニ因テ爲ス所ノ破産額ニ係ル訴訟ニシテ裁判所ヨリ分散手續ヲ開始シタル時(本法第七十九條)
  - 第三 戰爭其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタル時(本法第八十二條)
  - 第四 代人訴訟ニシテ代人死亡シ若クハ代理權ノ消滅セシ時又ハ本人能力ヲ失ヒ若クハ死亡シタル時(本法第八十三條)
  - 第五 原告カ種々ノ故障ニ依リ受訴裁判所ト交通ノ絶エタル土地ニ在ル時
- 以上ハ已テ得サル訴訟行爲ヲ停止ニシテ其事件ノ起ルト共ニ法律ノ力ニ依リ直ニ生ジ又ハ裁判所之ヲ命スルナリ

而シテ審理停止ノ場合ハ本條ニ網羅セルモノアラズ此他關係アル場所ニ揭示セルモノアリ即チ本法第五十二條第二百一十一條第二百二十二條之ナリ

抑又裁判官ニ於テ審理停止ノ命令ヲ爲シ或ハ審理拒絶ニ陥ルノ弊ナシト云フ可ラス是レ本法第八十九條ニ於テ抗告ヲ爲スコトヲ許セル所以ナリ

本條原告一方ノ死亡シタル時ハ承繼人ニ於テ訴訟手續ヲ受繼クマテ之ヲ中断シ而シテ其審理ヲ繼續スルニハ裁判所ニ申立其承繼人ヲ呼出スニ因テ之ヲ爲スモノトセリ

而シテ若シ受繼チ意ルルハ之ヲ強迫シテ爲サシムルノ手段ハ本條第三項ニ規定セリ即チ承繼人呼出期日ニ出廷セサルハ申立ニ因リ相手方ノ主張セル承繼チ認諾シタルモノト看做シ欠席裁判ヲ以テ審理ヲ繼續スルモノト看做スヘキ言渡チ爲スモノナリ而シテ欠席判決ニ對シテハ原則ニ從ヒ故障チ爲シ得ヘキヲ以テ本案ノ審理ハ故障期限ノ經過又故障チ爲セシトハ其審判ノ結了スルマテ之ヲ停止セリ

債務者ノ死亡ハ強制執行ニ如何ノ影響チ及ホスヤハ本法第五百五十二條ニ規定セリ本條ニ所謂原告他ノ場合ト異リ特ニ本人ノモチ指稱セルモノニシテ法律上代人チ含蓄セサルナリ

又本法原告ノ死亡ハ一人ノ原告死亡セシ場合ヲ指稱スルモノニシテ數名ノ共同訴訟人若クハ死亡スル判決シテ審理ヲ停止セサルナリ(本法第四十九條第五十條)

○訴訟手續ノ中断及モ中止

○訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

二百三十四

法律上ノ人即チ法人ハ廢滅スルコトアルモ決シテ死亡スルモノニ非ラズ例ヘハ或ル町村ニシテ他町村ト合併シ又ハ一ノ協會ニシテ國家ノ安治ニ妨害アリトシテ解散ヲ命セラレ、場合ノ如キ之ナリ此時ハ代理權自ラ消滅スルヲ以テ本法第百八十條ノ規定ニ準據セサル可ラサルナリ

又何人ヲ以テ死亡セル訴訟人ノ承繼人ト爲スヘキ乎ニ至テハ民法ノ規定ニ從ハサル可ラス

〔參照〕 獨 第二百十七條 原告ノ一方死亡シタル場合ニ於テハ其權利相續人裁判手續ヲ引受ルマテ之ヲ中止スルモノトス

其引受ヲ怠ルトキ權利相續人ハ其引受ノ爲メ及同時ニ本事件審問ノ爲メ之ヲ喚出スコトヲ得

喚出ヲ載スル書面ハ權利相續本人ニ之ヲ送達スヘキモノトス其喚出期限ハ裁判長之ヲ定ム

權利相續人裁判期日ニ出廷セサルトキハ申立ニ依リ其主張セラレタル權利相續ヲ承諾シタルモノト看做シ裁判所ハ懈怠判決ヲ以テ權利相續人裁判手續ヲ引受ケタリト認ルコトヲ言渡スヘキモノトス本事件ノ審問ハ異議期限ノ經過シタル後始テ之ヲナシ及其期限内ニ異議ヲ申立タルトキハ其完結ノ後始テ之ヲナヌコトヲ得

第二百十九條 原告若クハ被告ノ財産ニ付キ破産ノ開始シタル場合ニ於

テ訴訟手續カ破産財團ニ關スルトキハ破産ニ付テノ規定ニ從ヒ手續ヲ受繼キ又ハ破産手續ヲ解止スルマテ之ヲ中斷ス

〔字解〕 破産トハ是マテノ身代限ト同一ナレバ又之ニ異ナル所アリ詳細ハ商法ニ規定セリ

〔解義〕 本條ハ原告ノ一方破産ニ因テ訴訟行爲ヲ中斷スルコトニ關シ示定セリ

數口ノ負債アル債務者既ニ拘束セル訴訟アルニ方リ其破産ヲ開始セルハ其訴訟カ破産財團ニ關スル時ハ之カ訴訟審理ヲ中止スルモノナリ

訴訟手續カ破産財團ニ關スルトキハトアリ故ニ財産權ニ關セサル爭訟即チ破産者ノ一身上ノ行爲不行爲ニ關スル訴訟其他破産財團ニ關セサル財産上ノ訴訟例ヘハ破産債務者ノ不抵當償品ニ關スル訴訟ノ如キハ決シテ本條ノ規定ニ從フヲ要セサルナリ

而シテ破産ニ付テノ規定ニ從ヒ手續ヲ受繼キ又ハ破産ヲ解止スルハ再ヒ審理ヲ開始スルモノナリ破産ニ付テノ規定ハ商法ニ就テ知ル可シ

〔參照〕 獨 第二百十八條 原告一方ノ財産ニ付キ倒産處分ヲ開始シタル場合ニ於テ裁判手續ハ倒産額ニ關スルトキハ倒産規則ニ從テ之ヲ引受ケ又ハ倒産處分ヲ廢棄スルマテ之ヲ中止スルモノトス

○訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

二百三十五

第百八十條 原告若クハ被告カ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ其法律上代理人カ死

亡シ又ハ其代理權カ原告若クハ被告ノ訴訟能力ヲ得ル前ニ消滅シタル

トキハ訴訟手續ハ法律上代理人又ハ新法律上代理人カ其任設ヲ相手方ニ通知シ又ハ相手方カ訴訟手續ヲ續行セントスルユトキ其代理人ニ通知スルマテ之ヲ中斷ス

**第八十一條** 原告若クハ被告ノ死亡ニ因リ訴訟手續ヲ中斷スル場合ニ於ケル訴訟手續ノ受繼ニ關シ遺產ニ付キ管理人ヲ任設スルトキハ前條ノ規定又遺產ニ付キ破産ヲ開始スルトキハ第七十九條ノ規定ヲ適用ス

〔**解義**〕 第八十條ハ訴訟能力若クハ代理權ノ喪失ニ因リテ訴訟行爲ヲ中斷スルコトヲ第八十一條ハ前條第七十八條、第七十九條ノ補充方ニ付キ示定セルモノナリ。第八十條原告被告訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人死亡シ又ハ原告被告訴訟能力ヲ得サル前其代理權ノ消滅セシ時ハ訴訟行爲ヲ中斷セサル可ラサルナリ。然レハ法律上代人又ハ新タニ法律上代人ヲ任設セシルハ其中斷スヘキ事由ハ自ラ消滅スヘキナリ

而シテ此場合ニ於テハ原告被告ノ一方其之ヲ繼續スルノ目的ナルコトヲ明言スルノ方法即チ之カ通知ヲ爲セハ可ナリ(本法第八十七條) 代理權ノ消滅スルハ本人訴訟能力ヲ得ルニ原因スルハ例ヘハ未丁年者丁年ニ達シ又ハ被

後見者後見ヲ脱シタルニ因リ代理權ノ消滅スルハ本人自ラ辯護シ得テ收テ法律上ノ救護ヲ要セサルカ故ニ審理ヲ中斷スルノ必要ナキナリ

**第八十一條** 本條ハ原告被告本人ノ死亡ニ因リ中止シタル審理ヲ再ヒ開クニ付テハ若シ遺產ノ管理人ヲ任命シ又遺產ニ付キ破産ヲ開始スルハ前條若クハ本法第七十九條ニ準據スヘシト云フニ在リ

遺產ノ管理人ヲ任命スルコトハ民法ニ破産ヲ開始スルコトニ付テハ商法ニ規定セリ

〔**參照**〕 獨 第二百十九條 原告被告ノ一方訴訟能力ヲ失ヒ又ハ原告被告一方ノ法律上代人死去シ又ハ原告被告ノ一方訴訟能力ヲ得ルコトナクシテ其代理權ノ消滅スルトキ裁判手續ハ法律上代人又ハ新ナル法律上代人其任定ヲ對手ニ通知シ又ハ對手其手續ヲ繼續スルノ目的ヲ代人ニ通知スルマテ之ヲ中止スルモノトス

獨 第二百二十條 原告被告ノ一方死去スルニ依リ裁判手續ヲ中止スル場合ニ於テ遺產ニ付キ管財人ヲ命スルトキハ第二百十九條ノ規定ヲ適用シ遺產ニ付キ倒産處分ヲ開始スルトキハ裁判手續ノ引受ニ關スル第二百十八條ノ規定ヲ適用スルモノトス

**第八十二條** 戰爭其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止メタルトキハ此事情ノ繼續間訴訟手續ヲ中斷ス

〔**解義**〕 本條ハ裁判所ノ故障ニ因リ訴訟行爲ヲ中斷スルコトニ付キ示定セリ。其他ノ事故ニ因リ裁判所ノ行務ヲ止ムルトハ本法第八十四條ニ掲タル通路ノ杜塞其裁

○訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

判所所在地ニ係ル時又ハ區裁判所所在地ノ判事悉ク病氣若クハ死亡ニ係ル時ノ類ヲ云フモノナリ

〔參照〕 獨 第二百二十二條 戰爭又ハ其他ノ事故ニ依リ裁判所ノ行務ヲ止ルトキハ其狀況ノ繼續スル間裁判手續ヲ中止スルモノトス

第一百八十三條 訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告若クハ被告カ死亡シ又ハ訴訟能力ヲ失ヒ又ハ法律上代理人カ死亡シ又ハ其代理權カ消滅スルトキハ委任消滅ノ通知ニ因リ訴訟手續ヲ中斷ス  
訴訟手續ノ受繼ニ付テハ第七十八條、第八十條、第八十一條ノ規定ニ從フ

〔解義〕 本條ハ訴訟代理人ヲ以テ訴訟ヲ爲ス場合ニ於テ原告、被告、一方死亡シ、訴訟能力ヲ失ヒ又法律上代理人カ死亡シ又其代理權ノ消滅スルトキハ訴訟行爲ヲ中斷スヘキコトヲ示定セリ

民法財産取得篇第二百五十一條ヲ閱スルニ代理權ハ委任者ノ死亡ニ因テ消滅セリ本條ハ蓋シ此趣旨ニ準據セシモノナラン

第一百八十四條 原告若クハ被告カ戰時兵役ニ服スルトキ又ハ官廳ノ布令戰爭其他ノ事變ニ因リ受訴裁判所ト交通ノ絶エタル地ニ在ルトキハ受

訴裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ障礙ノ消除スルマテ訴訟手續ノ中止ヲ命スルコトヲ得

〔解義〕 〔的例〕 本條ハ原告、被告本人ニ障礙アルニ因テ訴訟行爲ヲ中止スルコトニ關シ示定セリ

本條ハ專ラ徵兵令ニ繫累シテ即チ一朝戰端ヲ開クニ方テハ多數ノ人民兵役ニ召徵セラルハ豫見シ此規定ニ及ヒタルモノナリ

原告ノ受訴裁判所ト交通ノ絶エタル地ニ在ルトキトハ例ヘハ合圍地、水合、洪水又ハ傳染病ノ爲メ衛生警察ニ依リ交通ヲ杜絶セルカ如キヲ云フ

又本條ハ原告ヨリ中止ノ申立ヲ爲スノミナラス裁判所ノ職權ヲ以テモ之カ中止ヲ命シ得ヘントセリ

本條ニ於テ注意スヘキハ中斷ト中止ノ差異之レナリ

中止ハ原告ノ申立ニ因ルカ又ハ裁判所ノ職權ニ因テ之ヲ命シ得ヘント雖トモ反之中斷ハ法律ノ力ニ因テ當然其効ヲ生スルモノナリ

〔參照〕 獨 第二百二十四條 原告ノ一方戰時軍役ニ服スルトキ又ハ官ノ命令又ハ戰爭又ハ其他ノ事變ニ依リ訴訟裁判所ト交通ヲ絶タレタル地ニ滞在スルトキ訴訟裁判所ハ職權ヲ以テモ亦故障ノ消滅スルマテ裁判手續ノ延期ヲ命スルコトヲ得

第一百八十五條 訴訟手續中止ノ申請ハ受訴裁判所ニ之ヲ提出ス其申請ハ

○訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

○訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

此裁判ハ口頭辯論ヲ經ヌシテ之ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕 本條ハ中止ニ關スル手續ヲ示定セリ

本條ハ行文明瞭ニシテ別ニ解釋ヲ要セス

只注意スヘキハ此裁判ハ口頭審理ヲ用ユルノ必要アレハ固ヨリ之ヲ禁止スルノ趣旨ニ在

ラサル可シ

〔參照〕 獨 第二百二十五條 裁判手續延期ノ申立ハ訴訟裁判所ニ之ヲ呈出スヘキモノト

ス其申立ハ裁判所書記ニ陳述シテ之ヲ筆記セシムルコトヲ得

其裁決ハ豫メ口頭上審問ナクシテ之ヲナスコトヲ得

第八十六條 訴訟手續ノ中斷及ヒ中止ハ各期間ノ進行ヲ止メ中斷又ハ

中止ノ終リタル後更ニ全期間ノ進行ヲ始ムル効力ヲ有ス

中斷及ヒ中止ノ間本案ニ付キ爲シタル原告若クハ被告ノ訴訟行為ハ他

ノ一方ニ對シ其効力ナシ

口頭辯論ノ終結後ニ生シタル中斷ハ其辯論ニ基キテ爲スコキ裁判ノ言

渡ヲ妨グルコト無シ

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ訴訟行為ノ中斷及ヒ中止ノ効力ニ關シ示定セリ

本條ニ依ルルハ中斷ト云ヒ中止ト云フ其効力ニ至テハ毫モ異ナル所ナシ即チ兩ナカラテ

訟行為ヲ停止シテ而シテ若シ其停止中原被告ニ於テ本案ニ付キ訴訟行為ヲ爲スルハ法律上

ノ効ナシトモリ何トナレハ之ヲ効力アラシムルハ審理再開時期スルノ行為ニ背反

スレハナリ

又中斷、中止兩ナカラ各期間殊ニ不變期間ノ經過ヲモ停止シテ其中斷、中止ノ解除後新ニ

全期間ノ進行ヲ始ムルトモリ

右全期間ノ進行ヲ始ムルト爲セシ所以ハ其手續ヲ省約シ且期間計算ノ紛議ヲシテ杜絶セ

シムルノ趣旨ニ出ルモノナリ

又裁判所ハ其裁判ヲ爲シ得ヘキ口頭審理ノ已ニ結了シタルハ毫モ原被告ノ行為ニ要ス

可キモノナキヲ以テ僅ニ殘レル裁判ヲ妨グルノ理由アラサルヘシ（本法第二百三十五條

第二百四十五條）

各期間ナル語中ニハ不變期間ヲ包含シ就中本法第二百五十五條ノ故障期間ヲモ包含ス然

レハ本法第七十五條第三項及ヒ第四百七十四條第三項第七十五條第二項ニ規定セ

ル場合ハ例外ナリ何ナレハ此三期間トモ素ト公益上ニ基キ規定シタルモノナレハナリ

本條第三項ニハ中斷ニ限り裁判言渡ヲ妨ケサルコトニ規定セリ故ニ中止ノ場合ニ於テハ

裁判言渡ヲ爲スコトヲ妨ケサルコトニ規定セリ

〔參照〕 獨 第二百二十六條 裁判手續ノ中止及延期ハ各期限ノ經過ヲ止メ及中止又ハ延

○訴訟手續ノ中斷及ヒ中止



○訴訟手續ノ中断及ヒ中止

期ノ終リタル後更ニ全期限ノ経過ヲ始ルノ効力ヲ有スルモノトス  
中止又ハ延期中本事件ニ付キ原被告一方ノナシタル訴訟上行爲ハ他ノ一方ニ對シ法律上  
効力ナキモノトス

口頭上審問ノ終リタル後中止ヲナスモ其審問ニ依リナスヘキ裁決ノ言渡ハ妨ケラル、コ  
トナキモノトス

第八十七條 中断シ又ハ中止シタル訴訟手續ノ受繼及ヒ本節ニ定メタ  
ル通知ハ原告若クハ被告ヨリ其書面ヲ受訴裁判所ニ差出シ裁判所ハ相  
手方ニ之ヲ送達ス可シ

〔解義〕 本條ハ審理繼續ハ程式ニ關シ示定セリ

前條ニ於テ期間ノ進行ヲ止メ又ハ進行ヲ始ムルハ中断及ヒ中止ノ開始ト終了ニ關スルコ  
トヲ見タリ而テシテ中断、中止ノ開始及ヒ終了ノ期ハ本條ニ定ムル書類ヲ相手方ニ送達ス  
ルニ因テ確定スルモノナリ

〔參照〕 獨 第二百二十七條 中止シ又ハ延期シタル裁判手續ノ引受及此節ニ記載シタル  
通知ハ書面ヲ送達シテ之ヲサスモノトス

第八十八條 當事者ハ訴訟手續ヲ休止ス可キ合意ヲ爲ヌコトヲ得其合  
意ハ不變期間ノ進行ニ影響及ヒ及テサスモノトス

口頭辯論ノ期日ニ於テ當事者雙方出頭セサルトキハ訴訟手續ハ其一方  
ヨリ更ニ口頭辯論ノ期日ヲ定ム可キコトヲ申立ツルマテ之ヲ休止ス  
一、年内ニ前項ノ申立ヲ爲ササルトキハ本訴及ヒ反訴ヲ取下ケタルモ  
ノト看做ス

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ審理ノ休止ニ關シ示定セリ

審理ハ原被告兩造ノ契約上認諾ニ因リ又ハ口頭審理ノ期日ニ兩造共ニ出廷セサルニ因リ  
之ヲ休止スルナリ

抑本條ハ爭訟上ノ審理ハ原被告ノ意思如何ニ關スルモノナレハ裁判所ハ原被告ノ意ニ反  
シ濫ニ裁判ヲ爲シ以テ一件ヲ結了スヘカラサルノ趣旨ニ基ケルモノナリ

然レモ原被告ノ任意ハ敢テ不變期間ノ経過上ニ關係ヲ有セシム可ラス何トナレハ不變期  
間ハ元ト公益ニ基キ規定スルモノナレハナリ

原被告兩造共ニ出廷セサルニ因リ審理ヲ休止スルハ特リ口頭審理ノ爲メニ指定セル期日  
ニ於テスルニ限レリ而シテ他ノ目的ノ爲メニスル期日ニ於テハ概シテ其審理ヲ繼續スヘ  
キナリ殊ニ裁判ノ言渡及ヒ立證ノ如キハ兩造ノ出廷スルト否トニ關係スル所ナキナリ

(本法第二百二十五條第二百四十五條第二百八十四條)  
又審理ノ再開ハ其一方ヨリ更ニ口頭辯論ノ爲メ期日ヲ定ムヘキ申立アルヲ以テ其期トナ

○訴訟手續ノ中断及ヒ中止

○訴訟手續ノ中斷及ヒ中止

然レモ不定ニ訴訟ノ休止ヲ許スルハ徒ニ訴訟事件ノ裁判所ニ堆積スル而已ナラス無期ニ之ヲ休止スルハ恰モ裁判所ヲ以テ機械視シ審理權ヲ蔑ニスルモノナルヲ以テ本條ハ一年內ニ審理ノ開始ヲ申出テサルトキハ訴ヲ取下ケタルモノト推測シ之カ却下ニ及フ可ク規定セリ

〔參照〕 獨 第二百二十八條 原被告ハ裁判手續ヲ休止スヘキコトヲ契約スルヲ得其契約ハ不變期限ノ經過ニ關係ナキモノトス  
口頭上審問ノ爲メニスル裁判期日ニ原被告雙方出廷セサルトキ裁判手續ハ其一方新ナル喚出狀ヲ送達セシムルマテ之ヲ休止スルモノトス

第百八十九條 本節ノ規定其他此法律ノ規定ニ基キ訴訟手續ノ中止ヲ命スル裁判ニ對シテハ抗告ヲ爲スコト得又其中止ヲ拒ム裁判ニ對シテハ即時抗告ヲ爲ストヲ得

〔解義〕 本條ハ審理ノ中止ニ對スル上訴ノコトニ關シ示定セリ  
前第百八十四條ニ依リ中止ヲ命スル裁判ヲ受ケタルルモ又此他此法律ノ規定ニ基キ即チ本法第百五十二條第百二十一條第百二十二條ニ依リ中止ノ裁判ヲ受ケタルルモ之ニ對シ抗告ヲ爲シ得ヘク又其中止ヲ申立タルニ之ヲ拒ムノ言渡ヲ受ケタルルモ即時抗告ヲ爲シ得ヘキナリ

〔參照〕 獨 第二百二十九條 此節ノ規定又ハ其他法律上ノ規定ニ依リ裁判手續ノ延期ヲ命シ又ハ拒絕スル裁決ニ對シテハ故障ヲ申立テ拒絕ノ場合ニ於テハ即時故障ヲ申立ルコトヲ得

第二編 第一審ノ訴訟手續

第一章 地方裁判所ノ訴訟手續

〔解義〕 本編ハ第一審ノ訴訟手續ヲ定メタルモノナリ裁判所構成法ニ依レハ區裁判所及ヒ地方裁判所ヲ以テ第一審裁判所トナシ控訴院ヲ第二審裁判所トシ大審院ヲ最高裁判所トナセリ而シテ地方裁判所モ區裁判所ノ第一審ニ對スル控訴ヲ審判スルトキハ第二審裁判所トナル要スルニ本編ハ訴訟ノ第一審ニ屬スル場合ニ適用スルモノナリ然レトモ本法第百八條及ヒ第四百四十四條ニ依ルトキハ本編第一章ハ特リ第一審ノミナラス控訴審及ヒ上告審ニモ亦之ヲ準用ス可キヲ以テ其關係スル所最モ廣ク之ヲ第二ノ總則ト言フテ可ナリ

第一節 判決前ノ訴訟手續

第百九十條 訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ差出シテ之ヲ爲ス  
此訴狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

○判決前ノ訴訟手續

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

第二 起シタル請求ノ一定ノ目的物及ヒ其請求ノ一定ノ原因

第三 一定ノ申立

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ニ從ヒ之ヲ作り且裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ依リ定マル場合ニ於テ訴訟物カ一定ノ金額ニ非サルトキハ其價額ヲ揚ク可シ

〔解義〕〔的例〕本條ハ訴ヲ提起スル方法ヲ示定セリ

訴ヲ提起センニハ必ず訴狀ヲ裁判所ニ差出サ、ル可カラス、只區裁判所ニ訴フルトキニ限

リ口頭ヲ以テ爲スコトヲ許セリ(本法第三百七十四條第三百七十八條第三百八十一條)

訴ハ訴狀ヲ差出シタルノモニ依リ提起ノ效アルヲ以テ訴狀ヲ相手方ニ送達セサルトモ時

效ヲ中斷シ遲滯利息ヲ生セシムルコトヲ得ヘシ

訴ト訴訟トハ區別セサル可カラズ訴トハ訴狀ヲ差出シタル當初ノ有様ヲ云ヒ訴訟トハ原

被ノ關係ヲ生シ既ニ爭訟トナリタル以後ノ有様ヲ云フモノナリ

訴狀ニハ必ず左ノ條件ヲ具備セサル可カラズ

第一 當事者及ヒ裁判所ノ表示

當事者トハ直接訴訟ニ關與スル者ヲ云フ故ニ一般ハ原告ヲ指稱スルト雖トモ第三者ニ

シテ訴訟ニ參加スルトキハ同シク當事者トナル乃チ訴狀ニハ原告及ヒ裁判所ヲ表示シ以テ何人ノ間ニ訴訟ノ關係ヲルコト又何レノ裁判所ニ訴フルコトヲ明確ニセサル可カラズ而シテ之ヲ表示スルニハ從來ノ如ク訴狀ノ初ニ原告ノ住所氏名等ヲ掲載シ其終リニ

尙々裁判所ト書キ可ナリ然レトモ其地方ニ著明ナル官衙或ハ銀行ニシテ當事者ナルト

キハ必ず其住所ヲ詳記スルヲ要セズ

第二 起シタル請求ノ一定ノ目的物及ヒ其請求ノ一定ノ原因

請求ノ一定ノ目的物トハ例ヘハ何府縣郡村番地ニ在ル家屋ノ引渡ヲ求ムルト云フカ如ク

其目的ノ確定スルヲ云ヒ請求ノ一定ノ原因トハ何年月日之ヲ買得シ既ニ代金ヲ拂込ミタ

ルニ之カ引渡ヲ爲サント云フカ如ク其原因ノ一定スルヲ云フ仍テ從來ノ如ク訴訟ノ初ニ

請求スル一定ノ目的物ヲ掲ケ次ニ其請求スル原因ヲ明記シテ可ナリ若シ漢焉不動産ノ引

渡ヲ求ムルカ單ニ引渡ヲ求ムル不動産ノ所有權ヲ得タリト云フトキハ果シテ不動産中ノ

何物ナルカ又何等ノ原因ニ由テ之ヲ得タルカ明瞭ナラサルヲ以テ此規定ニ背戾スルモノ

トス

第三 一定ノ申立

一定ノ申立トハ前例ニテ云ヘハ速ニ建家ヲ引渡ス様判決アランコトヲ求ムト云フカ如ク

其請求スル所ヲ一定シテ申立ツルヲ云フ仍テ從來ノ如ク訴狀ノ末項ニ其請求スル所ヲ掲

載シテ可ナリ

○判決前ノ訴訟手續

二百四十七

此他訴狀ハ準備書面ニ關スル規定ニ從ヒ作ラサル可カラス仍テ本法第百五條ニ列記スル事項ニシテ本條ニ掲ケサルモノ即チ附屬書類アルトキハ其表示又事實上主張ノ証明又ハ攻撃ノ爲メ用キントスル證據方法アルトキハ之カ申立ヲ掲載セサル可カラス例ヘハ訴訟代理人ニ依テ訴フルトキハ其委任狀ヲ添付スルカ如ク又證人若クハ書證ニ依リ事實ヲ證明セントスルトキハ誰某ヲ證人トシテ立證ス何々ノ證書ヲ以テ立證スルト掲載セサル可カラス

又裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ依リ定マル場合ニ於テ其訴訟物カ一定ノ金額ニ非サルトキハ其價額ヲ掲ケサル可カラス例ヘハ請求スル目的物カ家屋ナレハ相當價格ヲ見積リ之ニ附記スルカ如ク若シ裁判所ノ管轄カ訴訟物ノ價額ニ依リ定マラサルトキ例ヘハ人事ノ如ク又裁判所構成法第十四條第二ニ列記スル事項ノ如キハ固ヨリ其價額ヲ附記セスレテ可ナリ

本條ニ於テ特ニ注意ス可キハ第二項ニ在ル具備スルコトヲ要スノ語之ナリ本法ニ於テ要スト記シタルトキハ必ズ之ヲ具備ス可キモノト解釋セサル可カラス(本法第百五十六條第百九十二條第百六十七條第百八十四條第四百一條第四百三十八條第四百七十五條第四百八十五條第五百四十四條第六百四十二條第六百五十八條第六百六十七條第六百七十二條)故ニ本條ニテ第一乃至第三ニ掲ケル事項ニシテ若シ其一チ欠クトキハ起訴ノ效アラサルヲ以テ本法第百九十二條ノ處分ヲ受クルナルヘシ依テ訴狀ヲ作ランニハ最

モ慎重チ加ヘ本條ノ三條件ヲ欠缺セサルニ注意セサル可ラス而シテ第三項ノ如ク掲ケルシノ語ヲ用ヒタルトキハ必ズ之ヲ掲載セサル可カラサルノ意義ニアラス之ヲ掲ケルト否トハ殆ント其者ノ隨意タル可シ故ニ具備スルヲ要スト云ヒ之ヲ掲ケ可シト云フ大ニ輕重ノ區別アルモノト然レトモ掲ケ可シトアル場合ニ於テ之ヲ掲ケサルトキハ大ニ不利益ヲ來スコトアルヲ以テ此場合ニ於テモ成ル可ク掲載スルヲ可トス例ヘハ事實上ノ證明若シハ攻撃ノ爲メ用ヒントスル證據方法ヲ訴狀ニ掲ケスシテ口頭辨論ノ際初テ之カ申立ヲ爲ストキハ或ハ相手方ノ知ラサリシ爲メ辨論ノ延期ヲ醸スコトナシト云フ可カラス此時ハ原告ニ怠慢アルヲ以テ訴訟ノ曲直ニ關セス其訴訟費用ヲ負擔セサル可カラサルノ結果ヲ生スルニ至ルヘシ(本法第七十五條)

〔參照〕 獨 第二百三十條 訴訟ノ提起ハ書面ヲ送達シテ之ヲナスモノトス 其書面ニハ左ノ件々ヲ記載ス可シ

- 第一 原告及裁判所
  - 第二 申立テタル請求ノ事件及理由并ニ一定ノ申立
  - 第三 訴訟ニ付テ口頭上審問ノ爲メ被告ヲ訴訟裁判所ニ喚出スコト
- 其他訴狀ニハ裁判所ノ權限訴訟事件ノ價額ニ依リ定マルトキハ一定ノ金額ニアラサル訴訟事件ノ價額ヲ掲ケベシ其他準備書面ニ關スル一般ノ規定ハ訴狀ニモ亦之ヲ適用スルモノトス

第九十一條 同一ノ被告ニ對スル原告ノ請求數箇アル場合ニ於テ其各請求ニ付キ受訴裁判所カ管轄權ヲ有シ且法律ニ於テ同一種類ノ訴訟手續ヲ許ストキハ原告ハ其請求ヲ一箇ノ訴ニ併合スルコトヲ得但民法ノ規定ニ反スルトキハ此限ニ在ラス

〔解義〕〔的例〕本條モ起訴ノ方法ノ一ナレトモ特ニ同一ノ被告ニ對シ數箇ノ請求ヲ併合シテ訴フルコトヲ得ヘキ場合ヲ示定セリ  
同一ノ被告ニ對シ數箇ノ請求アル場合ニ於テハ各箇ニ訴ヲ起サストモ之ヲ併合シテ訴フルコトヲ得ヘシ

然レトモ併合シテ訴ヘンニハ其各請求ノ同一裁判所ニ管轄權アリテ且ツ訴訟手續ノ同一ナル可キトキニ限レリ故ニ例ヘハ同一被告ニ對シ人事ニ關スル訴ト財産權ニ關スル訴トヲ併合シテ區裁判所ニ訴フルトキハ區裁判所ハ人事ニ關シ訴訟ノ管轄權アラサルヲ以テ人事ニ付テハ管轄違ノ言渡ヲ受クルナルヘシ又一ハ通常訴訟ニシテ一ハ證書訴訟ナルトキハ各其手續ニ差異アルヲ以テ之ヲ合併スルコトヲ得ス  
又同一ノ管轄同一ノ手續ナルモ民法ノ規定ニ反スルトキハ之ヲ合併スルコトヲ得ス例ヘハ占有ノ訴ト本權ノ訴トヲ併合スルヲ得サルノ類之ナリ(民法財産篇第二百七條)  
以上ノ條件ヲ備フルトキハ假令其請求ノ種類異ナルモ之ニ拘ハルコトナシ故ニ一ハ貸金

ニシテ一ハ賣買代金ナルモ又所有權ニ關スル請求ナルモ之ヲ合併スルコトヲ得ヘシ然レトモ本法第四條ニ依ルトキハ其額ヲ合算スルヲ以テ自ラ管轄權ニ影響ヲ及ホスコトアルヘシ例ヘハ五十圓ト九十圓ノ貸金三口アラシニ各箇ニ訴フルトキハ區裁判所ノ管轄ナレトモ之ヲ併合スルトキハ地方裁判所ノ管轄トナルカ如シ數箇ノ請求ヲ各別ニ訴フルトキハ裁判所ハ之ヲ合併スルコトヲ得ヘシ(本法第二百二十條)又合併シタル訴訟ノ辨論ヲ分離スルヲ得ヘシ(本法第一百十八條)且之等ノ場合ニ於テハ各箇ニ判決ヲ爲スコトヲ得ヘシ(本法第二百二十五條第二項第二百二十六條)

〔分析〕數箇ノ請求ヲ一ノ訴ニ併合スルニハ左ノ條件アルヲ要ス

- 第一 同一ノ被告ナルコト
- 第二 各請求ニ付キ受訴裁判所カ管轄權ヲ有スルコト
- 第三 同一種類ノ訴訟手續ヲ許スコト
- 第四 民法ノ規定ニ反セサルコト

〔理由〕本條ヲ設クル理由ハ手續ノ節約費用ノ節減期日ノ短縮ニ在リ

〔比較〕本條ハ本法第四十八條ニ規定スル共同訴訟ト混同ス可カラス本條ハ同一ノ被告ニ對シ數箇ノ請求アル場合ニシテ本法第四十八條ハ原告若クハ被告ノ數人アル場合ナリ要スルニ一ハ事ニ關スルト一ハ人ニ關スルトノ差異アルモノトス

〔參照〕獨 第二百三十二條 同一ノ被告ニ對スル原告數箇ノ請求ハ各異ノ理由ニ出ルト

○判決前ノ訴訟手續

キト雖其全請求ニ付キ訴訟裁判所權限ヲ有シ及同一ノ裁判手續ヲ許サレタルトキ之ヲ一訴訟ニ合スルコトヲ得

現有訴訟及權利自己ヲ申立ル訴訟ハ一訴訟ニ合スルコトヲ得ス

第九十二條 訴狀カ第九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適セサルトキハ相當ノ期間ヲ定メ裁判長ノ命令ヲ以テ其期間内ニ欠缺ヲ補正ス可キコトヲ命ス若シ原告此命ニ從ハサルトキハ其期間ノ滿了後訴狀ヲ差戻ス可シ

此差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕〔理由〕 本條ハ訴狀カ方式ニ違ヒタルトキノ處分法ヲ示定セリ

訴狀カ第九十條ニ掲クル三箇ノ諸件ヲ具備セサルトキハ裁判長ハ相當ノ期間ヲ定メテ其欠缺ヲ補正ス可キコトヲ命令シ若シ原告其期間内ニ之ヲ補正セサルトキハ裁判長ハ差戻ノ命令書ヲ作りテ訴狀ニ添へ之ヲ送達スルモノトス

欠缺ノ補正ヲ命スルトキモ裁判長ハ命令書ヲ作りテ原告ニ送達スヘシト雖トモ未タ原告ノ在廳スルトキハ直ニ其旨ヲ諭シ之ヲ補正セシムルモ可ナリ

本條ノ事柄タル單ニ形式上ニ止マリ且其法ニ適スルト否トハ直ニ判然ス可キヲ以テ敢テ合議ヲ要ス可キコトナラストシテ之ヲ裁判長ニ一任セリ又此場合ニ於テ初ヨリ之ヲ差戻

スト定メサリシハ僅ニ形式上ノ相違ニ過キサルニ之ヲ差戻ストキハ徒ニ煩勞ト費用トヲ増スノミナラス時アリテハ請求ノ權利ヲシテ時効ニ係ラシムルコトアルヲ以テナリ

差戻ト棄却トハ之ヲ混同ス可カラス差戻トアルトキハ再ヒ之ヲ訴フルヲ妨ケス反之棄却ハ事件ノ全體ヲ排斥スルノ意義ナルヲ以テ再ヒ之ヲ訴フルヲ許サ、ルナリ然レトモ本條ノ如ク差戻ヲ受ケタル場合ニ於テモ若其間ニ出訴期限ヲ失フコトアルトキハ再訴スルモ其効ナキニ至ルコトアリ

差戻ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ許セリ即時抗告ノコトハ本法第四百六十六條ニ規定セリ

第九十三條 訴狀カ第九十條第一號乃至第三號ノ規定ニ適スルトキハ口頭辯論ノ期日ヲ定メテ之ヲ被告ニ送達ス可シ

第九十四條 訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ期日トノ間ニハ少ナクトモ二十日ノ時間ヲ存スルコトヲ要ス

外國ニ於テ送達ヲ施行ス可キトキハ裁判長相當ノ時間ヲ定ム

〔解義〕 第九十三條ハ訴狀カ方式ニ適スルトキハ之ヲ被告ニ送達スルコトニ付キ又第九十四條ハ訴狀ノ送達ト口頭辯論ノ間ニ存スル期間ノコトニ付キ示定セリ

○判決前ノ訴訟手續

○判決前ノ訴訟手續

從ヒ口頭辨論ノ日時ヲ定メ書記ヲシテ被告ニ送達ノ手續ヲ爲サシムルモノトス(本法第百三十六條)

原告ハ本法第百八條ニ從ヒ訴狀ノ正本及ヒ謄本ノ二通ヲ提出ス可キヲ以テ被告ニハ其謄本ヲ送達シ正本ハ裁判所ヘ止メ置クモノナリ若シ原告ヨリ正本一通ノミ提出シ其謄本ヲ提出セザルトキハ裁判所ハ其儘ニ差置クノ外ナシ

第九十四條 訴狀ノ送達ト口頭辨論ノ期日ノ間ニハ少ナクトモ二十日ノ時間ヲ存セサル可カラズ尤モ區裁判所ニ於テ受理スル訴訟ハ三日以上ノ期間ヲ存シ爲替訴訟ニ付テハ少ナクトモ二十四時ノ時間ヲ存スルコトナレリ(本法第三百七十七條第四百九十六條第三項)

少ナクトモ二十日云々トアリ故ニ二十日ハ最下點ヲ示シタルモノナリ又此期間ハ訴狀ヲ被告ニ送達シタル時ヨリ起算シ此期間ノ外尙ホ本法第百六十七條ニ從ヒ路程期間ヲ存セサル可カラズ

外國ヘ送達スルトキハ裁判長ニ於テ相當ノ期間ヲ定ムルモノトス

〔參照〕 獨 第二百三十三條 訴狀ハ口頭上審問ノ爲メニスル裁判期日ヲ定ル爲メ訴訟裁判所ノ裁判所書記ニ呈出スヘキモノトス

期日ノ定マリタル後原告ハ訴狀送達ニ付テノ手續ヲナスヘキモノトス

獨 第二百三十四條 訴狀ノ送達ト口頭上審問ノ爲メニスル裁判期日トノ間ハ少クトモ

一月ノ期限アルモノトス(就審期限)大市及小市事件ニアリテハ其就審期限ハ少クトモ二十四時トス

送達ヲ外國ニ於テナスヘキトキ裁判長ハ裁判期日ヲ確定スルノ際就審期限ヲ定ムヘキモノトス

第九十五條 訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ノ送達ニ因リテ生ス  
權利拘束ハ左ノ效方ヲ有ス

第一 權利拘束ノ繼續中原告若クハ被告ヨリ同一ノ訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ於テ本訴又ハ反訴ヲ以テ請求ヲ爲シタルトキハ相手方ハ權利拘束ノ抗辯ヲ爲スコトヲ得

第二 受訴裁判所ノ管轄ハ訴訟物ノ價額ノ増減、住所ノ變更其他管轄ヲ定ムル事情ノ變更ニ因リテ變換スルコト無シ

第三 原告ハ訴ノ原因ヲ變更スル權利ナシ但變更シタル訴ニ對シ本案ノ口頭辨論前被告カ異議ヲ述ヘザルトキハ此限ニ在ラス

〔解義〕 〔分拆〕 〔理由〕 〔的例〕 本條ハ權利拘束ノ時期及ヒ其效力ヲ示定セリ

訴訟物ノ權利拘束ハ訴狀ヲ被告ニ送達スル時ヲ以テ始マリ訴ノ提起ハ訴狀ヲ裁判所ニ提出シタル時ヲ以テ始マルカ故ニ彼此其時期ヲ異ニセリ

○判決前ノ訴訟手續

○判決前ノ訴訟手續

權利拘束ノ何タルコトハ前既ニ解説セリ

訴狀ヲ合式ニ送達シタルトキハ始テ訴訟物ノ權利拘束ヲ生シ而シテ權利拘束トナルトキハ隨テ左ノ效力ヲ生スルモノトス

第一 原告若クハ被告ヨリ既ニ權利拘束トナレル訴訟物ニ付キ他ノ裁判所ニ本訴ヲ起シ又反訴ヲ以テ請求スルトキハ其相手方ハ之カ抗辨ヲ爲スコトヲ得ヘシ此場合ニ於テハ本法第二百六條第三ニ依リ妨訴ノ抗辨ヲ爲スモノトス例ヘハ原告ヨリ被告ニ掛リ甲不動産ノ引渡ヲ訴ヘ既ニ權利拘束トナレルニ又原告ヨリ他ノ裁判所ニ同一ノ訴訟ヲ起シタルトキハ相手方ハ其訴訟ノ他裁判所ニ於テ權利拘束トナレル旨ヲ主張シ其訴訟ヲ拒却スルトコトヲ得ヘシ又賣主ヨリ買主代金ノ請求ヲ訴ヘ既ニ權利拘束トナレルノ後更ニ買主ヨリ賣主ニ掛リ該賣買ノ物件引渡ヲ訴ヘリ此場合ニ於テ賣主ナル被告ヨリ代金未済ヲ以テ反訴ヲ試ムルトキハ買主ナル原告ハ該代金ニ付テハ既ニ他裁判所ニ權利拘束トナレル旨ヲ以テ之ニ抗辨スルコトヲ得ヘシ而シテ權利拘束ノ抗辨ヲ爲サシコハ左ノ三條件ヲ具備セサル可カラズ

第一 同一ノ原被告ナルコト

第二 同一ノ訴訟物ナルコト

第三 同一ノ原因ナルコト

第二 一旦受訴裁判所ノ管轄トナリ權利拘束トナリタル後ハ訴訟物ノ價額ニ増減ヲ生シ

又住所若クハ其他ノ管轄ニ關スル事情ニ變更ヲ生スルコトアルモ毫モ管轄ニ影響ヲ及サズコトナシ例ヘハ家屋引渡ヲ求ムルニ當リ時價九拾圓ヲ見積リ區裁判所ニ訴ヘタル後家屋ノ價格騰貴シテ百五拾圓ニ至リタルトキモ又百五拾圓ノ時價アルトキハ地方裁判所ニ訴ヘ後百圓以下ニ下落セントキモ依然其管轄ニ影響ヲ及ホサルモノトス又被告カ甲裁判所管内ニ住居スル中之テ訴ヘ後被告カ乙裁判所管内ニ轉住スルモ若クハ被告カ甲人軍屬ナルヲ以テ本法第十一條ニ依リ管轄裁判所ニ訴ヘタルニ後軍人軍屬ヲ廢シタルトキノ如ク管轄ヲ定ムル事情ニ變更ヲ生スルコトアルモ依然當初ノ管轄ニ影響ヲ及ホスコトナシ

此三箇ノ場合中訴訟物ノ價額ニ至リテハ稍々他ノ二箇ト性質ヲ異ニセリ何トナレハ訴訟物ノ價額ハ起訴ノ日時ニ於テ算定スルヲ以テ(本法第三條)權利拘束ノ始マラサル前ト雖トモ之カ増減ニ依リ管轄ヲ變換スルコトナケレハナリ

第三 原告ハ訴訟權利拘束ヲ生シタル後ハ原因ヲ變更スルコトヲ得ヌ例ヘハ賣買代金トシテ之ヲ訴ヘ後貸金ナリトシテ之ヲ變更スルヲ得サルノ類之ナリ然レトモ原告ニ於テ之ヲ變更スルモ被告ニ於テ異議ヲ申立テ本案ノ口頭辨論ニ入りタルトキハ最早抗辨スルコトヲ得サルモノトス然レトモ第二審及ヒ第三審ニ於テハ假令被告ニ於テ承諾スルトモ決シテ其變更ヲ許サズルモノトス(本法第四百十三條)

本條ニ於テ尚ホ研究ス可キハ權利拘束ノ終了スル時期之ナリ權利拘束ノ終了スル場合ハ

○判決前ノ訴訟手續



○判決前ノ訴訟手續

左ノ如ク

- 第一 原告カ訴ヲ取下ケタルトキ(本法第九十八條)
- 第二 原告カ請求ヲ拋棄シタルトキ(本法第二百二十九條)
- 第三 被告カ原告ノ請求ヲ認諾セシトキ(本法第二百二十九條)
- 第四 原被告和解セシトキ(本法第二百二十一條)
- 第五 終局判決ノ確定シタルトキ

〔參照〕 獨第二百三十五條 訴訟ノ提起ニ依リ訴訟事件ノ裁判關係ヲ生スルモノトス  
裁判關係ハ左ノ効力ヲ有スルモノトス

第一 裁判關係ノ繼續中原被告ノ一方訴訟事件ヲ他ノ裁判所ニ關係セシムルトキ對手ハ裁判關係ノ辨駁ヲナスコトヲ得

第二 訴訟裁判所ノ權限ハ之ヲ生セシムル狀況ノ變更ニ關係ナキモノトス

第三 原告ハ被告ノ承諾ヲ得ルニアラサレハ訴訟ヲ變更スルノ權ナキモノトス

獨 第二百四十一條 被告訴訟ノ變更ヲ異議スルコトナクシテ其變更シタル訴訟ノ口頭上審問ニ就キタルトキハ被告訴訟ノ變更ヲ承諾シタルモノト看做ス

第九十六條 原告カ訴ノ原因ヲ變更セスシテ左ノ諸件ヲ爲ストキハ異議ヲ述フルコトヲ得ス

第一 事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルコト

第二 本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮スルコト

第三 最初求メタル物ノ滅盡又ハ變更ニ因リ賠償ヲ求ムルコト

〔解義〕

〔附例〕

本條ハ原因ノ變更ニ似テ變更ニ非ラサル場合ヲ示定セリ

前條ニ於テハ訴ノ原因ヲ變更スルノ權利ナシト規定セリ而シテ本條ハ原因ノ變更ニ似テ決シテ然ラサル場合ヲ舉示シ以テ其疑感ヲ豫絶セリ

原告カ原因ヲ變更セスシテ左ノ諸件ヲ爲シタルトキハ被告ハ異議ヲ述フルヲ得ス

第一 原告カ事實上又ハ法律上ノ申述ヲ補充シ又ハ更正スルコト

事實上トハ原被告間ノ契約上ノ事柄ニシテ其事實ノミチ云ヒ法律上トハ其契約ヨリ生スル權利義務ノ關係ヲ云フ事實上ノ申述ヲ補充スルトハ例ヘハ單純ノ貸附金トシテ訴ヘタル後元賣掛代金ヲ貸附金ニ爲シタルトノ事實ヲ附加スルノ類又事實上ノ申述ヲ更正スルトハ初メ賣掛代金ヲ貸附金ニ變シタルトノ事實ヲ以テ訴ヘタル後元賣掛代金ノ事實タケヲ更正シ單純ノ貸附金トアルトカ或ハ二度ニ貸附ケタルト訴ヘタルカ一度ニ貸附ケヨリト改ムルカ如シ又法律上ノ申述ヲ補充スルトハ元賣掛代金ナリシヲ後元賣掛代金ニ改メタルヲ以テ義務ヲ更改セリ即チ舊義務滅シテ新義務ヲ生シタルトノ申述ヲ附加スルカ如ク又法律上ノ申述ヲ更正スルトハ單純ノ貸附金ナルヲ以テ決シテ義務ヲ更改セシニ非ラスト後元賣掛代金ニ改正スルノ類之ナリ

第二 本案又ハ附帶請求ニ付キ訴ノ申立ヲ擴張シ又ハ減縮スルコト

○判決前ノ訴訟手續

○判決前ノ訴訟手續

申立ヲ擴張シ又ハ減縮スルトハ第九十條第三ノ申立ヲ擴張シ減縮スルコトナリ例ハ元金百圓ニ利息拾圓ヲ併シテ訴フルトキ又家屋明渡ニ家賃ヲ併シテ請求スルトキハ元金百圓及ヒ家屋明渡ノ請求ハ本案ニシテ利息及ヒ家賃ノ請求ハ附帶ナリ初メ元金百圓利息拾圓トノ訴ヘシテ後ナ元金百五拾圓利息拾五圓ト擴張スルモ又元金九拾圓ニシテ利息九圓ナリト減縮スルモ隨意ニ變更スルコトヲ得ヘシ然レトモ其申立ノ擴張若クハ減縮ニ依リ自ラ管轄ニ影響ヲ及ボストアリ例ヘハ元金八拾圓ニ利息拾圓ヲ加ヘテ之ヲ區裁判所ニ訴ヘシニ元金百拾圓ニ利息拾五圓ト擴張スルトキハ地方裁判所ノ管轄トナリ又元金百貳拾圓ニ利息拾圓ヲ加ヘテ地方裁判所ニ訴ヘタル後ナ元金八拾圓ニ減少シタルトキハ區裁判所ノ管轄トナルカ如キ之ナリ此場合ニ於テ被告若シ管轄違ノ抗辨ヲ爲ストキハ裁判所ハ第九條ニ從フテ之カ處置ヲ爲サル可カラス

第三 最初求メタル物ノ減盡又ハ變更ニ因リ賠償ヲ求ムルコト

例ヘハ物品ノ引渡ヲ求メタルニ訴訟中該物品ノ被告ノ過失ニ依リ減盡シタルトキ又ハ該物品ノ粗惡トナリタルトキ其請求ヲ損害賠償ニ變スルカ如シ

以上ノ三箇中第三ノ場合ハ嚴格ニ之ヲ論スルトキハ訴ノ原因ヲ變更セサルモノト云フ可カラス何トナレハ最初請求セシ所ノ原因ト相違スレハナリ故ニ之ヲ本條中ニ加ヘタルハ稍々穩當ヲ失ズルニ似タレトモ蓋シ之レノミニ別條ヲ設クルノ必要ナキト且此場合ニ於テハ當然其申立ノ變更ヲ許サル可カラザルトニ依リ已ムナク此中ニ列記セシモノナラン

〔參照〕 獨 第二百四十條 左ノ場合ニ於テハ訴訟ノ理由ヲ變更セザルトキハ之ヲ訴訟ノ變更ト看做スヘカザサルモノトス

第一 事實上又ハ法律上ノ申立ヲ補充シ又ハ更正スルトキ

第二 本事件又ハ副要求ニ關スル訴訟申立ヲ擴張シ又ハ制限スルトキ

第三 後日狀況ノ變シタルカ爲メ最初要求シタル物件ニ換ヘ他ノ物件又ハ利益ヲ要求スルトキ

第九十七條 訴ノ原因ニ變更ナシトスル裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

〔解説〕 訴ノ原因ニ付キ被告ヨリ妨訴抗辨ヲ爲ストキハ裁判所ハ中間判決ヲ下サル可カラス(本法第二百二十七條)而シテ訴ノ原因ニ變更ナシトノ判決ヲ爲シタルトキハ被告ハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス若シ被告ノ抗辨ニシテ立チタルトキ即チ訴ノ原因ニ變更アリトノ判決ヲ下シタルトキハ終局判決トナルヲ以テ原告ハ固ヨリ上訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ

(第九十六條)

不服ヲ申立ツルコトヲ得ストアリ故ニ上訴ハ勿論異議ヲモ申立ツルヲ得ス(本法第三百九十七條)本法中往々上訴ヲ爲スヲ得ス又異議ヲ述フルヲ得ストアリ上訴ヲ爲スヲ得ストハ控訴上告抗告ヲ爲スヲ得サルヲ云ヒ異議ヲ述フルヲ得ストハ只異議ヲ述フルヲ得スト云フニ過キス而シテ不服ヲ申立ツルヲ得ストアルトキハ上訴及ヒ異議ヲ包含スルモノ

○判決前ノ訴訟手續

○判決前ノ訴訟手續

ト解釋セサル可カラス

〔參照〕 獨 第二百四十二條 訴訟ノ變更ナシトスル裁決ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ス

第九十八條 訴ノ全部又ハ一分ハ本案ニ付キ被告ノ第一口頭辨論ノ始マルマテハ被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下ケ又其後口頭辨論ノ終結ニ至ルマテハ被告ノ承諾ヲ得テ之ヲ取下クルコトヲ得  
訴ノ取下ハ口頭辨論ニ於テ之ヲ爲サ、ルトキハ書面ヲ以テ之ヲ爲ス可シ

訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ノ書面ハ之ヲ被告ニ送達ス可シ

適法ナル取下ハ權利拘束ノ總テノ效力ヲ消滅セシムル結果ヲ生ス

取下ケタル訴ヲ再ヒ起シタルトキハ被告ハ前訴訟費用ノ辨濟ヲ受クルマテ應訴ヲ拒ムコトヲ得

〔解義〕 本條ハ訴ヲ取下クル方法ヲ示定セリ

被告ノ第一口頭辨論ノ始マルマテハ原告ハ被告ノ承諾ヲ得スシテ訴ヲ取下クルコトヲ得

ハシ口頭辨論ノ始マリタル後ハ之ヲ取下ケント欲スルトキハ被告ノ承諾ヲ得サル可カラ

訴ノ一分トハ數箇ノ請求ヲ併合シテ訴ヘタルトキ(本法第九十一條)其中ノ一箇ヲ取下クルヲ云フ又口頭辨論ノ始マルトハ第六十三條ニ定ムル事件ノ呼上ヲ爲シ審理ニ取掛リタル時ヲ云フ

口頭辨論ノ始マリタル後ハ之ヲ取下ケント欲シ若シ被告ニ於テ承諾セサルトキハ已ムナシ判決ヲ受クルカ又ハ請求ヲ拋棄スルノ外ナカル可シ

訴ノ取下ハ口頭辨論ニ於テ之ヲ爲ストキハ口頭ヲ以テ申立テ書記之カ調書ヲ作ル又其以前ナルトキハ書面ヲ以テセサル可カラス

訴狀ヲ既ニ送達シタル場合ニ於テハ訴取下ノ書面ハ之ヲ被告ニ送達セサル可カラス故ニ取下ノ書面ハ二通ヲ提出シ一通ヲ裁判所へ取置キ一通ヲ被告ニ送達スルモノトス

取下ニシテ適法ナルトキハ權利拘束ノ効力ヲ消滅セシムルモノトス然レトモ口頭辨論ノ始マリタル後被告ノ承諾ナクシテ取下クルカ如ク其取下ノ不適法ナルトキハ決シテ其効力ヲ生セサルモノトス而シテ口頭辨論前ニ於テハ書面ヲ提出シタルトキ又口頭辨論後ニ於テハ其申立ヲ爲シタルトキヲ以テ其拘束ノ終了ヲ告グルモノトス

原告ニ於テ前取下ケタル訴ヲ再ヒ起シタルトキハ被告ハ前訴訟費用ノ辨濟ヲ受クルマテ其應訴ヲ拒ムノ權利アリ(本法第七十二條)此場合ニ於テハ第二百六條第六ニ依リ妨訴ノ

○判決前ノ訴訟手續

抗辯ヲ爲スモノトス  
訴ノ取下ト抛棄トハ之ヲ混同ス可カラス取下ハ事件ヲ取下クルニ過キサルヲ以テ之ヲ訴  
ヲルヲ得ヘシト雖トモ抛棄ハ其權利ヲ抛棄スルモノナルヲ以テ再ヒ之ヲ訴フルコトヲ得  
ス

〔参照〕 獨 第二百四十三條 訴訟ハ本事件ニ付キ被告ノ口頭上審問ヲ始ムルマテニ限リ  
被告ノ承諾ナクシテ之ヲ取下ルコトヲ得

訴訟ノ取下ハ口頭上審問ノ際陳述セサルトキ書面ヲ送達シテ之ヲナスモノトス其原本ハ  
送達ヲナシタル後直ニ之ヲ裁判所書記局ニ納置クヘシ

訴訟ノ取下ハ訴訟ヲ裁判關係トナラサルモノト看做スヘキノ効力ヲ有スルモノトス其取  
下ハ訴訟費用ニ付キ未ダ言渡ノ確定セサルトキニ限り原告ニ其費用ヲ擔當スルノ義務ヲ  
負ハシムルモノトス被告ノ申立ニ依リ其義務ハ判決ヲ以テ之ヲ言渡スヘシ

更ニ訴訟ヲナストキ被告ハ費用ノ辨償ヲナスマテ就審ヲ拒ムコトヲ得

第九十九條 訴狀送達ノ際十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出ス可キコト  
ヲ被告ニ催告ス可シ

答辯書ニハ準備書面ニ關スル一般ノ規定ヲ適用ス

〔解説〕 本條ハ被告ノ答辯期間及ヒ答辯書ノ作り方ヲ示定セリ  
訴狀ヲ被告ニ送達スルトキハ十四日以内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ催告セサル可カラズ第百

九十四條ニ於テハ訴狀ノ送達ト口頭辨論ノ間ニ二十日以上ノ時間ヲ存セリ然ルニ答辯書  
ヲ十四日以内ニ差出スコトヲ爲シ以テ口頭辨論ノ間ニ若干ノ餘日ヲ存シタルハ原告ニ熟考  
ト準備ノ餘暇ヲ與フルノ趣旨ニ外ナラス

答辯書ハ必ズ之ヲ差出サ、ルモ可ナリ之ヲ差出スト否トハ被告ノ隨意ナリ然レトモ答辯  
書ヲ差出サ、ルトキハ往々原告ノ爲メニ新ニ取調フヘキ事項ヲ生シ辨論ノ延期トナリタ  
ルカ爲メ費用ヲ辨セサル可カラサルノ結果ヲ生スルヲ以テ成ルヘク答辯書ヲ差出スヲ可  
トス(本法第七十五條)又十四日ヲ過キ之ヲ差出ストキモ同一ノ結果ヲ生スルコトアルヲ  
以テ猶ホ法定ノ期日内ニ之ヲ差出スヲ利アリトス

答辯書ハ準備書面ニ關スル一般ノ規定即チ第百五條乃至第百八條ニ從ヒ作製スルモノト  
ス

〔参照〕 獨 第二百四十四條 被告ハ訴狀ノ送達ト口頭上審問ノ爲メニスル裁判期日トノ  
間ニアル時間ノ最初三分ノ二以内ニ準備書面ヲ以テ原告ニ答訴ヲ送達セシムヘキモノト  
ス

第二百條 訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルトキハ被告ハ原告  
ニ對シ其裁判所ニ反訴ヲ起スコトヲ得

然レトモ財産權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴又ハ目的物ニ付キ專  
屬管轄ノ規定アル反訴ハ若シ其反訴カ本訴ナルトキ其裁判所ニ於テ管

轉權ヲ有ス可キ場合ニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス  
反訴ニ對シテハ更ニ反訴ヲ爲スコトヲ得ス

第二百一條 反訴ハ答辨書若クハ特別ノ書面ヲ以テ又ハ口頭辯論中相手  
方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

然レトモ答辨書差出ノ期間内ニ差出シタル書面ヲ以テ起ササル反訴ハ  
被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲スコキ場合ニ於テ同時ニ被告カ  
自己ノ過失ニ因ラスシテ其以前反訴ヲ起スヲ得サリシコトヲ疏明スル  
トキニ限り之ヲ爲スコトヲ許ス

第二百二條 訴ニ關スル此法律ノ規定ハ反訴ニ之ヲ適用ス但其規定ニ因  
リ差異ノ生ヌ可キトキハ此限ニ在ラス

〔解義〕〔分析〕〔的例〕 第二百條乃至第二百二條ハ反訴ノコトニ付キ示定セリ

第二百條 訴カ管轄裁判所ニ於テ權利拘束ト爲リタルトキハ被告ハ原告ニ對シ其裁判所  
ニ反訴ヲ起スコトヲ得ヘシ故ニ反訴ヲ起スニハ訴カ權利拘束トナリタル以後ニ於テセザ  
ル可カラヌ又反訴トハ前既ニ解説セシ如ク反對要求ト云フノ義ニシテ佛法及ヒ獨法ノ如  
ク必ス本訴ト其原因ノ關聯ズルヲ要セス尙モ反對要求ナレハ悉ク之ヲ反訴トスルノ精神

ナリ

本訴ノ裁判所ニ反訴ヲ起スコトヲ得ヘシト雖本條第二項ニ於テ二箇ノ制限ヲ掲ケリ

第一 財産權上ノ請求ニ非サル請求ニ係ル反訴例ヘハ人事ニ關スル反訴ノ如シ

第二 目的物ニ付キ專屬管轄ノ規定アル反訴例ヘハ不動産ニ關スル反訴ノ如シ

右二箇ノ反訴ニ付テハ其反訴カ本訴ナルトキ猶ホ其裁判所ニ於テ管轄權ヲ有スコキ場合  
ニ非ラカレハ之レヲ提起スルコトヲ得ス

故ニ此二箇ノ制限ヲ除クノ外ハ事物若クハ土地ノ如何ニ拘ラス其裁判所ニ反訴ヲ起スコ  
トヲ得ヘシ例ヘハ原告ヨリ百五拾圓ノ貸金ニ付キ地方裁判所ニ本訴ヲ起シタルトキ被告  
ハ貸金五拾圓ニ付キ猶ホ其裁判所ニ反訴ヲ起スコトヲ得ヘシ又被告ニ於テ反訴ヲ起シタ  
ルトキハ恰モ原告ノ地位ニ在ルヲ以テ普通ノ原則ニ從ヘハ本訴原告ノ住所ヲ管轄スル裁  
判所ニ訴ヘサル可カラスト雖トモ此場合ニ於テハ猶ホ已レノ訴ヘラレタル住所地ノ裁判  
所ニ提出スルコトヲ得ヘシ

本訴ニ對シ反訴ヲ起スコトヲ得ヘシト雖トモ反訴ニ對シ更ニ反訴ヲ爲スコトヲ許サス若  
シ之ヲシモ許ストキハ殆ント訴訟ノ終局スル所ヲ知ル能ハサレハナリ

第二百一條 反訴ヲ提出セシニハ答辨書若クハ特別ノ書面ニ於テスルカ又ハ口頭辯論中  
相手方ノ面前ニ於テ口頭ヲ以テセサル可カラヌ

然レトモ期限ナク之ヲ許ストキハ徒ニ訴訟ノ延滞ヲ來スヲ以テ本條ハ之カ制限ヲ附セリ

○判決前ノ訴訟手續

○判決前ノ訴訟手續

二百六十八

即チ答辯書差出ノ期間内ニ差出シタル書面ヲ以テ反訴ヲ起サ、ルトキハ左ノ二條件ノ具備スルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ許セリ

第一 反訴ハ被告ノ請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲スコキトキ

第二 被告カ過失ニ因ラスシテ其以前反訴ヲ起スヲ得サリシコト

以上ノ條件ヲ具備セサルトキハ答辯書期間後ニ反訴ヲ提起スルコトヲ許サ、ルモノトス而シテ此二箇ノ條件ハ共ニ之ヲ疎明セサル可カラズ(本法第二百二十條)

第二百二條 訴ニ關スル此法律ハ其規定ニ因リ差異ノ生セサル限りハ反訴ニ之ヲ適用スルモノトス而シテ其規定ニ因リ差異ノ生スルトハ本法第八十八條第二項第二百二條第三項第二百十二條及ヒ第九十五條ニ定ムル權利拘束ノ時期之ナリ

〔參照〕 獨 第三十三條 反訴ハ其反訴請求訴訟中ニ申立テタル請求ト連係シ又ハ此請求ニ對シ提出シタル辯護方ト連係スルトキ訴訟ノ裁判所ニ之ヲ提出スルコトヲ得  
此規定ハ反對請求ノ訴訟ニ付テノ裁判所ノ權限ヲ協議ヲ以テモ亦定ムルコト能ハサルトキ之ヲ適用セサルモノトス

第二百三條 裁判長ハ申立ニ因リ其命令ヲ以テ第九十九條ニ定メタル期間ヲ相當ニ短縮若クハ伸長シ又第九十四條ニ定メタル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限り二十四時マテニ短縮スルコトヲ得

前項時間ノ短縮ハ此カ爲メ答辯書ヲ差出スコトヲ得サルトキト雖モ亦之ヲ爲スコトヲ得

本條ノ規定ハ第六十七條ニ掲ケタル規定ヲ妨ケス

〔解義〕 本條ハ訴狀送達ヨリ口頭辨論ニ至ルノ期間及ヒ答書差出ノ期間ヲ長短シ得ヘキコトヲ示定セリ

裁判長ハ當事者ノ申立ニ依リ命令ヲ以テ第九十九條ニ定ムル答書差出ノ期間ヲ長短シ又第九十四條ニ定ムル訴狀送達ヨリ口頭辨論ニ至ル時間ヲ切迫ナル危險ノ場合ニ限り二十四時マテニ短縮スルコトヲ得ヘシ

答書差出ノ時間ハ十四日ナルヲ以テ事實上之ヲ伸長スルノ必要アラサルカ如キモ事件繁難ニシテ取調ニ長日ヲ要シ或ハ十四日内ニ答書ヲ差出ス能ハサルコトナシト云フ可カラズ而シテ訴狀送達ト口頭辨論ノ間ニハ少ナクトモ二十日ノ時間ヲ存スルトアリテ二十日ハ其短期ヲ示シタルモノナレハ裁判長ハ初ヨリ其以上ノ時間ヲ定メ得ヘキヲ以テ此ニハ故ヲ伸長ノ語ヲ加ヘサリシモノナリ

切迫ナル危險ノ場合ニ限リトアリ故ニ腐敗シ易キ訴訟物ナルカ或ハ寢蠶ノ如ク季節ニ關スル事件ナルトキニ限り之ヲ短縮スルモノトス而シテ期間ヲ短縮シタルカ爲メ相手方ニ答書ヲ差出ス餘暇ナシトスルモ決シテ之ニ拘ラサルモノトス然レトモ第六十七條ニ定ムル路程期間ハ必ス之ヲ與ヘサル可カラズ

○判決前ノ訴訟手續

二百六十九

**第二百四條** 各當事者ハ訴狀又ハ答辯書ニ掲ケサリシ事實上ノ主張若クハ證據方法又ハ申立ニ付キ相手方カ豫メ穿鑿ヲ爲スニ非サレハ陳述ヲ爲ス能ハスト豫知スル事項アルモハ口頭辯論ノ前ニ書面ニテ差出ス可シ但其書面ヲ相手方ニ送達スル時間及ヒ相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲ス時間ヲ得セシム可シ

口頭辯論ノ延期ヲ爲ストキハ裁判所ハ爾後必要ナル準備書面ヲ差出ス可キ期間ヲ定ムルコトヲ得

〔解義〕〔理由〕 本條ハ補充準備書面ノコトニ付キ示定セリ

訴狀及ヒ答辯書ハ孰レモ準備書面ナリト雖トモ其中訴狀ニ至テハ提起訴狀ノ性質ヲ含有スルヲ以テ答辯書ノ如ク之ヲ差出スト否ト自由ニ任セス必ス之ヲ提出スルコトヲ要セリ而シテ本條定ムル所ハ純然タル準備書面ナルヲ以テ必ス之ヲ差出スヲ要セサルモノトス

原告ハ訴狀ニ被告ハ答辯書ニ各々事實上ノ主張若クハ證據方法又ハ申立ニ付キ之ヲ具備ス可シト雖トモ或ハ當事者ノ怠リニ依リ之ヲ遺脱スルコトナリト云フ可カラズ然ルニ此等ノ準備ヲ怠リ辯論期日ニ至リ初テ之カ申立ヲ爲ストキハ或ハ期日ヲ延期スルニ至リ其費用ヲ辨濟セサル可カラサルコトアルヲ以テ假令ヒ訴答書ヲ提出シタル後ト雖トモ各當

事者ヲシテ其補充書面ヲ提出スルコトヲ許サ、ル可カラス之レ特ニ本條ノ設ケアル所以ナリ然レトモ其先ニ具備セザリシ所ノモノハ悉ク之ヲ補充スルヲ要セス相手方カ豫メ取調ヲ爲サ、レハ之カ陳述ヲ爲ス能ハスト思考スルトキニ限り之ヲ提出シテ可ナリ何トナレハ辨論期日ニ初テ申立ヲ爲ストキト雖トモ相手方ニ於テ直ニ陳述ヲ爲シ得ヘキトキハ決シテ期日ヲ延期スルコトナク隨テ費用負擔ノ不利ヲ招クコトナケレハナリ

又補充書面ヲ差出ストキハ其書面ヲ相手方ニ送達スル時間ト相手方ヲシテ必要ナル穿鑿ヲ爲スニ要スル時間トヲ存セサル可カラズ何トナレハ口頭辯論ノ期日ニ切迫シテ之ヲ差出ストキハ期日ニ申立ヲ爲スト何等ノ差異ナケレハナリ

補充書面ヲ差出シタルカ爲メ口頭辯論ノ延期ヲ爲ストキハ裁判所ハ尙ホ準備書面ヲ差出スニ要スル時間ヲ定ムルコトヲ得ヘシ

〔參照〕 **第二百四十五條** 訴狀及答訴口頭上審問ノ準備ニ不充分ナルトキニ限り各原被告ハ對手ニ於テ豫メ探訪ヲナスニアラサレハ陳述ヲナスコトヲ得ヘカラスト豫知スル事實上ノ主張、證據物及申立ヲ他ノ準備書面ヲ以テ口頭上審問前ニ遞延ナク對手ニ通知シ之ニ必要ナル探訪ヲナスコトヲ得セシムヘキモノトス

口頭上審問ノ延期ヲナストキ裁判所ハ尙ホ必要ナル準備書面ヲ交付スヘキ期限ヲ定ムルコトヲ得

**第二百五條** 口頭辯論ハ一般ノ規定ニ從ヒテ之ヲ爲ス

〔解義〕 本條ハ口頭辯論ハ一般ノ規定即チ總則第百九條以下ニ從ヒテ之ヲ爲ス可キコトヲ示定セシメテニシテ別ニ解釋ヲ要セス

〔參照〕 獨 第二百四十六條 口頭上審問ハ一般ノ規定ニ從テ之ヲナスモノトス

第二百六條 妨訴ノ抗辨ハ本案ニ付テノ被告ノ辯論前同時ニ之ヲ提出ス可シ左ニ掲クルモノヲ妨訴ノ抗辨トス

第一 無訴權ノ抗辨

第二 裁判所管轄違ノ抗辨

第三 權利拘束ノ抗辨

第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辨

第五 訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辨

第六 再訴ニ付キ前訴訟費用未濟ノ抗辨

第七 延期ノ抗辨

本案ニ付キ被告ノ口頭辯論ノ始マリタル後ハ妨訴ノ抗辨ハ被告ノ有效ニ拋棄スルコトヲ得サルモノナルトキ又ハ被告ノ過失ニ非シテ本案ノ辯論前ニ其抗辨ヲ主張スル能ハサリシコトヲ疏明スルトキニ限り之

ヲ主張スルコトヲ得

第二百七條 被告ガ妨訴ノ抗辯ニ基キ本案ノ辯論ヲ拒ムトキ又ハ裁判所カ申立ニ因リ若クハ職權ヲ以テ別ニ辯論ヲ命スルトキハ其抗辯ニ付キ別ニ辯論ヲ爲シ及ヒ判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可シ

妨訴ノ抗辨ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做ス但裁判所ハ申立ニ因リ本案ニ付キ辯論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

〔字解〕 妨訴ノ抗辨トハ文字ノ示ス如ク原告ノ訴ヲ排斥センコトヲ主張スル抗辨ヲ云フ

〔解義〕 第二百六條及ヒ第二百七條ハ妨訴ノ抗辨ノコトニ付キ示定セリ

第二百六條 被告ニ於テ妨訴ノ抗辨ヲ爲サントスルトキハ本案ノ辯論前ニ於テシ又數箇ノ妨訴抗辨アルトキハ同時ニ之ヲ提出セサル可カラズ

本條ハ妨訴抗辨トシテ左ノ數箇ヲ掲ケリ

第一 無訴權ノ抗辨

無訴權ノ抗辨トハ本訴ハ行政事件ニシテ司法裁判ヲ受クヘキモノニアラスト抗辨スルヲ云フ

第二 裁判所管轄違ノ抗辨

裁判所管轄違ノ抗辨ニハ事物ニ關スル管轄違ト土地ニ關スル管轄違トヲ包含セリ



○判決前ノ訴訟手續

第三 權利拘束ノ抗辨

權利拘束ノ抗辨トハ第九十五條ノ場合ヲ云フ

第四 訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辨

第四十三條ニ基キ原告カ自ラ訴訟ヲ爲シ又ハ代理人ヲシテ之ヲ爲サシムル能力ナシト抗辨シ又法律上代理人カ訴訟ヲ爲シ若クハ訴訟行爲ヲ爲スニ付テノ特別授權ナシト抗辨スルヲ云フ

第五 訴訟費用保證ノ欠缺ノ抗辨

第八十八條ニ依リ訴訟費用ノ爲メ供託ス可キ保證ノ欠缺セリト抗辨スルヲ云フ

第六 再訴ニ付前訴訟費用未済ノ抗辨

第九十八條第五項ニ依リ抗辨スルヲ云フ

第七 延期ノ抗辨

保證人カ債務者ニ先タテ訴訟ヲ受ケタルトキ民法債權擔保篇第二十四條ニ依リ債務者ヲ訴訟ニ參加セシムル爲メ辨論延期ノ抗辨ヲ爲スヲ云フ

以上妨訴抗辨ハ必ス本案ノ辨論前之ヲ爲サ、ル可カラス若シ本案ニ立入りタル後ト之レヲ主張スルトキハ最早許可セサルモノトス然レトモ被告ニ於テ顯然辨論ヲ進行セサルト

キ本第二百五十五條第二百五十一條ニ基キ判決スルノ外ナカルヘシ然レトモ辨論後ト雖トモ左ノ場合ニ於テハ妨訴ノ抗辨ヲ爲スコトヲ得ヘシ

一 妨訴ノ抗辨ハ被告ノ有效ニ拋棄スルコトヲ得サルモノナルトキ

前掲クル妨訴抗辨ノ中第一無訴權ノ抗辨第二裁判所管轄違ノ抗辨中專屬管轄ニ屬スルモノナルトキ第四訴訟能力ノ欠缺又ハ法律上代理ノ欠缺ノ抗辨ニ至テハ被告ノ有效ニ拋棄スルコトヲ得サルモノトス何ントナレハ此等ノ場合ニ於テハ當事者ノ申立如何ニ抗ラス裁判所ノ職權ヲ以テ調査ス可キモノナレハナリ(本法第三十一條第四十五條) 一 被告ノ過失ニ非スシテ本案ノ辨論前其抗辨ヲ主張スル能ハサリシコトヲ疏明スルトキ

際限ナシ妨訴抗辨ヲ許ストキハ訴訟ノ延滞ヲ來スヲ以テ特ニ立法者之ヲ辨論前ニ制限セシト雖トモ過失ニ付テ之ヲ主張スル能ハサリシトキ猶ホ之ヲ制限スルハ苛酷ニ失スルヲ以テ此場合ニ於テハ之ヲ許可スルコトヲセリ

第二百七條 被告カ妨訴抗辨ニ基キ本案ノ辨論ヲ拒ムトキ又妨訴抗辨ヲ爲スモ別ニ辨論ヲ拒マサル場合ニ於テ裁判所カ一方ノ申立ニ因リ若クハ職權ヲ以テ別ニ辨論ヲ命ズルトキハ其抗辨ニ付キ別ニ辨論ヲ爲シ又判決ヲ以テ其裁判ヲ爲サ、ル可カラス此場合ニ於テハ第二百二十七條ニ從ヒ中間判決ヲ爲スコキモノトス然レトモ妨訴抗辨ニシテ立チタルトキ即チ本訴ヲ棄却スルトキハ自ラ終局判決ト爲ルヲ以テ第三百九十六條第四百三十二條ニ從ヒ控訴上告ヲ爲スコトヲ得ヘシ

妨訴抗辨ヲ棄却スルトキハ一ノ中間判決ニ過キサルヲ以テ獨立シテ上訴ヲ爲スコカラス

○判決前ノ訴訟手續

○判決前ノ訴訟手續

ト雖此場合ニ於テハ利害ノ關スル所大ナルヲ以テ特ニ本條第二項ニ於テ上訴ヲ許スコトヲモテ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做ストアルハ即チ此意義ヲ表明シタルモノナリ然レトモ此場合ト雖トモ上訴ヲ爲サハルトキハ辨論ヲ中止スルノ必要アラサルヲ以テ當事者ノ申立ニ依リ本案ノ辨論ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス

〔辨疑〕 或ハ云ク第二百六條ニ於テハ妨訴抗辨ヲ七箇ニ制限セリト雖トモ原告又ハ被告ノ資格ニ付テ争アルトキ又ハ時効ニ關シ抗辨ヲ爲ス等ノ場合ニ於テハ尙ホ之ヲ妨訴抗辨トスルモ不可ナルコトナシト曰ク否チ妨訴抗辨ハ七箇ニ制限セルヲ以テ尙モ之ニ該當セザルトキハ妨訴抗辨ト名ク可キモノニアラス然レトモ原告被告ノ資格ニ關シ或ハ時効ニ付キ争アルトキハ本案ノ辨論ニ進ム能ハサルヲ以テ此場合ニ於テハ裁判所ハ第百十九條ニ基キ先ツ此点ニ付テノ辨論ヲ爲サシメ第百二十七條ニ依リ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可キモノトス

〔參照〕 獨 第二百四十七條 各妨訴辨駁ハ同時ニ本事件ニ付テノ被告ノ審問前ニ之ヲ呈出スヘキモノトス

此辨駁ト看做スヘキモノハ左ニ掲クルモノニ限ル

- 第一 裁判所管轄違ノ辨駁
- 第二 司法裁判ヲ許サルコトノ辨駁
- 第三 裁判關係トナリタルコトノ辨駁

第四 訴訟費用ニ付キ保證ナキコトノ辨駁

第五 更ニ訴訟ヲナス爲メ必要ナル前裁判手續ノ費用ノ辨償ヲ未タナサハルコトノ辨駁

第六 訴訟能力ヲ有セサルコト又ハ法律上代理ナキコトノ辨駁

本事件ニ付キ被告ノ口頭上審問ノ始マリタル後妨訴辨駁ハ被告ニ於テ有効ニ拋棄スルコトヲ得ヘカラサルモノナルトキ又ハ被告過失ナクシテ本事件ノ審問前其辨駁ヲ申立ルコト能ハサルノ證明ヲナストキニ限り之ヲ申立ルコトヲ得

獨 第二百四十八條 妨訴辨駁ニ付テハ被告之ヲ以テ本事件ノ審問ヲ拒絕スルトキ又ハ裁判所申立ニ依リ又ハ職權ヲ以テ別段ノ審問ヲ命スルトキ特ニ審問ヲナシ及判決ヲ以テ裁決スヘキモノトス

妨訴辨駁ヲ棄却スル判決ハ上訴ニ關シテハ之ヲ終局判決ト看做スヘキモノトス但裁判所ハ申立ニ依リ本事件ニ付キ審問スヘキコトヲ命スルヲ得

第二百八條 裁判所ハ計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ニ於テハ口頭辨論ヲ延期シ準備手續ヲ命スルコトヲ得但妨訴ノ抗辯アリタルトキハ其完結後之ヲ爲ス

〔釋義〕 本條ハ煩雜ナル事件ニ限リ準備手續ヲ命シ得ヘキコトヲ示定セリ  
裁判所ハ計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ニ限リ口頭辨論ヲ延期シ特ニ受命判事ニ準備手續ヲ命スルコトヲ得ヘシ然レトモ妨訴抗辯アリタルトキハ先ツ抗辯ノ當否ヲ判

○判決前ノ訴訟手續

○判決前ノ訴訟手續

決シ然ル後此手續ニ及フモノトス  
本條ハ準備手續ヲ命シ得ヘキコトヲ定メタルマテニシテ其詳細ハ第二百六十六條以下ニ規定セリ

〔參照〕 獨 第二百五十條 妨訴辨駁ノ完結後裁判所ハ計算ノ正否、財産ノ分別又ハ之ニ類スル關係ニ付テノ訴訟ニアリテハ口頭上審問ヲ延期シテ準備裁判手續ヲ命スルコトヲ得

第二百九條 攻撃及ヒ防禦ノ方法(反訴、抗辯、再抗辯等)ハ第二百一一條ニ規定スル制限ヲ以テ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ提出スルコトヲ得

第二百十條 被告ヨリ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ハ裁判所カ若シ之ヲ許スニ於テハ遲延ス可ク且被告ハ訴訟ヲ遲延セシメントスル故意ヲ以テ又ハ甚シキ怠慢ニ因リ早ク之ヲ提出セサリシコトノ心證ヲ得タルトキハ申立ニ因リ之ヲ却下スルコトヲ得

〔解義〕〔理由〕 第二百九條ハ攻撃防禦ノ方法ヲ提出シ得ヘキ時期ヲ第二百十條ハ時機ニ後レテ提出シタル防禦ノ方法ニ付キ示定セリ  
第二百九條 攻撃トハ原告ヨリ被告ニ對スル主張ヲ云ヒ防禦トハ被告カ原告ノ主張ニ抗

辯スルヲ云フ而シテ原告ヨリ攻撃スルモ亦被告ヨリ防禦スルモ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ判決ニ接著スル口頭辯論トハ最終ノ辯論ト云フノ義ナリ

原告ニ於テ一旦辯論ヲ終リ僅ニ判決ヲ受クルノミトナリタルトキハ最早此方法ヲ用ユル能ハス然レトモ原告合意シテ辯論ノ再開ヲ請求スルトキハ固ヨリ之ヲ許サ、ル可カラズ何トナレハ民事訴訟ハ不干渉主義ナレハナリ

口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ攻撃防禦ノ方法ヲ提出シ得ヘシト雖トモ若シ徒ニ之ヲ許ストキハ遂ニ辯論ノ終局スル所ナキヲ以テ本條ハ特ニ第二百一一條ニ規定セル制限ニ從ハサル可カラズトセリ即チ答辯書差出ノ期限内ニ差出シタル書面ニ依リ此方法ヲ用ヒサルトキハ其請求ノ全部又ハ一分ト相殺ヲ爲ス可キ場合ニシテ且同時ニ之ヲ提出セサルハ自己ノ過失ニ非ラサリシコトヲ疏明スルトキニ限り之ヲ許可スルモノトス斯ク被告ニノミ制限ヲ加ヘタル所以ノモノハ原告ハ一般訴訟ノ進捗ヲ勉ムルモ被告ハ動モスレハ訴訟ヲ延滞セシメントスルノ傾キアレハナリ然レトモ原告モ時機ニ後レテ之ヲ提出スルカ或ハ無益ノ攻撃方法ヲ用ラルトキハ第七十五條第七十六條ニ依リ訴訟費用ヲ負擔スルコトヲ免カレサルモノトス

第二百十條 本條ハ被告ニ對スル前條ノ制限ヲ稍々緩和スルモノナリ假令被告ヨリ時機ニ後レテ防禦ノ方法ヲ提出スルト雖トモ爲メニ訴訟ヲ遲延スルコトナク且被告ニ於テ遲

○判決前ノ訴訟手續



第二百十二條 訴狀其他ノ準備書面ニ於テ主張セサル請求ノ權利拘束ハ口頭辯論ニ於テ其請求ヲ主張シタル時ヲ以テ始マル

〔解義〕 第九十六條第二号ニ依リ訴ノ申立ヲ擴張シタルトキ又第二百條第一項ニ依リ反訴ヲ起タル等ノ場合ニ於テ若シ口頭辯論ノ際之カ申立ヲ爲シタルトキハ權利拘束ハ其時ヨリ始マルモノトス

〔參照〕 獨 第二百五十四條 訴訟中始メテ申立テタル請求ノ裁判關係ハ其請求ヲ口頭上審問中ニ申立ル時ヲ以テ始マルモノトス

第二百十三條 各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辨駁セン爲ニ用非ントスル證據方法ヲ開示シ且相手方ヨリ開示シタル證據方法ニ付キ陳述ス可シ

各箇ノ證據方法ニ付テノ證據申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ第六節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十四條 證據方法及ヒ證據抗辯ハ判決ニ接著スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ之ヲ主張スルコトヲ得  
證據方法及ヒ證據抗辯ノ時機ニ後ノタル提出ニ付テハ第二十條ノ規定ヲ準用ス

定ヲ準用ス

第二百十五條 證據調立ニ證據決定ヲ以テスル特別ノ證據調手續ノ命令ハ第五節乃至第十節ノ規定ニ從フ

第二百十六條 當事者ハ訴訟ノ關係ヲ表明シ證據調ノ結果ニ付キ辨論ヲ爲ス可シ

受命判事又ハ受托判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲シタルトキハ當事者ハ證據調ニ關スル審問調書ニ基キ其結果ヲ演述ス可シ

〔解義〕 (目的例) 第二百十三條及ヒ第二百十四條ハ證據方法及ヒ證據辨抗ノコトヲ第二百十五條ハ證據調ノコトヲ第二百十六條ハ證據調ノ結果ニ付キ辨論ヲ爲スコトヲ示定セリ

第二百十三條 口頭辯論ニハ自ラ一定ノ順序アリ第一一定ノ申立ヲ爲シ第二事實ノ陳述ヲ爲シ第三證據方法及ヒ證據抗辯ヲ爲シ第四證據調ノ結果ニ付キ辨論ヲ爲スヘキモノナリ而シテ裁判官ノ訊問アルトキハ第二若クハ第三ノ次ニ於テ又證據調ヲ爲ストキハ第三ノ次ニ於テ又ヘキモノナラン(本法第九十條第九十一條第九十二條第九十四條第九十五條第九十六條第九十七條第九十八條第九十九條第一百條第一百零一條第一百零二條第一百零三條第一百零四條第一百零五條第一百零六條第一百零七條第一百零八條第一百零九條第一百一十條第一百一十一條第一百一十二條第一百一十三條第一百一十四條第一百一十五條第一百一十六條第一百一十七條第一百一十八條第一百一十九條第一百二十條)  
各當事者ハ事實上ノ主張ヲ證明シ又ハ之ヲ辨駁セン爲メ用非ントスル證據方法アルトキ

○判決前ノ訴訟手續

二百八十四

ハ之ヲ開示シ又相手方ヨリ開示シタル證據方法ニ付キ或ハ認否ノ陳述ヲ爲シ或ハ許否ニ付テノ申立ヲ爲ス可シ而シテ各箇ノ證據方法ニ付テノ申出及ヒ之ニ關スル陳述ハ本篇第六節乃至第十節ノ規定ニ從ハサル可カラズ  
證據方法ト證據調トハ之ヲ混同ス可カラス證據方法トハ其事實ヲ證明スルニ借用證書ヲ以テスルトカ或ハ誰某ヲ證人トスルト云フカ如ク單ニ其立證ノ方法ヲ述フルヲ云フ而シテ證據調トハ各當事者ヨリ申出タル證據方法ヲ取調フルヲ云フ例ヘハ證人ヲ取調ヘ或ハ實地ノ臨檢ヲ爲ス類之ナリ

相手方ノ證據方法ニ付テノ陳述トハ例ヘハ相手方ノ開示セル證人ハ相手方ト親族後見人ノ關係アルヲ以テ之ヲ證人トスルノ資格ナキトカ又相手方ノ開示セル證書ハ本件ニ必要ナラヌト陳述スルノ類之ナリ

第二百十四條 證據方法及ヒ證據抗辨ハ最終ノ口頭辨論マテ之ヲ主張スルコトヲ得ヘシ然レトモ時機ニ後レテ提出シタルトキハ第二百零一條ノ制限ニ從ハサル可カラス

第二百十五條 證據調ノコト又證據決定ヲ以テスル特別ノ證據調手續ノ命令即チ受命判事受託判事ニ命シ證據ヲ取調ヘシムル等ノコトハ本篇第五節乃至第十節ニ規定セリ

第二百十六條 證據調ヲ終リタルトキハ各當事者ハ其訴訟ノ關係ヲ表明ジテ互ニ優等トスル證據ニ付キ辨論ヲ爲シ又相手方ノ證據ニ付キ駁撃ヲ加フヘシ例ヘハ自分ヨリ提出スル證書ハ公正證書ナルニ相手方ノ提出スルハ私證書ナルヲ以テ其效力遙カニ彼レニ優ル

トカ或ハ相手方ノ請求ニ依リ取調ヘタル證人ハ前後矛盾ノ申立ヲ爲セシヲ以テ信ヲ措キ難シトカ或ハ鑑定人ノ申立ハ理由ニ乏シキヲ以テ其效アラザルトカ陳述スルノ類之ナリ而シテ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ爲シタル證據調ニ付テハ其審問調書ニ基キテ辨論セサル可カラズ何トナレハ受命判事受託判事カ爲シタル證據調ハ書記ノ作リタル調書ニ依リテ確定スレハナリ

〔參照〕 獨 第二百五十五條 原被告ノ各方ハ事實上主唱ノ證明又ハ駁斥ニ供セント欲スル證據ヲ記シテ證據ヲ申出テ對手ノ出シタル證據物ニ付キ陳述スヘキモノトス

各個ノ證據物ニ付テノ立證及之ニ對スル陳述ハ第六節ヨリ第十節マテノ規定ヲ以テ之ヲ定ム

獨 第二百五十六條 證據物及證據辨駁ハ判決ノ憑據トナル口頭上審問ノ終結ニ至ルマテ之ヲ申立ルコトヲ得

後日ニ至リ申立テタル證據物及證據辨駁ニ付テモ亦第二百五十一條第二項ノ規定ヲ適用スルモノトス

獨 第二百五十七條 採證及證據決議ヲ以テスル特別採證處分ノ命令ハ第五節ヨリ第十一節マテノ規定ヲ以テ之ヲ定ム

獨 第二百五十八條 採證ノ結果ニ付テハ原被告訴訟關係ヲ明示シテ辨論スヘキモノトス

○判決前ノ訴訟手續

二百八十五

○判決前ノ訴訟手續

訴訟裁判所ニ於テ探證ヲナサ、ルトキ原被告ハ其結果ヲ證據審問書ニ依リ供述スヘキモノトス

第二百十七條 裁判所ハ民法又ハ此法律ノ規定ニ反セサル限りハ辯論ノ全旨趣及ヒ或ル證據調ノ結果ヲ斟酌シ事實上ノ主張ヲ眞實ナリト認ム可キヤ否ヤヲ自由ナル心證ヲ以テ判斷ス可シ

〔解義〕 本條ハ裁判所ハ自由ナル心證ヲ以テ當事者ノ主張シタル事實ノ眞否ヲ判斷シ得ヘキコトヲ示定セリ

裁判所ハ審理全體ノ成績ト證據調ノ結果トヲ斟酌シテ事實ノ眞否ヲ自由ニ判斷スルコトヲ得ヘシ若シ當事者ノ申立不明瞭ナルカ或ハ事實上ノ證明不十分ナルトキハ問ヲ發シテ之ヲ釋明シ及ヒ證據ヲ補充セシメ(本法第百十二條)又職權ヲ以テ檢證鑑定ヲ命シ若クハ本人ヲ訊問シ(本法第百十七條第百六十條)務メテ事實ノ眞否ヲ穿鑿シ以テ判斷ヲ下スヘキモノトス然レトモ如何ニ自由ナル心證ニ依ルヘシト雖トモ決シテ架空ノ想察ヲ以テ可カラス必スヤ心證ノ標準トナリタル理由ヲ判決原本ニ掲載セサル可カラス(本法第百三十六條)

夫レ判斷ノ自由ナルコト斯ノ如シト雖トモ民法又ハ本法ニ於テ規定セル所ハ固ヨリ之ヲ遵奉セサル可カラス例ヘハ民法證據篇第三十六條乃至第三十八條ニ定ムル如ク自由ハ完全ノ證據ナルコト自白ハ事實上ノ錯誤ノ外之ヲ取消ス可カラサルコト又自白ハ分割ス可

カラサルコト同篇第四十七條ニ定ムル如ク公正證書ハ偽造ノ證アルマテ完全ノ證據トナルコト此他第七十五條以下ニ定ムル法律上ノ推定ノ如シ又本法ニ於テハ第百三十四條第百五十五條第二項ニ定ムルカ如キ之ナリ故ニ民法及ヒ本法ニ於テ制限セラル以上ハ證據ヲ取捨固ヨリ裁判所ノ權内ニアルヲ以テ證人鑑定人ノ陳述又本人ノ申立ノ如キハ自由ニ參酌取捨スルコトヲ得ヘシ殊ニ損害賠償ノ請求ニ付テハ判決ニ其心證ノ理由ヲ示スコトナク單ニ其意見ヲ以テ都テノ情狀ヲ斟酌シ且實際ノ經歷ニ基キ損害ノ有無及ヒ其賠償ノ額ヲ裁判スルコトヲ得ヘシ

〔參照〕 獨 第二百五十九條 裁判所ハ審問ノ全體及探證ヲナシタルトキハ其結果ヲ參酌シ其心證ヲ以テ事實上ノ主張ヲ眞實又ハ不眞實ナリト認ムヘキヤ否ヲ裁決スヘキモノトス判決書ニハ裁判官ノ心證ノ標準トナリタル理由ヲ載スヘシ

第二百十八條 裁判所ニ於テ顯著ナル事實ハ之ヲ證スルコトヲ要セス  
〔解義〕 〔理由〕 〔的例〕 本條ハ事實ヲ主張スル者ニ於テ別段證據ヲ舉グルヲ要セサル場合ヲ示定セリ

凡ソ利益ヲ得ソカ爲メ裁判上コト之ヲ主張スル者ハ其事實ヲ證スルノ責任アルハ證據法ノ原則ナリ故ニ之ヲ主張スル者ニシテ其證明ヲ爲ス能ハサルトキハ裁判上敗訴ノ言渡ヲ受クヘキハ自然ノ結果ナリ然レトモ主張者ニ對シ此責任ヲ歸スルハ畢竟裁判所ヲシテ其

○判決前ノ訴訟手續

○判決前ノ訴訟手續

事ノ眞實ヲ知ラシムノ目的ナルヲ以テ若シ裁判所ニ於テ顯著ナル事實即チ裁判所ニ於テ  
公知ナル事ヲ知ラシムノ最早之ヲ證據立ツルノ必要ナシ之レ本條ノ設ケアル所以ナリ

裁判所ニ於テ顯著ナル事實トハ裁判所ノ確知シタリトノ推測ニ係ル事實ヲ云フ例ヘハ裁  
判所ニ於テ現訴訟若クハ他ノ機會ニ付キ生シタル事實又ハ官廳ヨリ裁判所ニ公然通知セ  
ラレタル事實又ハ裁判官ノ有スヘキ學識ニ依リ知ラサル可カラサル事實又ハ普通ノ學識  
ヲ有スル者ニシテ書籍地圖等ニ依リ確ニ知り得ヘキ事實ノ類之ナリ故ニ若シ裁判所ニ於  
テ確知シ得ヘキ事實ニシテ之ヲ知ラサルトキハ職權ヲ以テ其事實ヲ取調ヘサル可カラス

〔參照〕 獨 第二百六十四條 裁判所ニ於テ明知シタル事實ハ證明スルコトヲ要セス

第二百十九條 地方慣習法、商慣習及ヒ規約又ハ外國ノ現行法ハ之ヲ證  
ス可シ裁判所ハ當事者カ其證明ヲ爲スト否トニ拘ハラヌ職權ヲ以テ必  
要ナル取調ヲ爲スコトヲ得

〔解義〕 〔理由〕 〔的例〕 本條ハ前條ト反對ニシテ證據ヲ舉ケサル可カラサル場合ヲ示定  
セリ

一般ニ公認サレタル法律慣習ハ之ヲ證スルヲ要セスト雖トモ地方ノ慣習、商慣習、規約及  
ヒ外國ノ現行法ハ之ヲ證セサル可カラヌ何トナレハ此等ノコトハ必ス裁判所ノ知了スル  
モノト推測スルヲ得サレハナリ然レトモ裁判所ハ當事者ノ證明アルトキト雖トモ進テ之  
カ取調ヲ爲スコトヲ得ヘク又證明セサルトキト雖トモ之ト同シク取調フルコトヲ得ヘシ

本條中規約トアルハ市町村、會社、取引所ノ規約又ハ申合ノ如キヲ云フ

〔參照〕 獨 第二百六十五條 他國ノ現行法、慣習法及申合規則ハ裁判所ニ於テ之ヲ知ラ  
サルトキニ限り證據ヲ要スルモノトス此規準ヲ索知スルニ方リ裁判所ハ原告ノ出シタ  
ル證明ニ束縛セラル、コトナシ亦裁判所ハ其他ノ認知法ヲ使用シ及其使用ノ爲メ必要ナ  
ル處分ヲ命スルノ權ヲ有ス

第二百二十條 此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張ヲ疏明ス可キトキハ裁  
判官ヲシテ其主張ヲ眞實ナリト認メシム可キ證據方法ヲ申出ツルヲ以  
テ足ル但即時ニ爲スコトヲ得サル證據調ハ疏明ノ方法トシテ之ヲ許サ  
ス

〔解義〕 本條ハ疏明ハ如何ナル程度マテ之ヲ證シテ可ナルヘキヤヲ示定セリ

此法律ノ規定ニ依リ事實上ノ主張ヲ疏明ス可キトキ例ヘハ第三十五條第五十七條第七  
十一條第二百一十一條第二百六十六條第二百二十四條等ニ掲グル疏明トハ裁判官ヲシテ眞實ナリ  
ト信シ得ヘキ程ノ證據方法ヲ申出ツルヲ以テ足レリトス而シテ即時ニ取調ヘ得ヘキ證據  
方法ハ之ヲ許スト雖トモ之ニ反スルトキ例ヘハ新期日ヲ定メテ取調ヘサル可カラサルカ  
如キノ證據方法ハ之ヲ許可セサルモノトス

舉證ノ疏明トハ之ヲ區別セサル可カラヌ舉證ヲ要スル場合ハ訴訟物ニ對シ影響ヲ及ボス

○判決前ノ訴訟手續



○判決前ノ訴訟手續

所ノ事實ニ係ルト雖トモ疏明ス可キ場合ハ概テ訴訟手續ニ關スル所ノ申立ヲ證明スルニアリ故ニ舉證ス可キ場合ニシテ舉證セサルトキハ其事實ヲ採用スル能ハスト雖トモ疏明ノ場合ニアリテハ裁判官ハ必スシモ事實ニ付キ十分心證ヲ得ストモ其申立ヲ許容スルコト得ヘシ

〔參照〕 獨 第二百六十六條 何人タリトモ事實上ノ主張ヲ證明スヘキ者ハ宣誓要求ヲ除ク外總テノ證據物ヲ使用スルコトヲ得亦主張ノ眞實ヲ宣誓ヲ以テ保證スルコトヲ許サルコトアルモトス 即時ナスコトヲ得ヘカラサル探證ハ之ヲ許サス

第二百二十一條 裁判所ハ事件ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハス自ラ又ハ受命判事若クハ受託判事ニ依リ訴訟又ハ或ル争點ノ和解ヲ試ムル權アリ和解ヲ試ムル爲ニハ當事者ノ自身出頭ヲ命スルコトヲ得

〔解義〕 本條ハ裁判所ノ見込ヲ以テ訴訟ノ和解ヲ試ミ得ヘキコトヲ示定セリ 裁判所ハ裁判ヲ爲スヨリ却テ和解ヲ爲ス方双方ノ利益若クハ社會ノ公益ト思量スルトキハ訴訟事件ノ如何ナル程度ニアルヲ問ハス受命判事若クハ受託判事ヲシテ訴訟ノ全部又ハ或ル争點ノ和解ヲ試ムルコトヲ得ヘシ若シ訴訟代理人ノ出ツルトキハ當事者本人ノ出當テ命或親シク勸解ヲ加アルコトヲ得ヘシ 和解ニシテ調和シタルトキハ第三百三十條第一號ノ如ク書記ヲシテ之カ調書ヲ作ラシメ其

一件ハ落着トナス而シテ若シ當事者ノ調和シタル事項ヲ遂ケサルトキハ第五百五十九條ノ規定ニ基キ強制執行ヲ爲サシムルコトヲ得ヘシ 事件ノ如何ナル程度ニ在ルヲ問ハストハ口頭辨論前ナルト口頭辨論中ナルト又口頭辨論後ナルトヲ問ハス權利拘束ノ始マリタルヨリ裁判ニ至ルマテノ間ヲ云フノ義ナリ

〔參照〕 獨 第二百六十八條 裁判所ハ訴訟中何時タリトモ訴訟又ハ各箇ノ争點ノ和解ヲ試ミ又ハ和解ヲ試ルカ爲メ原告本人ノ出廷ヲ命スルコトヲ得 和解ヲ試ルカ爲メ原告本人ノ出廷ヲ命スルコトヲ得

第二百二十二條 判決ヲ受ク可キ事項ノ申立ハ書面ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要ス 書面ニ掲ゲサル申立アルトキハ調書ニ附録トシテ添附ス可キ書面ヲ差出シテ之ヲ爲スコトヲ要ス

重要ノ點ニ於テ以前申立テタルモノト異ナル申立ニ付テモ亦同シ 本條ノ規定ヲ遵守セサルトキハ申立ナキモノト看做ス 〔解義〕 本條ハ判決ヲ受ク可キ事項ノ申立ハ必ス書面ニ基キ之ヲ爲スヘキコトヲ示定セリ 判決ヲ受ク可キ事項ノ申立ハ訴訟ノ大眼目ニシテ又裁判所モ此申立ノ範圍内ニ於テ裁判スヘキモノナルヲ以テ(本法第二百三十一條)此點ニ限リ書面ニ基キ之ヲ爲スコトヲ要セ

○判決前ノ訴訟手續

訴狀及ヒ答辨書ニ掲ケサル申立ヲ爲スカ若クハ答辨書ヲ差出サ、ルトキハ又以前申立テタルモノト異ナル申立ヲ爲ストキハ調書ニ附録トシテ添付ス可キ書面ヲ差出サ、ル可カラズ

本條第四項ハ之ヲ制裁ヲ定メリ即チ本條ノ規定ヲ遵守セザルトキハ申立ナキモノト同視セリ

本條ニ所謂申立トハ第九十條第三ニ掲ケル一定ノ申立ト同一ニシテ此他反訴ヲ以テノ申立テ中間判決ヲ受クヘキ事項ノ申立等皆本條ノ申立中ニ包含セリ然レトモ本法中申立ニ依リ云々トアルカ如ク判決ノ事項ニ入ラサルモノハ決シテ此申立中ニ含蓄セサルモノトス

本條ハ區裁判所ノ訴訟ニ適用セス(本法第三百八十條)故ニ區裁判所ノ訴訟手續ニ於テハ假令書面ニ掲ケル申立ト矛盾スルモ又書面ニ掲ケサル申立ヲ爲スモ都テ口頭辨論ノ際申立テタル所ニ依リ裁判スルモノトス

〔參照〕 獨 第二百六十九條 申立ハ準備書面ニ就テ朗讀スヘキモノトス

準備書面ヲ交付セス又ハ其書面ニ申立ヲ掲ケサルトキ朗讀ハ筆記ニ附録トシテ添ヘタル書面ニ就テ之ヲナスヘキモノトス

要點ニ關シ以前朗讀シタルモノニ違フ申立ニ付テモ亦前項同一ナリトス

本條ノ規定ヲ遵守セザルトキハ申立ヲ採用セザルモノトス

第二百二十三條 前條ノ申立ヲ除ク外書面ニ掲ケサル重要ナル陳述又ハ其書面ノ旨趣ト重要ノ點ニ於テ差異ノ存スル事項ハ其差異カ附加、削除其他ノ變更ニ係ルヲ問ハス申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ調書若クハ其附録トシテ添附ス可キ爲メ差出シタル書面ニ依リテ之ヲ明確ニス可シ

〔解義〕 本條ハ前條ノ申立ノ外特ニ明確ニセサル可カラサル場合ヲ示定セリ

前條ノ申立ノ外裁判ニ關係ヲ有ス可キ程重要ナル陳述ニシテ書面ニ掲ケサルトキ又ハ其書面ニ掲ケタル旨趣ト差異ノ存スルトキハ其事項ノ附加ニ係ルト削除ニ係ルト又變更ニ係ルトヲ問ハス當事者ノ申立ニ依リ又申立ナキトキハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ調書中ニ錄取セシムルカ若クハ調書ノ附録トシテ差出シタル書面ヲ以テ之ヲ明確ニセサル可カラズ

第三百三十條第二項第二號ニ明確ニス可キ規定アル申立及ヒ陳述トアルハ即チ本條ノ如キヲ指稱スルモノナリ

重要ナル陳述トハ申立ノ原因タル事實上ノ關係又ハ相手方ノ事實上ノ主張ニ對スル陳述其他事實上主張ノ證明若クハ攻撃ノ爲メ用ヅントスル證據方法ニ付テノ陳述ノ如キヲ云フ

〔參照〕 獨 第二百七十條 申立第二百六十九條ニ關セザルトキニ限り準備書面ニ載セ

○判決前ノ訴訟手續

○判決前ノ訴訟手續

サル重要ナル陳述又ハ其書面ノ主旨ノ追加、削除又ハ其他ノ變更ニ係ル重要ナル違反ハ申立ニ依リ附録トシテ筆記ニ添フヘキ書面ヲ以テ之ヲ確定スヘキモノトス  
自認并ニ要求セラレタル宣誓ノ承諾又ハ反對要求ニ付テノ陳述ニ關シテモ亦申立ニ依リ前項ト同一ノ方法ヲ以テ確定スヘキモノトス

第二百二十四條 當事者ハ訴訟記録ヲ閱覽シ且裁判所書記ヲシテ其正本抄本及ヒ謄本ヲ付與セシムルコトヲ得

裁判長ハ第三者カ權利上ノ利害ヲ疏明スルトキニ限り當事者ノ承諾ナクシテ訴訟記録ノ閱覽及ヒ其抄本竝ニ謄本ノ付與ヲ許スコトヲ得  
判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類竝ニ評議又ハ處罰ニ關スル書類ハ其原本ナルト謄本ナルトヲ問ハス之ヲ閱覽スルコトヲ許サス

〔解義〕 本條ハ訴訟記録ノ閱覽及ヒ記録ノ正本抄本謄本付與ノコトニ付キ示定セリ

訴訟記録ハ裁判所書記ノ保存スルモノナルヲ以テ當事者ハ書記課ニ申出テ訴訟記録ノ閱覽ヲ乞ヒ又書記ヲシテ其正本抄本及ヒ謄本ヲ付與セシムルコトヲ得ヘシ

又第三者カ權利上ノ利害ヲ疏明スルトキハ當事者ノ承諾ナクシテ書記ハ裁判長ノ許可ヲ得テ訴訟記録ノ閱覽ヲ許シ又其抄本竝ニ謄本ヲ付與スルコトヲ得ヘシ若シ第三者ニテモ

當事者ノ承諾スルトキハ裁判長ノ許可ヲ經ルヲ要セス之カ閱覽ヲ許シ又抄本謄本ヲ與ヘサル可カラヌ

然レトモ判決、決定、命令ノ草案及ヒ其準備ニ供シタル書類竝ニ評議又ハ處罰ニ關スル書類ハ其原本ナルト謄本ナルトヲ問ハス之カ閱覽ヲ許ス可カラサルモノトス

訴訟記録ハ訟廷調書其附録裁判所ニ申出シタル準備書面其附屬書類其他訴訟ニ關係スル裁判所ノ書類ヨリ成立ツモノナリ

正本トハ一定ノ方式ヲ以テ調製シタル裁判書ノ謄本ヲ云ヒ抄本トハ訴訟記録ノ抜書ヲ云ヒ謄本トハ其全部ヲ謄寫シタルモノヲ云フ

裁判書ノ正本ハ上訴ヲ爲スカ又ハ強制執行ヲ爲ストキニ限り必要ナルヲ以テ第三者ハ之ヲ所持スルノ必要ナク又之ヲ所持セシムヘキモノニアラス故ニ本條第二項ニハ故ラ正本ノ文字ヲ省ケリ

又第三項ハ之ヲ閱覽スルコトヲ許サストノミアレトモ本項ニ掲クルモノハ秘密ヲ要ス可キ事項ナルヲ以テ其抄本謄本ノ付與ハ無論之ヲ許サルノ義ト解セサル可カラヌ

〔參照〕 獨 第二百七十一條 原告ハ訴訟書類ノ展覽ヲナシ及其書類ノ公製書抜書及謄本ヲ裁判所書記ヨリ受ルコトヲ得

裁判所ノ長ハ權利上利益ヲ證明シタルトキニ限り原告ノ承諾ヲ得ルコトナクシテ他人ニ書類ノ展覽ヲ許スコトヲ得

○判決前ノ訴訟手續

判決、決議及命令ノ按及其準備ニ供シタル參考書並ニ決議又ハ處刑處分ニ關スル書類ハ之ヲ展覽セシメス及曆本ヲ以テ交付セサルモノトス

第二節 判決

第二百二十五條 訴訟カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス

同時ニ辨論及ヒ裁判ヲ爲ス爲メ併合シタル數箇ノ訴訟中ノ一ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦同シ

第二百二十六條 一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ請求中ノ一箇又ハ一箇ノ請求中ノ一分又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テハ本訴若クハ反訴ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ終局判決(一分判決)ヲ以テ裁判ヲ爲ス

然レトモ裁判所ハ事件ノ事情ニ從ヒテ一分判決ヲ相當トセサルトキハ之ヲ爲サルコトヲ得

〔解説〕 第二百二十五條及ヒ第二百二十六條ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲ス可キ場合ヲ示定セリ

第二百二十五條 抑モ裁判ニハ判決、決定、命令ノ三箇アリテ各其性質效果ヲ異ニセリ判決ハ本案ノ請求ヲ判決スルヲ以テ概テ實體上ノ裁判ニ係リ決定命令ハ專ラ形式上ノ裁判ニ係ルモノトス而シテ判決ニ終局判決中間判決ノ別アリテ中間判決ハ決定命令ト同シク形式上ノ裁判ニ係ルコト多シ又判決ト決定ハ裁判所之ヲ爲スト雖トモ命令ハ裁判長並ニ受命判事受託判事之ヲ爲スモノトス

終局判決ハ控訴又ハ上告ヲ爲スコトヲ得ヘシト雖モ中間判決ハ或ル場合ヲ除クノ外終局判決ト伴ハサレハ控訴上告ヲ爲スコトヲ得ス又決定及ヒ命令ハ法律ニ特定シタル場合ニ限リ抗告ヲ以テ不服ヲ申立ツルコトヲ得ヘシ

本條ハ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトニ付キ規定セリ

訴訟手續ニ次クモノハ判決ナリ訴訟ニシテ口頭辨論ヲ終リタルトキハ裁判所ハ本案事件ニ付キ判決ヲ下サル可カラス然レトモ判決ヲ爲スニハ訴訟ノ熟スルヲ要スルカ故ニ若シ裁判所ニ於テ未熟ト思量スルトキハ一旦閉サタル辨論ト雖モ再ヒ口頭辨論期日ヲ開キテ之カ審理ヲ盡スコトヲ得ヘシ(本法第百二十四條)

又同時ニ辨論及ヒ裁判ヲ爲サンカ爲メ併合シタル數箇ノ訴訟中ノ一箇ノミ裁判ヲ爲スニ熟スルトキモ亦終局判決ヲ爲スモノトス第百二十條ニ裁判所ハ同一ノ人又ハ別異ノ人ノ數箇ノ訴訟ニシテ其裁判所ニ繫屬スルモノハ辨論及ヒ裁判ヲ併合ス可キヲ命スルコトヲ得トアリ而シテ併合シタル訴訟ハ必ス同時ニ判決スルモノトスルトキハ一訴訟ノ熟セサ

ルガ爲メ他ノ訴訟ノ裁判ヲ延滞スルヲ以テ此場合ニ於テハ他ノ訴訟如何ニ拘ラヌ判決ヲ爲ス可キモノトス然レトモ裁判官タル者ハ特ニ注意シテ成ル可ク訴訟ヲ同時ニ進捗セシメテ一ノ判決ヲ以テ裁判ヲ爲スノ優レルニ若カサルナリ

第二百二十六條 本條ハ一分ノ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトニ付キ示定セリ

一ノ訴ヲ以テ起シタル數箇ノ請求中ノ一箇(本法第四十八條第百十八條第百九十一條)又ハ一箇ノ請求中ノ一分又ハ反訴ヲ起シタル場合ニ於テ(本法第二百一十條第百一十條第百七十一條)本訴若クハ反訴ノ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ裁判所ハ一分ノ終局判決ヲ以テ裁判ヲ爲スモノトス然レトモ其事件ノ互ニ相貫聯シテ之ヲ分ツニ不便ナルトキハ一分判決ヲ爲スヲ要セサルナリ

〔參照〕 獨 第二百七十二條 訴訟終局裁判ヲナスマテニ熟シタルトキ裁判所ハ終局判決ヲ以テ其裁判ヲ言渡スヘキモノトス

同時ニ審問及裁判ヲナスカ爲メ合併シタル數箇ノ訴訟中其一箇ノミ終局裁判ヲナスマテニ熟シタルトキニモ亦前項同トナリトス

獨 第二百七十三條 一訴訟ニ於テ申立テタル數箇ノ請求中其一箇ノミ又ハ一請求ノ一部ノミ又反訴ヲ申立テタル場合ニ於テ訴訟又ハ反訴ノミ終局判決ヲナスマテニ熟シタルトキ裁判所ハ終局判決(一部判決)ヲ以テ其裁判ヲ言渡スヘキモノトス  
一部判決ノ言渡ハ裁判所事件ノ現狀ニ依リ不適當ナリト認ルルトキ爲サハルコトヲ得

獨 第二百七十四條 被告辯駁ヲ以テ反對要求ヲ申立其要求訴訟ニ於テ申立テタル要求ト權利上連係セサル場合ニ於テ此要求ニ付テノ審問ノミ終局裁判ヲナスマテニ熟シタルトキハ審問ヲ分離シ一部判決ヲ以テ其裁判ヲナスコトヲ得

第二百二十七條 各箇ノ獨立ナル攻撃若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ爭カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得

第二百二十八條 請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ爭アルトキハ裁判所ハ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得

請求ノ原因ヲ正當ナリトスル判決ハ上訴ニ關シテハ終局判決ト看做シ其判決確定ニ至ルマテ爾後ノ手續ヲ中止ス然レトモ裁判所ハ申立ニ因リ其數額ニ付キ辨論ヲ爲ス可キヲ命スルコトヲ得

〔解義〕 〔約例〕 第二百二十七條及ヒ第二百二十八條ハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコキ場合ヲ示定セリ

第二百二十七條 各箇ノ獨立ナル攻撃若クハ防禦ノ方法又ハ中間ノ爭カ裁判ヲ爲スニ熟スルトキハ中間判決ヲ以テ裁判ヲ爲スコトヲ得ヘシ而シテ中間判決トハ此判決ヲ以テ訴訟ヲ終局スルモノニ非ス訴訟ノ中間ニ於テ爲ス所ノ判決ナリ語ヲ變テ之ヲ言ヘハ訴訟ノ全部又ハ一分ヲ終局スル判決ニ非ス單ニ訴訟ノ中間ニ於テ爲ス所ノ判決ヲ云フナリ

各箇ノ獨立ナル攻撃若クハ防禦ノ方法カ裁判ヲ爲スニ熟スルトハ第百十九條ニ依リ同一ノ請求ニ關シ數箇ノ獨立ナル攻撃及ヒ防禦ノ方法ヲ提出シタルトキ裁判所ニ於テ辨論ヲ其一二ニ制限シタルトキ又第百六條第百七條ニ依リ防訴ノ抗辯ヲ爲シタルトキノ如キヲ云フ又中間ノ争カ裁判ヲ爲スニ云々トハ第百十一條ノ場合ヲ云フ

中間判決ハ獨立シテ控訴上告ヲ爲ス可カラズ必ス終局判決ト並行セサル可カラサルコトハ前既ニ解説セリ然レトモ中間判決ト雖トモ時アリテハ終局判決トナルコトアルヲ以テ此場合ニ於テハ固ヨリ控訴上告ヲ爲スコトヲ得ヘシ例ヘハ妨訴抗辯ヲ爲シ其申立ノ立タルト又第百十一條ノ場合ニ於テ被告ノ抗辯正當ナルトキノ如シ何トナレハ此等ノ場合ニ於テハ裁判所ハ原告ノ訴若クハ請求ヲ却下スルヲ以テ最早此他ニ裁判ヲ爲ス可キ事項アラサレハナリ故ニ此等ノ場合ニ於テハ原告ハ通常ノ如ク上訴ヲ爲シ得ヘキモノトス又中間判決ト雖トモ法律ノ規定ニ依リ特ニ終局判決ト看做セル場合アリ(本法第百七條第百二十八條第百二十六條第百九十一條)此時ハ同シク上訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ

第百二十八條 請求ノ原因及ヒ數額ニ付キ争アルトキハ裁判所ハ先ツ其原因ニ付キ裁判ヲ爲スコトヲ得ヘシ例ヘハ甲者ハ乙者ノ過失懈怠ノ爲メ百圓ノ損害ヲ蒙リタリトテ之ヲ請求セシメ乙者ハ決シテ過失懈怠ナシ又之アリトスルモ決シテ百圓ノ損害ヲ生ス可キ謂ハレナシト抗辯セリ此場合ニ於テ裁判所ハ先ツ其原因タル過失懈怠ノ有無ニ付キ裁

判ヲ爲スコトヲ得ヘシ而シテ此判決ニテハ未タ訴訟ヲ終局スルモノニ非ラサルヲ以テ中間判決トナルニ過キス然レトモ此裁判ニ於テ原因ナシト確定シタルトキ前例ニテ云ヘハ乙者ニ過失懈怠ナシト決シタルトキハ最早數額ニ付キ判決ヲ爲スノ必要ナシ即ハテ訴訟ハ之ニテ終了ス可キヲ以テ此場合ニ於テハ終局判決トナルモノナリ若シ請求ノ原因正當ナリト決スルトキハ未タ數額ノ點ニ付テノ判決ヲ爲サル可カラズシテ一ノ中間判決ニ外ナラサルヲ以テ普通ノ規定ニ從ヘハ上訴ヲ爲ス可カラズト雖トモ特ニ此時ハ終局判決ト看做シテ之カ上訴ヲ爲スコトヲ許セリ

又原因ノ正當ナリト決スルトキハ其判決ノ確定スルマテ訴訟手續ヲ中止スルヲ以テ原則トナシ若シ當事者ノ一方若クハ雙方ヨリ申立アルトキハ裁判所ハ續テ辨論ヲ爲スコトヲ命シ得ヘシトセリ

〔參照〕 獨 第百七十五條 各個獨立ノ攻撃方又ハ辨護方又ハ中間訴訟判決ヲナスマテニ熟シタルトキハ中間判決ヲ以テ其判決ヲ爲スコトヲ得

獨 第百七十六條 請求權ノ理由及額ニ付キ争ヒノ起リタルトキ裁判所ハ其理由ニ付キ最初ニ判決スルコトヲ得

其判決ハ上訴ニ關シ之ヲ終局判決ト看做スヘキモノトス但裁判所ハ請求ヲ理由アリトシテ言渡シタルトキ申立ニ依リ其額ニ付審問スヘキコトヲ命スルヲ得

第百二十九條 口頭辨論ノ際原告其訴ヘタル請求ヲ拋棄シ又ハ被告之

ヲ認諾スルトキハ裁判所ハ申立ニ因リ其拋棄又ハ認諾ニ基キ判決ヲ以テ却下又ハ敗訴ノ言渡ヲ爲ス可シ

〔解義〕 本條ハ訴ヲ拋棄シ又ハ請求ヲ認諾スルトキ判決ヲ爲ス可キ場合ヲ示定セリ  
口頭辨論中原告其訴ヲ拋棄スルカ又被告其請求ヲ認諾スルトキ相手方ヨリ申立アリタルトキハ裁判所ハ却下又ハ敗訴ノ判決ヲ爲サ、ル可カラス

申立ニ因リトアリ故ニ裁判所ハ必ス相手方ノ申立アルトキニ非ラザレハ判決ヲ爲ス可カラス即チ原告其訴ヲ拋棄セシトキハ被告ノ申立アルヲ要シ又被告其請求ヲ認諾スルトキハ原告ノ申立アルヲ要スルナリ

訴ヲ拋棄シ請求ヲ認諾スルトキハ第三百三十條第一號ノ規定ニ從ヒ書記官ニテ調査ニ記載セシムルヲ以テ假令判決ヲ爲サズト雖トモ此時ヨリ權利ノ拘束ヲ終リ一件ハ落着トナルモノナリ

本條ノ場合ニ於テ判決ヲ爲スハ殆ソト必要アラサルカ如キモ決シテ然ラス原告ハ一旦訴ヲ拋棄スルモ後日再ヒ之ヲ訴フルモ圖リ知ル可ラス又被告ハ一旦認諾スルモ其義務ヲ履行セサルコトナキヲ保シ難シ然ルニ却下ノ判決アルトキハ之ニ因リテ直ニ原告ノ訴ヲ排斥スルコトヲ得ヘク又敗訴ノ判決アルトキハ必ス第五百一條第一號ニ依リ假執行ノ宣言ヲ爲スヲ以テ原告ハ直ニ其執行ヲ求ムルコトヲ得ヘシ

〔參照〕 獨ニ第二百七十七條 原告其申立テタル請求ヲ口頭上審問ノ際拋棄スル場合ニ於テ被告退斥ヲ申立ルトキハ拋棄ニ依リ原告ヲ其請求ト共ニ退斥スヘキモノトス

獨ニ第二百七十八條 原告ノ一方自己ニ對シ申立テラシタル請求ノ全部又ハ一部ヲ口頭上審問ノ際承認スルトキハ申立ニ依リ其承認ニ從ヒ之ニ對シ敗訴ノ言渡ヲナスヘキモノトス

### 第二百三十條 判決ハ辨論ヲ經タル總テノ攻撃及防禦ノ方法ヲ包括ス

然レトモ數箇ノ獨立ナル攻撃又ハ防禦ノ方法中其一箇ヲ適切ナリトスルトキハ裁判所ハ他ノ方法ニ付キ判斷スル義務ナシ

〔解義〕 本條ハ判決ヲ爲スノ方法ヲ示定セリ

口頭辨論ニ於テ當事者ノ爲シタル攻撃防禦ノ方法ハ悉ク判決ヲ與フルヲ以テ原則トナス故ニ攻撃防禦ノ方法數箇アルトキハ一々其點ニ向テ判決ヲ爲サ、ル可カラス而シテ訴訟ノ曲直ハ僅ニ判決本文ノ數文字ニ於テ定マル可キヲ以テ攻撃防禦ノ方法ハ判決ノ理由中ニ説明スルノ義ト解セサル可カラス

然レトモ攻撃防禦ノ方法多岐ニ涉リ而シテ必要ト認ムルモノ僅々一二ニ止マルトキハ一々判決ヲ與フルノ必要アラサルヲ以テ本條第二項ニ於テハ適切ナル點ニ付テ判決ヲ爲ストキハ爾餘ノ方法ニ付キ判斷スルノ義務ナシト規定セリ

### 第二百三十一條 裁判所ハ申立テサル事物ヲ原告若クハ被告ニ歸セシム

ル權ナシ

裁判所ハ終局判決ヲ爲ス場合ニ於テハ訴訟費用ノ負擔ニ限り申立アラサルモ判決ヲ爲ス可シ然レトモ一分判決ヲ爲ス場合ニ於テハ費用ノ裁判ヲ後ノ判決ニ讓ルコトヲ得

〔解義〕〔理由〕〔的例〕本條ハ裁判所ハ當事者ノ申立テタル範圍内ニ於テノミ裁判ス可シトノ原則並ニ其變例ヲ示定セリ

當事者ノ申立タルコトハ必ス之カ判決ヲ與フ可ク又當事者ノ申立テサルコトハ決テ之カ判決ヲ爲ス可カラストハ訴訟法ノ原則ナリ本條第一項ハ即此二段ノ原則ヲ表示シタルニ外ナラス此ニ言ヘル申立トハ第九十條第三號ニ規定セル一定ノ申立ト同義ナリ而シテ申立テサル事物トハ語ヲ變テ之ヲ言ヘハ當事者ノ請求セサル目的ト言エル義ニシテ例ヘハ原告ヨリ貸金ノ元金ニ付テノミ請求ヲ爲セシトキハ決シテ其利子ニ付キ判決ヲ爲ス可カス又物品八點ニ付テ請求セシトキハ假令十點ヲ返還ス可キ道理アルモ決シテ十點ヲ返還ス可キノ判決ヲ與フ可カラサルカ如シ

本條第二項ハ一ノ變則ヲ定メ訴訟費用ノ負擔ニ限り當事者ノ申立アラサルモ判決ヲ爲ス可シトモ抑本項ヲ設クルノ趣旨タル訴訟費用ハ裁判ヲ受クルニ因リ必ス生ス可キモノナルヲ以テ特ニ之ヲ拋棄スル旨ノ申立ニテラサルトキハ當然之ヲ請求スルノ意思アルモノト推定セシニ外ナラス

訴訟費用負擔ノ言渡ハ必ス判決主文ニ於テ之ヲ爲スヘシト雖トモ第二百二十六條ノ一分判決ノ場合ニ於テハ後日ヨ必ス言渡サ、ル可キ判決アルヲ以テ費用ノ裁判ノミ之ニ讓ルコトヲ得ヘシ

〔參照〕獨 第二百七十九條 裁判所ハ申立テナサ、ル物ヲ原告一方ノ有ニ歸スルノ權ナキモノトス此規定ハ特ニ收獲利子及其他ノ副要求ニ付テ適用ス

裁判所ハ訴訟費用ヲ擔當スルノ義務ニ付テハ申立ナキトキト雖其言渡ヲナスヘキモノトス

第二百三十二條 判決ハ其基本タル口頭辯論ニ臨席シタル判事ニ限り之ヲ爲ス

〔解義〕本條ハ口頭辯論ニ立會ヒタル判事ニ限り判決ヲ爲シ得ヘキコトヲ示定セリ

本法ニ於テハ口頭審理ノ制ヲ取ソル(本法第百三條)カ故ニ其判決モ亦辯論ニ臨席シタル判事ニ限り之ヲ爲サ、ル可カラス從前ニアリテハ書類審理ト口頭審理ヲ混交セシテ以テ係判事ノ中途ニシテ代ハルコトアリトモ更ニ審理ヲ改ムルコトナシ之カ判決ヲ爲セシト雖一初口頭審理ノ制ニ改マリタル上ハ必ス初メヨリ審理スルコト、セサル可カラズ

〔參照〕獨 第二百八十條 判決ハ判決ノ標據トナル審問ニ陪席シタル裁判官ニ限り之ヲ下スコトヲ得

第二百三十三條 判決ハ口頭辯論ノ終結スル期日又ハ直チニ指定スル期



日ニ於テ之ヲ言渡ス但其期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得ス

第二百三十四條 判決ノ言渡ハ判決主文ノ朗讀ニ因リ之ヲ爲ス  
ノ言渡ハ其主文ヲ作ラサル前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

裁判ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ムルトキハ判決ノ言渡ト同時ニ其理由ヲ朗讀シ又ハ口頭ニテ其要領ヲ告ク可シ

〔解義〕〔理由〕〔辨疑〕 第二百三十三條ハ判決ヲ爲スノ時期ヲ第二百三十四條ハ判決ヲ爲スノ方法ヲ示定セリ

第二百三十三條 判決ハ辨論終結ノ即日若クハ辨論終結ノ際直ニ指定スル期日ニ於テ之ヲ言渡シ而シテ指定スル期日ハ七日以内ニ定メサル可カラズ

本條ハ其口頭ニテ聽取リシ所ヲ遺忘セサル内之ヲ言渡サシムルト傍ラ判決ノ延滞ヲ防止スルノ精神ニ出ツ從前ニアリテハ辨論終結ノ際追テ裁判ヲ爲スコキ旨ヲ告ケテ閉廷シ後日言渡ヲ爲スノ際新ニ呼出狀ヲ發セシコトアリト雖トモ本條ニ於テハ決シテ如此コトヲ許サス若シ辨論終結ノ即日言渡ヲ爲ス能ハサルトキハ必ス閉廷ノ際其言渡ノ期日ヲ當事者ニ申告セサル可カラズ又言渡ノ期日ハ七日ヲ過クルコトヲ得ストノミ規定シアリテ一モ其變例ヲ設ケサルニ因テ考フレハ如何ナル事情アルトモ必ス七日内ニ言渡スモノト解セサル可カラズ

或ハ云ク掛判事ノ病氣ニ罹リ事實言渡ヲ爲スコカラサルトキハ如何ト若シ七日ノ期日内ニ病氣ノ全快セサルトキハ判事ノ掛替ヲ爲シ審理ヲ更改スルノ外勿カルヘシ

第二百三十四條 判決言渡ハ判決主文ヲ朗讀シテ之ヲ爲シ闕席ノ儘判決スルトキハ主文ヲ作ラストモ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得ヘシ特リ闕席判決ニ限リ此變則ヲ許シタルハ闕席判決ハ概テ其趣旨ノ簡單ナルヲ以テナリ

又裁判ノ理由ヲ言渡スヲ至當トスルトキハ主文ト同時ニ之ヲ作リテ朗讀スルモ亦ハ口頭ニテ其要領ヲ告グルモ可ナリ

〔參照〕 獨 第二百八十一條 判決ノ言渡ハ口頭上審問ヲ終結スル裁判期日ニ於テ之ヲナシ又ハ直ニ定ムヘキ裁判期日ニ於テ之ヲナスモノトス期日ハ一週ヲ超ユヘカラス

獨 第二百八十二條 判決ノ言渡ハ判決文ヲ讀聞カセテ之ヲナスモノトス懈怠判決ハ未ダ判決ヲ書面ニ作ラサルトキト雖モ之ヲ言渡スコトヲ得

裁決ノ理由ヲ言渡スコトヲ至當ト認ルトキ其言渡ハ理由ヲ讀聞カセ又ハ要領ヲ口告シテ之ヲナスモノトス

第二百三十五條 判決ノ言渡ハ當事者又ハ其一方ノ在廷スルト否トニ拘ハラズ其效力ヲ有ス

言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行シ又ハ他ニ其判決ヲ使用スル原告若クハ被告ノ權ハ此法律ニ特定シタル場合ヲ除ク外相手方ニ其判

決ヲ送達スルト否トニ拘ハラサルモノトス

〔解義〕 本條ハ判決言渡ノ効力ヲ示定セリ

判決言渡ハ當事者又ハ其一方ノ出頭スルト闕席スルトニ拘ハラヌ其效力アルモノトス而シテ雙方ノ出頭セサルトキハ判決ノ言渡ヲ爲スコトアラサルカ如キモ辨論終結ノ際雙方在廷シテ親シク言渡期日ノ指定ヲ受ケ而シテ其期日ニ至リ雙方闕席スルトキハ猶ホ公廷ニ於テ言渡ヲ爲ス可キモノナルヲ以テ本條ニ於テ當事者ノ在廷スルト否トニ拘ハラヌ云云ト定メタルハ決シテ故ナシトス可カラヌ

言渡アリタル判決ニ基キ訴訟手續ヲ續行スルトキ例ヘハ第二百一十一條第二百二十七條ニ從ヒ中間判決ヲ受ケタル後ハ終局判決ヲ爲スヘキ訴訟手續ヲ續行スルカ又ハ他ニ其判決ヲ使用スルトキ例ヘハ第七百四十三條及ヒ第七百四十四條ノ場合ノ如キトキハ法律ニ特定セル場合ノ外相手方ニ其判決ヲ送達スルト否トニ拘ハラヌ之ヲ爲スコトヲ得ヘキモノトス而シテ法律ニ特定スル場合トハ第二百五十五條第四百條第四百三十七條第四百六十六條第四百七十四條第七百四十九條ニ定ムル如キ之ナリ

〔參照〕 獨 第二百八十三條 判決言渡ノ効力ハ原告ノ在席ニ依テ定マルモノニアラス其言渡ハ裁判期日ヲ懈怠シタル一方ニ對シテモ亦効力ヲ有ス

言渡シタル判決ニ依リ裁判手續ヲ繼續シ又ハ他ノ方法ニ於テ判決ヲ使用スル原告一方ノ權ハ此法ニ別段ノ定メナキトキニ限リ對手ニ送達スルト否トニ依テ定マルモノニアラ

第二百三十六條 判決ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

- 第一 當事者及ヒ其法律ト代理人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所
- 第二 事實及ヒ爭點ノ摘示但其摘示ハ當事者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出シタル申立ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第三 裁判ノ理由

第四 判決主文

第五 裁判所ノ名稱、裁判ヲ爲シタル判事ノ官氏名

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ判決書ニ具備ス可キ諸件ヲ示定セリ

判決ニハ左ノ諸件ヲ掲ケサル可カラヌ

第一 當事者及ヒ其法律上代理人ノ氏名、身分、職業及ヒ住所  
 此項ハ何人ノ間ニ判決ヲ受ケタルヤヲ明示スルニ在リ抑判決ノ効力ハ特リ判決ヲ受ケル者ノ間ニ止マリ決シテ第三者ニ及ホス可カラサルカ故ニ後日ノ爭議ヲ防カンニハ之ニ當事者ヲ表示シ置クコト最モ肝要ナリ

第二 事實及ヒ爭點ノ摘示但其摘示ハ當事者ノ口頭演述ニ基キ殊ニ其提出シタル申立ヲ表示シテ之ヲ爲ス

當事者ノ主張スル事實及ヒ當事者ノ相争フ所ノ要領ヲ摘示シテ判決ノ根基スル所ヲ知ラシメ又訴訟ノ上級裁判所ニ繫屬スルトキ上級裁判所ヲシテ前裁判所ノ因據セシ所ヲ知ラシメサル可カラズ而シテ此摘示ヲ爲サンコトハ當事者ノ口頭演述ニ因ラサル可カラズ就中當事者ノ申立ヲ表示セサル可カラズ裁判所カ第二百三十一條ノ原則ヲ遵奉セシヤ否ヲ知ランニハ此申立ヲ舉示スルコト最モ必要ナリ

第三 裁判ノ理由

此項ハ事實上及ヒ法律上ノ關係ニ付テノ判決ノ理由ヲ明ニシ特ニ裁判所ヲシテ事實ノ眞誠ナルコトニ付キ心證ヲ得セシメタル原由ヲ記載スルモノトス若シ此理由ニシテ闕漏スルトキハ上告ノ原因トナルモノトス(本法第四百三十六條第七號)

第四 判決主文

判決ノ主點ヲ掲ケテ其曲直ヲ明ニシ判決主文トハ例ヘハ原告ノ請求相立ストカ被告ハ原告請求ノ金何圓ヲ辨償シ併セテ訴訟費用ヲ負擔スヘシト掲ケルカ如シ強制執行ハ主文ニ基キテ爲ス可キモノナルヲ以テ若シ主文ニシテ不明ナルトキハ執行スル能ハサルニ至ル故ニ主文ハ極メテ正確ナル文體ヲ用ヒ且成ルヘク簡明ニ記載セサル可カラズ

第五 裁判所ノ名稱裁判ヲ爲シタル判事ノ官氏名

裁判所ノ名稱ヲ掲ケルハ其管轄ノ當否ヲ知ルニ必要ナリ又判事ノ官氏名ヲ掲ケルハ定數ノ判事ヲ以テ裁判ヲ組織セシヤ否及ヒ判決ヲ爲シタルハ口頭辨論ニ臨席シタル判事ナル

ヤ否ヲ明確ニセシカ爲メナリ

判決ノ書式ハ未タ公達サレスト雖トモ現時ニテハ第一當事者第二判決主文第三事實争點ノ摘示第四裁判ノ理由第五裁判所ノ名稱裁判ヲ爲シタル判事ノ官氏名ヲ掲ケルコトニ一定セリ然レトモ判決ノ模様ニ依リテハ或ハ主文ヲ後ニ掲ケサル可カラサルコトアリ必ス之ニ拘泥スルヲ要セサルモノトス

本條ハ判決ニノニ適用ス可シト雖トモ決定命令モ亦成ル可ク本條ヲ準用スルヲ可トス

〔參照〕 獨 第二百八十四條 判決書ニハ左ノ件々ヲ掲ルモノトス

第一 原告及其法律上代人ノ氏名、身分又ハ職業、住所及原告タルノ資格

第二 裁判所及判決ニ參與シタル裁判官ノ氏名

第三 其ナシタル申立ヲ併セ原告ノ口頭上供述ニ憑據セル事件及ヒ争論ノ現状ノ概略

(事體)

第四 判決ノ理由

第五 事體及判決理由ノ記載ト外面上分別スヘキ判決文

事體ヲ記載スルニ方リ準備書面ノ主旨及法廷筆記ニ載セタル確定ヲ引用スルコトヲ禁止セサルモノトス

第二百二十七條 判決ノ原本ニハ裁判ヲ爲シタル判事署名捺印ス若シ陪席判事署名捺印スルニ差支アルトキハ其理由ヲ開示シテ裁判長其旨ヲ

附記シ裁判長差支アルトキハ官等最モ高キ陪席判事之ヲ附記ス  
判決ノ原本ハ言渡ノ日ヨリ起算シテ七日内ニ裁判所書記ニ之ヲ交付ス  
可シ

裁判所書記ハ言渡ノ日及ヒ原本領收ノ日ヲ原本ニ附記シ且其附記ニ署  
名捺印ス可シ

〔解説〕〔理由〕 本條ハ判決原本ノコトニ付キ示定セリ

判決原本ハ裁判ヲ爲シタル判事署名捺印シテ之ヲ正確ニセサル可カラズ若シ陪席判事署  
名捺印スルニ差支アルトキハ其理由ヲ開示シテ裁判長其旨ヲ附記シ又裁判長差支アルト  
キハ官等高キ陪席判事之ヲ附記ス而シテ言渡ノ際判決原本ノ調ハサルトキハ言渡ヨリ遅  
クモ七日内ニ之ヲ作りテ裁判所書記ニ交付セサル可カラズ裁判所書記之ヲ受取リタルト  
キハ言渡ノ日及ヒ原本領收ノ日ヲ附記シ且之ニ署名捺印シテ保管スヘキモノトス  
判決原本ハ裁判長之ヲ作ルカ又裁判長ハ陪席判事ヲシテ之ヲ作シムルモノナリ  
判決原本ヲ七日内ニ作りシムル所以ハ當事者ヨリ判決ノ送達ヲ求ムルトキ又假執行ノ宣  
言ヲ附シタル判決ニシテ直ニ執行力アル正本ヲ求ムルトキ之ヲ送達シ之ヲ付與スルニ遅  
延ナカラシメンカ爲メナリ

〔参照〕 獨 第二百八十六條 判決書ニハ裁判ニ參與シタル裁判官署名スヘキモノトス裁

判官其署名ヲナスニ差支アルトキハ裁判長差支ノ理由ヲ掲テ其旨ヲ判決書ニ記載シ裁判  
長差支アル場合ニ於テハ年長ノ陪席裁判官其記載ヲナスモノトス

言渡ノ際未タ完全ナル法式ニ從ヒ書面ニ作ラサル判決書ハ其言渡ノ日ヨリ起算シ一週内  
ニ完全ナル書面ニ作り之ヲ裁判所書記ニ交付スヘキモノトス  
裁判所書記ハ判決書ニ言渡ノ日ヲ記シ之ニ署名スヘキモノトス

第二百三十八條 各當事者ハ判決ノ送達アランコトヲ申立ツルコトヲ得  
其申立アリタルトキハ判決ノ正本ヲ送達ス可シ

第二百三十九條 未タ判決ヲ言渡サス又ハ未タ判決ノ原本ニ署名捺印セ  
サル間ハ裁判所書記ハ其正本、抄本及ヒ謄本ヲ付與スルコトヲ得ス  
裁判所書記ハ判決ノ正本、抄本及ヒ謄本ニ署名捺印シ且裁判所ノ印ヲ  
捺シテ之ヲ認證ス可シ

〔解説〕〔理由〕 第二百三十八條ハ判決送達ノコトニ付キ第二百三十九條ハ判決ノ正本抄  
本謄本ヲ付與スルコトニ付キ示定セリ

第二百三十八條 各當事者ハ判決ノ送達アランコトヲ裁判所書記課ニ申立ツルコトヲ得  
一以此時書記ハ判決書ノ正本ヲ作り第三百三十六條ニ從ヒ當事者ニ送達スルモノトス  
從前ニアリテハ上訴ノ期限ヲ裁判言渡ノ日ヨリ起算セント雖トモ本法ニ於テハ概テ判決

○判決

三百十四

正本ノ送達ヨリ起算スルヲ以テ(本法第二百五十五條第四百條第四百二十七條第四百六十六條第四百七十四條第四百四十九條)速ニ之ヲ確定セシメテ執行ヲ遂ケシメント欲スルトキハ當事者ハ必ス判決ノ送達ヲ求メサル可カラス又敗訴者ト雖トモ其判決ニ對シテ上訴セント欲スルトキハ必ス判決書ノ送達ヲ求メサル可カラス何トナレハ上訴ハ判決ノ送達前ニ提起スルヲ得サレハナリ(本法第四百條第二項第四百三十七條第二項)  
當事者ノ一方ヨリ判決ノ送達ヲ申立ツルトキハ判決正本ハ原告及ヒ被告ニ送達セサル可カラス何トナレハ若シ一方ニ送達シテ他ノ一方ニ送達セサルトキハ判決ハ一人ニ對シテノミ確定シ一人ニ對シテ確定セサルノ結果ヲ生スレハナリ然レトモ相手方ニ對シテノミ確定セシメント欲シ故ラ已ニ送達セサランコトヲ申立ツルトキハ書記ハ強テ其者ニ送達スルコトヲ得ス

判決ノ送達ハ當事者ノ申立アルトキニ限り之ヲ爲スモノトス之レ從前ト大ニ差異アル所ナリ從前ニアリテハ申立ナクトモ職權ヲ以テ之ヲ送達セシト雖トモ若シ當事者ノ望マサルニ之ヲ送達スルトキハ徒ラニ費用ト手數トヲ増スノミナルヲ以テ本條ノ如ク定ムルノ優レルニ若カサルナリ

當事者ニ送達スルニハ必ス正本ヲ以テセサル可カラス何トナレハ裁判ハ正本ノ外効力ヲ生セサレハナリ

第二百三十九條 本條ハ一讀明瞭ニシテ解釋ヲ要セス

判決ノ正本ト謄本トハ其作り方ニ於テハ全一ナリ只冒頭ニ正本ト書シ謄本ト書スルニ因テ區別ヲ付スルノミ

〔參照〕 獨 第二百八十八條 判決書ノ送達ハ原告被告擔當シテ之ヲナスモノトス  
判決ヲ言渡サス及之ニ署名セサル間ハ其公製書及謄本ヲ交付スルコトヲ許サス  
判決ノ公製書及謄書ハ裁判所書記之ニ署名シ裁判所ノ印ヲ捺スヘキモノトス

第二百四十條 裁判所ハ其言渡シタル終局判決及ヒ中間判決ノ中ニ包含シタル裁判ニ羈束セラル

〔解釋〕 本條ハ裁判所ハ自己ノ言渡シタル裁判ヲ遵守セサル可カラスト云ヘル原則ヲ示定セリ

裁判所ハ自己ノ言渡シタル判決ヲ遵守スルノ義務アリ故ニ例ヘハ請求ノ原因ニ付キ爭アリテ一旦原因アリトノ中間判決ヲ爲シ又偽造證書ナリトノ爭アリテ偽造ニアラストノ中間判決ヲ爲シタル末數額又ハ本案ニ付キ審理ヲ始ムル中裁判所ハ其原因ノアラサルコト其證書ノ偽造ナルコトヲ發見スルトモ最早無原因ナリ偽造ナリトノ判決ヲ下スコト能ハサルナリ又終局判決ニ於テモ一旦言渡ヲ爲シタル上ハ假令其言渡ノ不當ヲ發見スルトモ之ヲ變更スルコト能ハサルナリ若シ當事者ニ於テ其判決ニ不服ナルトキハ之ヲ上訴シテ其裁判ヲ釐正セシムルノ外ナカルヘシ  
本條ハ終局判決及ヒ中間判決ニノミ適用シ決定命令ニハ及ボサルモノトス何トナレハ

○判決

三百十五

○判決

三百十六

決定命令ハ第四百五十九條ニ於テ自ラ更正スルコトヲ得ヘキ規定アレハナリ  
〔參照〕 獨 第二百八十九條 裁判所ハ其言渡シタル終局判決書及中間判決書ニ載セタル  
判決ヲ遵守スヘキモノトス

第二百四十一條 裁判所ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ何時ニテモ判決中  
ノ違算書損及ヒ此ニ類スル著シキ誤謬ヲ更正ス

此更正ニ付テハ口頭辨論ヲ經スシテ裁判ヲ爲スコトヲ得  
右更正ノ申立ヲ却下スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス更正ヲ  
宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二百四十二條 主タル請求若クハ附帶ノ請求又ハ費用ノ全部若クハ一  
分ノ裁判ヲ爲スニ際シ脱漏シタルトキハ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ以テ  
判決ヲ補充ス可シ

判決ノ言渡後直ニ追加裁判ノ申立ヲ爲サ、ルトキハ遅クトモ判決ノ  
正本ヲ送達シタル日ヨリ起算シテ七日ノ期間内ニ之ヲ爲スコトヲ要ス  
追加裁判ノ申立アルトキハ即時ニ又ハ新期日ヲ定メテ口頭辯論ヲ爲サ  
シム可シ其辨論ハ訴訟ノ完結セサル部分ニ限り之ヲ爲ス

第二百四十三條 判決ヲ更正シ又ハ補充スル裁判ハ判決ノ原本及ヒ正本  
ニ之ヲ追加シ若シ正本ニ之ヲ追加スルコトヲ得サルトキハ更正又ハ補  
充ノ裁判ノ正本ヲ作ル可シ

〔解義〕 〔内例〕 第二百四十一條及ヒ第二百四十二條ハ第二百四十條ノ例外ニシテ第二  
百四十一條ハ判決ヲ更正シ得ヘキ場合ヲ第二百四十二條ハ判決ヲ補充シ得ヘキ場合ヲ示定  
セリ又第二百四十三條ハ判決ヲ更正シ又ハ補充セシトキハ判決ノ原本及ヒ正本ニ追加ス  
可キコトヲ示定セリ

第二百四十一條 判決ニ違算、書損及ヒ之ニ類スル著シキ誤謬アルトキハ裁判所ハ當事  
者ノ申立ニ因ルモ亦職權ヲ以テスルモ其誤謬ヲ更正スルコトヲ得ヘシ  
本條ニ掲グルル如キハ誤謬ノ著シキモノナルヲ以テ裁判所ハ敢テ口頭辨論ヲ要セスシテ之  
カ決定ヲ爲スコトヲ得ヘシ

裁判所ニ於テ其申立ヲ却下スルトキハ之ニ對シ上訴スルコトヲ得サルモ更正ヲ宣言スル  
トキハ其利害ノ及フ所大ナルヲ以テ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘシ然レトモ申立ヲ却下ス  
ルトキト雖トモ未ダ上訴期限内ナルトキハ勿論本案ノ裁判ニ對シ控訴スルコトヲ得ヘシ  
宣言ト言渡下ハ之ヲ區別セサル可カラス言渡ハ口頭ヲ以テスルトキニ限り之ヲ云フモ宣  
言ハ口頭ヲ以テ言渡ト否トニ因ラサルモノトス

又本條第一項ニ此ニ類スル著シキ誤謬アルトハ例ヘハ原告ノ訴ヲ却下シナカラ訴訟費用

○判決

三百十七

○判 決

ハ被告ニ於テ負擔ス可シト言渡セシ類之ナリ

第二百四十二條 裁判ヲ爲スニ際シ主タル請求若クハ附帶ノ請求又ハ訴訟費用ノ全部若クハ一分ヲ脱漏シタルトキハ當事者ノ申立ニ因リ追加ノ裁判ヲ以テ之ヲ補充スルコトヲ得ヘシ然レトモ此追加裁判ハ限リナク許スカラサルヲ以テ判決言渡後直ニ之ヲ申立ツルカ又ハ遅クトモ判決正本ノ送達後七日内ニ之ヲ爲サル可カラス又此申立アルトキハ即時ニ又ハ新期日ヲ定メテ口頭辨論ヲ爲サシメ之カ判決ヲ爲ス可キモノトス然レハ既ニ訴訟ヲ完結シ單ニ裁判ノミ脱漏セシトキハ一應當事者ノ意見ヲ聞キ判決シテ可ナリ  
本條ハ目的物ノ補充ニ涉ルヲ以テ前條ト大ニ其規定ヲ異ニセリ前條ニ於テハ申立又ハ職權ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得トアレトモ本條ハ申立ニ因リテノミ之ヲ爲スコト、セリ又前條ハ期限ノ定メナキモ本條ハ遅クトモ七日内ト之ヲ定メリ此外前條ト本條トハ必ス口頭ヲ經ルト否トノ差異アリ又本條ニ於テハ終局判決ヲ以テ裁判スルカ故ニ之ニ對シテ上訴スルコトヲ得ヘク尙ホ補充判決ヲ爲シタルトキハ追加判決ヲ送達シタル時ヨリ上訴ノ期限ヲ起算ス(第四百條第三項)

第二百四十三條 判決ヲ更正シ又ハ補充セシトキハ裁判所ニ保存スル判決ノ原本ニ之ヲ追加シ又正本ヲ當事者ニ送達セシトキハ之ヲ差出サシメ以テ之ヲ追加ス若シ當事者ノ旅行ヲ爲シタル等ニ因リ之ヲ差出サシムル能ハサルトキハ新ニ正本ヲ作りテ送達スルモノトス

〔參照〕 獨 第二百九十條 判決書中ニ存スル書損計算違及之ニ等キ判然ナル不正ハ何時  
ヲリトモ裁判所其職權ヲ以テモ亦之ヲ更正スヘキモノトス

其更正ニ付テハ豫メ口頭上審問ナクシテ裁決スルコトヲ得更正ヲ言渡ス決議ハ之ヲ判決書及公製書ニ記載スルモノトス  
更正ヲ求ムルノ申立ヲ却下スル決議ニ對シテハ上訴ヲナスコトヲ許サス更正ヲ言渡ス決議ニ對シテ即時故障ヲ申立ルコトヲ得

獨 第二百九十二條 最初ニ確定シ又ハ後日ニ更正シタル事體ニ依リ原被告一方ノ申立テタル本請求又ハ副請求ノ全部又ハ一部裁決ノ際脱漏シタルキ又ハ費用ノ全部又ハ一部裁決ノ際脱漏シタルトキハ申立ニ依リ後日ノ裁決ヲ以テ其判決ヲ補充スヘキモノトス  
後日ノ裁決ハ判決ノ送達ヲ以テ起算スル一週ノ期限内ニ書面ヲ送達シテ之ヲ申立ヘキモノトス

其書面ニハ補充ノ申立及ヒ口頭上審問ノ爲メニ書出テ載スヘキモノトス  
其口頭上審問ハ訴訟ノ完結セサル部分ニ限リ之ヲ其事件トナスモノトス

第二百四十四條 判決ハ其主文ニ包含スルモノニ限り確定力ヲ有ス

〔解義〕 本條ハ判決ハ其主文ニ限り確定力ヲ生スルコトヲ示定セリ

抑判決ノ效力ニ二種アリ一ハ外部ニ關スル效力ニシテ一ハ内部ニ關スル效力ナリ外部ニ關スル效力トハ關係人ノ判決ニ拘束セラレテ之ニ對シ故障若クハ上訴ヲ爲シ得サルナ云

○判 決

○判 決

ヒ内部ニ關スル效力トハ關係人ガ判決ノ記載ニ拘束セラレテ一旦判決サレタル權利義務ヲ變更スル能ハサルヲ云フ而シテ内部ニ關スル效力ハ判決本文ニ記載シタルモノニ止マリテ其理由等ニ及ハサルモノトス(民法證據篇第七十七條)何トナレハ判決ノ理由ハ畢竟本文ニ記載シタル趣旨ヲ明確ナラシムルニ過キサレハナリ

〔參照〕 獨 第二百九十三條 判決ハ訴訟又ハ反訴ヲ以テ申立テタル請求ニ付キ裁決シタル部分ニ限り確定力ヲ有スルモノトス

辨駁ヲ以テ申立テタル反對要求ノ存否ニ付テノ裁決ハ差引計算ヲナスヘキ額マテニ限り確定力ヲ有スルモノトス

第二百四十五條 口頭辨論ニ基キ爲ス裁判所ノ決定ハ之ヲ言渡スユトシ要ス

第二百二十三條、第二百三十四條ノ規定ハ裁判所ノ決定ニ之ヲ準用シ又第二百三十五條、第二百三十九條及ヒ第二百四十條ノ規定ハ裁判所ノ決定及ヒ裁判長竝ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ニ之ヲ準用ス

言渡ヲ爲サ、ル裁判所ノ決定及ヒ言渡ヲ爲サ、ル裁判長竝ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ハ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達ス可シ

〔正義〕 本條ハ決定命令ノコトニ關シ示定セリ

裁判所ノ決定ハ口頭辨論ヲ經ルヲ以テ原則ト爲スカ故ニ本法中口頭辨論ヲ經スシテ決定シ得ヘキ規定アル場合ノ外ハ必ス口頭辨論ヲ經ヘキモノトス而シテ口頭辨論ヲ經タルトキハ必ス公廷ニ於テ言渡ヲ爲サ、ル可ラス

口頭辨論ニ基キタル決定ニハ第二百三十三條第二百三十四條ノ規定ヲ準用シテ之カ言渡ヲ爲シ又裁判長竝ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令及ヒ決定ニハ第二百三十五條第二百三十九條及ヒ第二百四十條ノ規定ヲ準用スルモノトス然レトモ決定命令ハ第四百五十九條ノ如ク自ラ之ヲ更正スルコトアルヲ以テ抗告ヲ許サ、ル決定命令ニノミ第二百四十條ヲ準用スルモノト解セサル可カラス

言渡ヲ爲サ、ル決定命令ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ當事者ニ送達セサル可カラス 裁判長竝ニ受命判事又ハ受託判事ノ命令ハ之ヲ言渡スモ又ハ言渡サ、ルモ適宜ニ任ス可キモノトス

本節ハ判決ノ表題ナルニ命令決定ノコトヲ掲クルハ聊カ穩當ヲ失スルカ如キモ本節ノ外他ニ本條ヲ設ク可キ適當ノ場所ナキヲ以テ已ムヲ得ス此ニ定メタルモノナリ又決定命令ハ同シシ裁判中ノ一部ナルヲ以テ此節ニ掲クルトモ敢テ失當ト云フ可カラサルナリ

〔參照〕 獨 第二百九十四條 口頭上審問ニ依テナス裁判所ノ決議ハ之ヲ言渡スヘキモノトス

第二百八十條及第二百八十一條ノ規定ハ裁判所ノ決議ニ適用シ第二百八十三條及第二百

○判 決



○ 關席判決

八十八條ノ規定ハ裁判所ノ決議及裁判長並ニ受命裁判官又ハ受託裁判官ノ命令ニモ亦之ヲ適用スルモノトス

言渡サ、ル裁判所ノ決議及言渡サ、ル裁判長並ニ受命裁判官又ハ受託裁判官ノ命令ハ職權ヲ以テ之ヲ原被告ニ送達スヘキモノトス

第三節 關席判決

第二百四十六條 原告若クハ被告口頭辨論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テハ出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ關席判決ヲ爲ス

〔解義〕 本條ハ當事者ノ一方關席シタルトキ相手方ノ申立ニ因リ關席裁判ヲ爲ス可キコトヲ示定セリ

當事者ノ一方口頭辨論ノ期日ニ出頭セサル場合ニ於テ出頭シタル相手方ノ申立アルトキハ裁判所ハ出頭シタル者ノミヲ取調ヘ出頭セサル一方ニ對シテ關席判決ヲ爲サ、ル可カラズ然レトモ原告ノ出頭セサルトキト被告ノ出頭セサルトキハ自ラ取調方ニ差異アリ次ノ二條ニ至レハ之ヲ詳ニスルコトヲ得ヘシ

期日ハ第百五十九條ニ裁判長日及ヒ時ヲ以テ定ムトアリ又第百六十三條ニ期日ハ事件ノ呼上ヲ以テ始マルトアリ故ニ當事者ハ呼出狀ニ記載セル日時マデニ裁判所ヘ出頭セサル可カラズ然レトモ裁判所ノ都合ニ依リ午前ノ取調ヲ午後ニ延ハスコトアルヲ以テ假令時刻後レテ出頭スルトモ未タ辨論ヲ終ラサルトキハ關席判決ヲ受クルコト勿ルヘシ例ヘ

ハ一月十日午前十一時ノ呼出ナルニ偶マ時刻ヲ後レテ午後一時ニ出頭セリ然ルニ裁判所ノ都合ニ因リ未タ辨論ニ着手セサルトキハ固ヨリ關席判決ヲ受クルコトナシ又期日ノ始マリテ辨論ニ取掛レル際出頭セシトキハ裁判所ハ之ヲ訟廷ニ呼入レ辨論ニ立會ハシム可キヲ以テ同シク關席判決ヲ受クルコトナシ然レトモ出頭シタルトキハ辨論ヲ終了スルトキハ又如何トモ爲シ難キヲ以テ成ルヘク定時ニ出頭スルコトニ注意セサル可カラズ

關席判決ノコトニ付テハ本條以下ニ規定セルヲ以テ其所ニ至リ詳悉ス可シト雖トモ暫ラク此ニ關席判決ニ要スル條件ヲ擧クレハ

第一 口頭辨論ノ期日ニ出頭セサルトキ

第二 原被告ノ中孰ノカ一方出頭セサルトキ

若シ原被告雙方出頭セサルトキハ第百八十八條第二項ニ依リ訴訟ハ休止トナル

第三 出頭シタル相手方ノ申立アルトキ

出頭シタル相手方ヨリ關席判決ノ申立ヲ爲サ、ルトキハ其者ノ申立ニ依リテ出頭セサル相手方ヲ新期日ニ呼出スカ又ハ訴訟ヲ休止スルノ二途アルノミ

第四 出頭セサル者ノ合式ニ呼出サレタルトキ(本法第二百五十四條第一號)

若シ合式ニ呼出サレサルトキハ更ニ新期日ヲ定メテ呼出ササル可カラズ

第五 出頭シタル相手方カ裁判所ノ職權上調査ス可キ事情ニ付キ證明ヲ爲シタルトキ(本法第二百五十二條)

○ 關席判決

○闕席判決

第四十三條及第七十條ニ依リ訴訟能力法律代理人訴訟代理人ノ能力及ヒ資格ヲ證明スルコト能ハサルトキハ闕席判決ヲ爲ス可カラズ

第六 出頭シタル一方カ其相手方ニ口頭上事實上ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知シタルトキ(本法第二百五十二條第二號)

第七 出頭セサル相手方カ天災其他避シ可カラサル事變ノ爲メニ出頭スル能ハサルコトノ眞實ト認ム可キ事情ナキトキ(本法第二百五十四條第二號)

第八 裁判管轄違ニ非ラサルトキ

或ハ云裁判管轄ニ非サルトモ被告ノ出頭セサルトキハ之ヲ黙諾シタルモノト做シ闕席判決ヲ爲シテ可ナリト此説非ナリ其闕席シタルハ管轄ヲ黙諾セシニ非ラスシテ反テ管轄ヲ拒ミタルモノト爲サル可カラズ

闕席判決ヲ受クルハ特リ口頭辨論ノ期日ニ出頭セサルトキニ限ラス辨論ニ與カル者秩序維持ノ爲メ辨論ノ場所ヨリ退斥セラレタルトキモ一方ノ申立ニ因リ闕席判決ヲ爲スヘキモノトス(本法第二百二十八條)

闕席判決ヲ爲ストキハ豫メ以上ノ諸件ニ付キ注意セサル可カラズ

又共同訴訟人ノ中出頭セサル者アルトキハ第五十條ニ因リテ之カ取扱ヲ爲シ又證據調ノ期日ニ當事者ノ一方又ハ雙方ノ出頭セサルトキニ付テハ第二百八十四條ニ規定セリ

第二百四十七條 出頭セサル一方カ原告ナルトキハ裁判所ハ闕席判決ヲ

以テ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

〔解義〕 本條ハ原告カ出頭セサルコトニ付キ示定セリ

當事者ノ中原告ノ出頭セサルトキハ被告ノ申立ニ因リ闕席判決ヲ以テ其訴ヲ却下スルモノトス

此場合ニ於テハ毫モ本案ニ立入ルヲ要セス原告カ合式ノ呼出ヲ受ケ出頭セサルコトヲ證明スルノミニテ直ニ判決ヲ爲ス可シ

却下ハ棄却ト區別アルコトハ前已ニ解説セリ闕席判決ヲ以テ却下ヲ言渡シタルトキハ原告ハ後條ノ手續ニ因リテ故障ヲ爲スコトヲ得ヘシ又却下ハ訴ヲ取下ケタルト同一視スヘキヲ以テ故障ニ因ラスシテ再ヒ訴フルコトヲ得ヘシ

〔參照〕 獨 第三百九十五條 原告口頭上審問ノ裁判期日ニ出廷セサルトキハ申立ニ依リ懈怠判決ヲ以テ原告ヲ訴訟ト共ニ退斥スルコトヲ言渡スヘキモノトス

第二百四十八條 出頭セサル一方カ被告ナルトキハ裁判所ハ被告カ原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白シタルモノト看做シ原告ノ請求ヲ正當ト爲ストキハ闕席判決ヲ以テ被告ノ敗訴ヲ言渡シ又其請求ヲ正當ト爲サルトキハ其訴ノ却下ヲ言渡ス可シ

〔解義〕 本條ハ被告ノ出頭セサルコトニ付キ示定セリ

○闕席判決

○關席判決

當事者ノ中被告ノ出頭セサルトキハ原告ノ申立ニ因リ被告カ原告ノ口頭供述ヲ自白シタルモノト看做シ關席判決ヲ以テ被告ニ敗訴ノ言渡ヲ爲スモノトス  
然レトモ原告ノ請求ニシテ正當ナラサルトキハ假令被告ノ出頭セサルトキト雖トモ原告ノ訴ノ却下ヲ言渡サ、ル可カラス而シテ此場合ノ却下ハ前條ノ却下ト異ナリテ再訴ヲ許サ、ルモノトス何トナレハ前條ニ於テハ本案ノ取調ヲ爲サスシテ單ニ訴訟ヲ却下スルト雖トモ本條ハ原告ノ供述ヲ聞キ其請求ノ不當ヲ認メタルニ付キ其權利ヲ排斥シタルモノナレハナリ

被告ノ出頭セサルトキハ原告ハ被告ニ送達セシ準備書面ニ記載セシ事實ノミ供述シテ可ナリ何トナレハ被告ハ準備書面ヲ讀取シ其上ニ見ハル、所ノ事實ハ之ヲ認ムルモノト看做スレハナリ

原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白云々トノミアリテ原告ノ法律上ノ供述ヲ自白云々トナレ故ニ事實ノ點ニ付テハ敢テ審議ヲ要セスシテ之ヲ被告ノ不利ニ歸スルヲ得ト雖トモ原告ノ法律上ノ供述ハ對審ノトキノ如ク之カ當否ヲ審究セサル可カラス

〔參照〕 獨 第二百九十六條 原告口頭上審問ノ裁判期日ニ出廷セサル被告ニ對シ懈怠判決ヲ求ルノ申立ヲナストキ原告ノ口頭上事實ノ供述ハ之ヲ自認セラレタルモノト看做スヘキモノトス  
此供述訴訟申立ノ理由トナル部分ニ限リ其申立ニ從テ判決スヘキモノトス其理由トナラ

ナル部分ニ限リ訴訟ハ之ヲ退斥ス可シ

第二百四十九條 延期シタル口頭辯論ノ期日又ハ口頭辯論ヲ續行スル爲ニ定ムル期日モ亦第二百四十六條ノ辯論期日ニ同シ

〔解義〕 本條ハ辯論延期及ヒ辯論續行ノ期日ニ出頭セサルトキモ亦關席判決ヲ爲シ得ヘキコトヲ示定セリ

第一ノ辯論期日ノミナラス辯論延期ノ期日又ハ辯論續行ノ期日ニ當事者ノ一方出頭セサルトキモ亦第二百四十六條ニ從ヒ關席判決ヲ言渡ス可キモノトス

〔參照〕 獨 第二百九十七條 延期セラレタル口頭上審問ノ裁判期日又ハ證據決議ノ言渡前又ハ其言渡後ニ口頭上審問ヲ繼續スル爲メ定メタル裁判期日モ亦之ヲ前數條ニ云ヘル審問ノ裁判期日ト看做スヘキモノトス

第二百五十條 原告若クハ被告出頭スルモ辯論ヲ爲サ、ルトキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ退廷シタルトキハ初ヨリ出頭セサルモノト看做シ第二百四十六條ニ從ヒ關席判決ヲ爲ス可キモノト

〔解義〕 本條ハ當事者カ出頭スルモ辯論ヲ爲サ、ルトキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ退廷シタルトキノ取扱方ヲ示定セリ

原告若クハ被告出頭スルモ辯論ヲ爲サ、ルトキ又ハ辯論ヲ爲サスシテ任意ニ退廷シタルトキハ初ヨリ出頭セサルモノト看做シ第二百四十六條ニ從ヒ關席判決ヲ爲ス可キモノト

○關席判決

○闕席判決

〔參照〕 獨 第二百九十八條 裁判期日ニ出廷スルモ辨論セサル原被告ハ亦之ヲ出廷セサルモノト看做スヘキモノトス

第二百五十一條 原告若クハ被告カ本案ノ辯論ヲ爲シタルトキハ各箇ノ事實證書又ハ發問ニ付キ陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルモ本節ノ規定ヲ適用セス

〔解義〕 本條ハ闕席判決ヲ爲ス可カラサル場合ヲ示定セリ

原告若クハ被告カ本案ノ辨論ヲ爲シタルトキハ其實證書又ハ發問ニ付キ一々陳述ヲ爲サス又ハ任意ニ退廷スルトモ闕席判決ヲ爲スコトヲ得ス此場合ニ於テハ不完全ナカラモ對審判決ヲ爲サ、ル可カラス故ニ第一ノ辨論期日ニ於テ本案ノ辨論ヲ爲シタルトキハ續行期日ニ於テ闕席スルトモ又ハ事實證書發問ニ付キ一々陳述ヲ爲サスシテ退廷スルトモ決シテ闕席判決ヲ爲スコカラサルモノトス  
本案ノ辨論トハ一定ノ申立ヲ爲シ之ニ關スル事實ヲ陳述シテ本案ノ辨論ヲ爲シタルトキヲ云フ

〔參照〕 獨 第二百九十九條 原被告ノ一方裁判期日ニ辨論シ事實證書又ハ宣誓要求ニ付キ陳述セサルトキハ此節ノ規定ヲ適用セサルモノトス

第二百五十二條 左ノ場合ニ於テハ闕席判決ノ申立ヲ却下ス然レトモ出

頭シタル原告若クハ被告ハ口頭辨論ノ延期ヲ申立ツルコトヲ得

第一 出頭シタル原告若クハ被告カ裁判所ノ職權上調査ス可キ事情ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立ヲ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知セサルトキ

辨論ヲ延期シタルトキハ出頭セサル原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出ス可シ

〔解義〕 本條ハ闕席判決ノ申立ヲ却下ス可キ場合ヲ示定セリ

闕席判決ノ申立ヲ爲スモ左ニ掲クル事情ノ存スルトキハ之ヲ却下セサル可カラス

第一 出頭シタル原告若クハ被告カ裁判所ノ職權上調査ス可キ事情ニ付キ必要ナル證明ヲ爲ス能ハサルトキ

裁判所ノ職權上調査ス可キ場合三箇アリ第一訴訟能力、法律上代理人タル資格及ヒ訴訟ヲ爲スニ必要ナル授權ニ欠歛ナキヤ否ヤヲ調査スルコト(本法第四十五條)第二訴訟委任ニ欠歛ナキヤ否ヲ調査スルコト(本法第七十條)第三地方慣習商慣習及ヒ規約又ハ外國ノ現行法ヲ調査スルコト(本法第二百十九條)

以上ノ三箇ニ付テハ當事者ハ常ニ證明スルノ義務アルヲ以テ相手方ノ出頭セサルカ爲メ

○闕席判決

○ 闕席判決

此義務ヲ免カル、ノ道理ナシ故ニ相手方ノ出頭セサルトキト雖トモ此等ノ證明ヲ爲ス能ハサルトキハ決シテ闕席判決ヲ爲ス可カラサルモノトス

第二 出頭セサル原告若クハ被告ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立テ適當ナル時期ニ書面ヲ以テ通知セサルトキ

被告ノ出頭セサルトキハ原告ノ事實上ノ口頭供述ヲ自白シタルモノト看做シ概テ敗訴ノ判決ヲ爲ス可キカ故ニ原告カ口頭上供述ノ事實又ハ申立ハ豫メ準備書面ニ具備シテ之ヲ被告ニ送達シ置クコト必要ナリ若シ口頭上供述ノ事實ニシテ豫メ被告ニ通知セサルトキハ固ヨリ之ヲ自白シタリト看做ス可カラサルヲ以テ此時ハ闕席判決ノ申立アルトモ之ヲ却下セサル可カラス而シテ此項ニハ出頭セサル原告若クハ被告云々トアレトモ原告ノ出頭セサルトキハ本案ノ辨論ニ入ルコトナク訴ヲノミ却下スルカ故ニ實際準備書面ヲ送達シ置クコトノ必要ナカル可シ

以上ノ二箇ニシテ其一アルトキハ決シテ闕席判決ヲ爲ス可カラスト雖トモ出頭シタル相手方ハ口頭辨論ノ延期ヲ申立テ後席マテニ證明ヲ爲シ又ハ書面ヲ以テ通知スルコトヲ得ヘシ此場合ニ於テハ裁判所ハ出頭セサル相手方ニ新期日呼出狀ヲ送達セサル可カラス本條ニ於テ闕席判決ノ申立テ却下シ若シ辨論ノ延期ヲモ申立テサルトキハ訴訟ハ第百八十八條ニ因リテ自ラ休止トナルモノトス

〔參照〕 獨 第三百條 懈怠判決ノ言渡ヲ求ル申立ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ却下スヘキモノ

トス但出廷シタル原被告ノ一方口頭上審問ノ延期ヲ申立ル權利ハ之カ爲メ變更ヲ受クルコトナシ

第一 出廷シタル原被告ノ一方裁判所ノ職權ヲ以テ參酌スヘキ狀況ニ付キ裁判所ノ求メタル證明ヲナスコト能ハサリシトキ

第二 出廷セサリシ原被告ノ一方ヲ規定ニ從ヒ喚出ササリシトキ特ニ期限内ニ喚出サ、リシトキ

第三 出廷セサリシ原被告ノ一方ニ口頭上事實ノ供述又ハ申立テ期限内ニ書面ヲ以テ通告セサリシトキ

審問ヲ延期スルトキハ出廷セサリシ原被告ノ一方ヲ新ナル裁判期日ニ喚出スヘキモノトス

第二百五十三條

闕席判決ノ申立テ却下スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得又其決定ヲ取消シタルトキハ出頭セサリシ原告若クハ被告ヲ新期日ニ呼出サスシテ闕席判決ヲ爲ス

〔解義〕 〔理由〕 本條ハ闕席判決ノ申立テ却下スルトキハ之ニ對シテ即時抗告ヲ爲シ得ヘキコト又其決定ヲ取消シタルトキハ闕席セシ相手方ヲ呼出サスシテ闕席判決ヲ爲スヘキコトヲ示定セリ

其決定ヲ取消シタルトキハ前段ノ即時抗告ヲ爲シタル場合ニ於テ裁判所カ再度ノ考案若

○ 闕席判決

○闕席判決

三百三十二

クハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ理由アリトシテ不服ノ點ヲ更正シタルトキ（本法第四百五十九條）又ハ抗告裁判所ニ於テ却下ノ決定ヲ廢棄シテ其事件ヲ自ラ裁判スルカ若クハ前裁判所ニ差廻シタルトキヤ云フ

決定ヲ取消シタルトキ出頭セザリシ相手方ヲ呼出サスシテ闕席判決ヲ爲ス所以ハ前期日ニ於テ既ニ辨論ヲ終了シ儘ニ判決ノ一事ノミ殘存スルニ過キサルヲ以テ最早相手方ヲ呼出スノ必要ナキカ故ナリ

〔參照〕 獨 第三百一條 懈怠判決ノ言渡ヲ求ル申立ヲ却下スル決議ニ對シテハ即時故障ヲ申立ルコトヲ得此決議ヲ廢棄スルトキハ出頭セザリシ原被告ノ一方ハ新ナル裁判期日ニ之ヲ喚出スヘカラサルモノトス

第二百五十四條 裁判所ハ左ノ場合ニ於テハ職權ヲ以テ闕席判決ノ申立ニ付テノ辨論ヲ延期スルコトヲ得

第一 出頭セサル原告若クハ被告カ合式ニ呼出サレザリシトキ

第二 出頭セサル原告若クハ被告カ天災其他避ク可カラサル事變ノ爲

ニ出頭スル能ハサルコトノ眞實ト認ム可キ事情アルトキ

出頭セザリシ原告若クハ被告ハ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ

〔解義〕 本條ハ職權ヲ以テ闕席判決ノ申立ニ付テノ辨論ヲ延期ヲ得ヘキ場合ヲ示定セリ

出頭シタル相手方ヨリ闕席判決ノ申立アルトモ左ノ場合ニ於テハ辨論ヲ延期スルコトヲ得ヘシ

第一 出頭セサル原告若クハ被告カ合式ニ呼出サレザリシトキ

此場合ニ於テハ初メヨリ相手方ヲ呼出サ、ルト同一ナルヲ以テ假令申立アリトモ闕席判決ヲ爲ス可カラサルハ固ヨリ當然ナリ而シテ合式ニ呼出サレサルトハ就審期限又ハ喚出期限ノ短キニ過キタルトキ又ハ第百三十六條以下ニ定ムル送達ノ手續ニ違背スル等ヤ云フ

第二 出頭セサル原告若クハ被告カ天災其他避ク可カラサル事變ノ爲メニ出頭スル能ハサルコトノ眞實ト認ム可キ事情アルトキ

此場合ニ於テハ正當ノ事由ニ因リテ出頭スル能ハサルモノナルヲ以テ第一ト同シク闕席判決ヲ爲ス可カラサルハ當然ナリ

本條ノ事情アリテ辨論ヲ延期スルトキハ必ス新期日ニ相手方ヲ呼出サ、ル可カラス而シテ新期日ニハ先ツ闕席判決ニ付テノ辨論ヲ爲サシメ其申立ノ當否ヲ裁判セサル可カラス乃チ審理ノ上本條ノ事情アリト決セラルトキハ闕席判決ノ申立ヲ却下シ若シ事情ノ存セザルトキハ其申立ヲ受理シテ闕席判決ヲ爲ス可キナリ

右申立ヲ却下スル場合ニ於テハ原被告ノ意見ニ任セテ直ニ本案ノ辨論ヲ爲スカ又ハ訴訟ヲ休止ス可キナリ又申立ヲ受理スルトキハ最早辨論ヲ爲サシムルコトヲ闕席判決ノミ

○闕席判決

三百三十三

○闕席判決

ヲ爲シテ可ナリ何トナレハ辨論ハ前期日ニ終了スレハナリ

本條第一第二ノ場合ニ於テハ辨論ヲ延期スルコトヲ得トアレトモ此時ハ必ス延期セサル  
可カラス何トナレハ闕席判決ヲ爲ス可キ根源ノ欠缺スレハナリ故ニ本條ノ場合ハ第二  
四十六條ニ於テ解説セシ如ク寧ロ闕席判決ヲ爲スニ付テノ條件ト決定セサル可カラス

〔參照〕 獨 第三百二條 裁判所ハ裁判長ノ定メタル就審期限又ハ喚出期限短キニ過キタ  
リト認メ又ハ原告ノ一方天災又ハ其他ノ抗拒スヘカラサル事變ニ依リ出廷スルコトヲ  
得ヘカラザリシト認ムルトキ職權ヲ以テ懈怠判決ノ言渡ヲ求ル申立ニ付テノ審問ヲ延期  
スルコトヲ得其出廷セザリシ原告ノ一方ハ新ナル裁判期日ニ之ヲ喚出スヘキモノトス

第二百五十五條 闕席判決ヲ受ケタル原告若クハ被告ハ其判決ニ對シ故  
障ヲ申立ツルコトヲ得

故障申立ノ期間ハ十四日トス此期間ハ不變期間ニシテ闕席判決ノ送達  
ヲ以テ始マル

故障申立ハ判決ノ送達前ト雖モ之ヲ爲スコトヲ得

外國ニ於テ送達ヲ爲スコトキ又ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトキ  
ハ裁判所ハ闕席判決ニ於テ故障期間ヲ定メ又ハ後日決定ヲ以テ之ヲ定  
ム此決定ハ口頭辯論ヲ經スシテ爲スコトヲ得

〔解説〕 本條ハ闕席判決ニ對シテ故障ヲ爲シ得ヘキコト及ヒ其期間ヲ示定セリ

闕席判決ハ一方ノ片言ヲ聞キ之ヲ言渡スモノナルカ故ニ其判決ヤ固ヨリ完全ト云フ可カ  
ラス抑裁判所カ自ラ其不完全ヲ知リツ、之ヲ言渡ス所以ノモノハ一ハ以テ訴訟ノ延滞ヲ  
防キ一ハ以テ懈怠者ヲ責罰スルノ趣旨ニ出ツ之ヲ要スルニ闕席判決ハ假定ノモノタルニ  
過キサルナリ故ニ本條ニ於テハ闕席判決ヲ受ケタル者ニ故障ヲ爲スコトヲ許シテ新判決  
ヲ受ケシムル道ヲ與ユリ

故障ハ上訴ト混同ス可カラス上訴ハ控訴上告及ヒ抗告ノ三箇ニ制限シテ上訴ハ上級  
裁判所ニ申立テ前裁判ヲ廢止セシムルヲ目的ト爲スト雖トモ故障ハ闕席判決ヲ爲シタル  
裁判所ニ申立テ、新判決ヲ爲サシムルモノナリ語ヲ換ヘテ之ヲ言ヘハ假定判決ニ代ヘテ  
確定判決ヲ爲サシムルニ外ナラス故ニ故障ト他三種ノ上訴トハ大ニ其趣ヲ異ニセリ本法  
中故障ト名クルモノ二種アリ一ハ本條ニシテ一ハ支拂命令ニ附スル執行命令ニ對スル故  
障ニシテ第三百九十四條ニ規定セリ

故障ヲ申立テノニハ闕席判決ノ送達ヨリ十四日內ニ於テセサル可カラス而シテ此期間ハ  
不變期間ナルヲ以テ決シテ之ヲ伸縮スル能ハス又裁判所ノ休暇ト雖トモ其期間ノ進行ヲ  
止メサルモノナリ(本法第六十八條第七十條)然レトモ外國ニ於テ判決ヲ送達ス可キ  
トキ又ハ公ノ告示ヲ以テ之ヲ爲スコトキハ裁判所ハ闕席判決ニ於テ相當ノ故障期間ヲ  
定メテ言渡シ又ハ別段ノ決定ヲ以テ後日ニ之ヲ言渡スモノナリ

○闕席判決

○闕席判決

又闕席故障ハ控訴上告ト異ナリ判決ノ送達前ト雖トモ之カ中立ヲ爲スコトヲ得ヘシ(本法第四百條第四百三十七條)

闕席判決ニシテ故障ヲ爲シ得ヘキトキハ故障ヲ經スシテ直ニ控訴上告ヲ爲スコトヲ得ス(本法第三百九十八條第四百五十四條)又十四日ノ故障期間内ニ故障ヲ爲サルトキハ其判決ハ闕席者ニ對シテハ確定スルヲ以テ強制執行ヲ求ムルコトヲ得ヘシ然レトモ闕席判決ヲ申立テタル者ハ其判決ニ對シテ上訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ

〔參照〕 獨 第三百三條 懈怠判決ノ言渡ヲ受ケタル原告ノ一方ハ其言渡ニ對シ異議ヲ申立ルノ權アルモノトス

獨 第三百四條 異議申立ノ期限ハ二週トス其期限ハ不變期限ニシテ懈怠判決ノ送達ヲ以テ始マルモノトス

其送達ヲ外國ニ於テナシ又ハ公告ヲ以テナスヘキトキ裁判所ハ懈怠判決又ハ後日豫メ口頭上審問ナシテ言渡スコトヲ得ル別段ノ決議ヲ以テ異議期限ヲ定ムヘキモノトス

第二百五十六條 故障申立ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書面ヲ差出シテ之ヲ爲ス

此書面ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 故障ヲ申立テラレタル闕席判決ノ表示

第二 其判決ニ對スル故障ノ申立

此書面ニハ本案ニ付テノ口頭辯論準備ノ爲ニ必要ナル事項アルトキモ亦之ヲ掲ク可シ

〔解義〕 本條ハ故障申立ハ書面ヲ以テ爲ス可キト及其書面ニ具備ス可キ條件ヲ示定セリ

故障ノ申立ハ闕席判決ヲ爲シタル裁判所ニ書面ヲ提出シテ之ヲ爲シ而シテ書面ニハ必ス左ノ諸件ヲ具備セサル可カラズ

第一 故障ヲ申立テラレタル闕席判決ノ表示

闕席判決ハ其全部ヲ掲ケストモ其中ノ重ナル部分ヲ摘載シテ可ナリ要スルニ闕席判決ヲ受ケタルコト及ヒ如何ナル判決ヲ受ケタルヤヲ表示スルヲ以テ足レリトス

第二 其判決ニ對スル故障ノ申立

闕席判決ニ對シテ故障ヲ申立ツルコトノ記載ノミヲ以テ足レリトス決シテ其理由等ヲ記スルヲ要セス

此他曾テ準備書面ヲ相手方ニ送達セサルトキ又會テ送達シタル準備書面以外ノ事項ヲ口頭辯論ニ於テ提出セシトスルトキハ總テ其口頭辯論ノ爲メニ必要ナル事項ヲ掲ク可シ右第一第二ノ條件ハ必ス之ヲ具備セサル可カラズト雖トモ第三項ノ準備事項ハ必ス之ヲ掲クルコトヲ要セサルナリ然レトモ前ニモ解説セシ如ク之ヲ掲ケサルトキハ不利益ノ結果ヲ生スルコトアルヲ以テ成ル可ク之ヲ掲クルヲ可トス

○闕席判決



○闕席判決

〔参照〕 獨 第三百五條 異議ノ呈出ハ書面ヲ送達シテ之ヲナスモノトス其書面ニハ左ノ件々ヲ記載スヘシ

第一 異議セラルル判決

第二 其判決ニ對シ異議ヲ呈出スル旨

第三 本事件ニ付テノ口頭上審問ノ爲メニスル對手ノ喚出  
其書面ニハ同時ニ本事件ニ付テノ審問準備ノ爲メ必要ナル事件ヲ掲クヘシ

第二百五十七條 判然許ス可カラサル故障又ハ判然法律上ノ方式ニ適セス若クハ其期間ヲ經過後ニ起シタル故障ハ裁判長ノ命令ヲ以テ之ヲ却下ス可シ

此却下ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

〔解説〕 〔的例〕 本條ハ裁判長ノ命令ヲ以テ故障申立ヲ却下ス可キ場合ヲ示定セリ

判然許ス可カラサル故障例ハ闕席判決ニ非ラサルトキノ如ク又判然法律上ノ方式ニ適

セサルトキ例ハ前條第二項ノ諸件ヲ具備セサルトキノ如ク若クハ其期間ヲ經過スルト

キ即チ十四日ノ期間ヲ經過シタルハ故テ合議裁判ヲ用ヒストモ裁判長ノ命令ヲ以テ之

ヲ却下スヘキモノトス

本條ト第三百五十九條トハ之ヲ混同ス可カラズ本條ハ口頭審理ヲ開カサル前即チ故障申

立書ヲ差出シタル當時之ヲ却下スルノ手續ヲ定メ第二百五十九條ハ口頭審理ヲ開キタル後ヲ始テ受理ス可カラサルコトヲ發見シタルトキ合議裁判所ニテ之ヲ却下ス可キコトヲ定メタルモノナリ

本條ハ判然故障ヲ受理ス可カラサルトキニ限り裁判長ノ命令ヲ許スモノナルヲ以テ裁判

長ニ於テ若シ疑義アルトキハ合議裁判ニ因テ判決セサル可カラズ然レトモ實際ニ就テ考

フルトキハ大抵本條ニ因テ決ス可キヲ以テ第二百五十九條ヲ適用スルコトハ殆ント稀ナ

シ

裁判長ニ於テ故障ノ申立ヲ却下スルトキハ之ニ對シテ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘシ

第二百五十八條 前條ノ場合ヲ除ク外裁判所ハ故障申立ノ書面ヲ相手方ニ送達シ且故障ニ付キ口頭辯論ノ新期日ヲ定メ當事者ノ雙方ヲ呼出ス可シ

〔解説〕 裁判長ニ於テ故障ノ申立ヲ適法トスルトキハ裁判所ハ書記ヲシテ故障申立ノ書面ヲ相手方ニ送達セシメ且之ト同時ニ裁判長ハ口頭辯論ニ付テノ新期日ヲ定メテ當事者雙方ヲ呼出サシムルモノトス(本法第五百十九條)

第二百五十九條 裁判所ハ職權ヲ以テ故障ヲ許ス可キヤ否ヤ又法律上ノ法式ニ從ヒ若ハ其期間ニ於テ故障ヲ申立テタルヤ否ヤヲ調査ス可シ

○闕席判決

○ 闕席判決

若シ此要件ノ一ヲ缺クトキハ判決ヲ以テ故障ヲ不合法トシテ棄却ス  
〔解義〕 本條ハ裁判所ニ於テ適法ノ故障ナルヤ否ヤヲ調査シ若シ不合法ナルトキハ之ヲ棄却ス可キコトヲ示定セリ

前條ノ手續ヲ爲シ口頭辨論ヲ開キタル後裁判所ハ先ツ許ス可キ故障ナルヤ否ヤ法律上ノ方式ニ適スルヤ否ヤ其期間ニ於テ故障ヲ申立テタルヤ否ヤノ三點ヲ調査シ若シ此一ヲ缺クトキハ故障ヲ不合法トシテ棄却スルノ判決ヲ爲ス可キモノトス

第二百五十七條ニ因リ申立ヲ却下ザレタル場合ニ於テ若シ方式ニ缺クル所アルトキハ之ヲ補正シテ再ヒ提出スルコトヲ得ヘシト雖トモ本條ニ因テ一旦申立ヲ棄却サレタルトキハ其原因ノ如何ニ拘ハラズ再ヒ之ヲ其裁判所ニ提出スルコトヲ得ス然レトモ之ニ對シテ控訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ尤モ此場合ニ於テハ棄却ノ適否ニ基ク控訴ナルヲ以テ控訴ノ判決ニ於テ原判決ヲ不當ト爲ストキハ控訴裁判所ハ之ヲ原裁判所ニ差戻シテ之ヲ審理ヲ爲サシムルモノトス(本法第四百二十二條第二號)

〔參照〕 獨 第三百六條 裁判所ハ職權ヲ以テ異議ノ申立ヲ當然許サレタルヤ及ヒ其申立ヲ法律上ノ手續及期限ニ依リ呈出シタルヤヲ審査スヘキモノトス此要件ノ一缺クルトキ其異議ハ之ヲ許サレサルモノトシテ棄却スヘシ

第二百六十條 故障ヲ適法トスルトキハ訴訟ハ闕席前ノ程度ニ復ス  
〔解義〕 前條ニ於テ故障ヲ適法トスルトキハ訴訟ハ闕席前ノ程度ニ復スルヲ以テ當事者ヲ

シテ新ニ一定ノ申立事實ノ陳述立證ニ付テノ辨論ヲ爲サシメ通常ノ規定ニ從ヒ判決ヲ爲ス可キモノトス

〔參照〕 獨 第三百七條 異議ヲ許サレタルトキ訴訟ハ懈怠前ニ存セシ狀況ニ復スルモノトス

第二百六十一條 新辯論ニ基キ爲ス可キ判決カ闕席判決ト符合スルトキハ闕席判決ヲ維持スルコトヲ言渡シ其符合セサル場合ニ於テハ新判決ニ於テ闕席判決ヲ廢棄ス

第二百六十二條 法律ニ從ヒ闕席判決ヲ爲シタルトキ闕席ニ因リテ生シタル費用ハ相手方ノ不當ナル異議ニ因リ生セサルモノニ限り故障ノ爲メ闕席判決ヲ變更スル場合ニ於テモ其闕席シタル原告若クハ被告ニ之ヲ負擔セシム

〔解義〕 第二百六十一條ハ新判決カ闕席判決ト符合シタルトキト又符合セサルトキトノ判決方法ヲ又第二百六十二條ハ闕席判決ニ因リテ生シタル費用ハ何人ニ於テ之ヲ負擔スヘキカヲ示定セリ

第二百六十一條 新辯論ニ基キテ爲シタル判決カ闕席判決ト其結果ヲ同フスルトキハ判決主文ニ於テ單ニ闕席判決ヲ維持スル旨ヲ言渡シ又闕席判決ト其結果ヲ異ニスルトキハ例

○ 闕席判決

○闕席判決

～ハ闕席判決ト曲直相反スルカ若クハ幾分ノ相違アルトキハ闕席判決ヲ廢棄シテ更ニ曲直ノ判決ヲ爲スモノトス

第二百六十二條 闕席判決ニ因リテ生スル費用ハ元ト闕席者ノ懈怠ニ基因スルモノナルヲ以テ第七十五條ノ原則ニ基キ闕席判決ト符合スルトキハ勿論假令闕席判決ヲ廢棄スルトキト雖トモ闕席シタル者ノ負擔ニ歸セサル可カラズ然レトモ闕席判決ノ法律ニ背戾スルトキ例ヘハ合式ニ呼出サレサルニ闕席判決ヲ爲シタルトキノ如キハ闕席者ニ懈怠ナキヲ以テ之ヲ負擔セシムルヲ得ス又闕席ニ因リテ生シタル費用ト雖トモ相手方ノ不當ナル異議ニ因テ生シタルハ闕席判決ノ申立人ヲシテ之ヲ負擔セシムルヲ得ス

〔參照〕 獨 第三百八條 新ナル審問ニ依リ言渡スヘキ裁決懈怠判決ニ載セタル裁決ト一致スル部分ニ限リ此裁決ヲ遵守スヘキコトヲ言渡スヘキモノトス此要件ナキ部分ニ限リ懈怠判決ハ新ナル判決ヲ以テ之ヲ廢棄ス

獨 第三百九條 懈怠判決ヲ法律上ノ方法ニ於テ言渡シタルトキ懈怠ニ依リ生シタル費用ト相手方ノ不當ナル抗辨ニ依リ生シタルニアラサル部分ニ限リ異議アルカ爲メ其判決ヲ變更スル裁決ヲ言渡ストキト雖懈怠シタル者ニ之ヲ負擔セシムヘキモノトス

第二百六十三條 故障ヲ申立テタル原告若クハ被告口頭辯論ノ期日又ハ辯論延期ノ期日ニ出頭セサルトキハ第二百五十二條及ヒ第二百五十四條ニ規定シタル場合ヲ除ク外出頭シタル相手方ノ申立ニ因リ故障ヲ棄

却スル新闕席判決ヲ言渡ス

新闕席判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得ス

〔解義〕 本條ハ第二回ノ闕席判決ヲ言渡ス可キ場合ヲ示定セリ

故障ヲ申立テタル原告若クハ被告ハ再ヒ口頭辯論ノ期日又ハ辯論延期ノ期日ニ出頭セサルトキハ第二百四十六條以下ノ規定ニ從ヒ故障ヲ棄却スル新闕席判決ヲ言渡スモノトス此第二回ノ闕席判決ニ對シテハ最早故障ヲ申立ツルコトヲ許サス只其懈怠ナカリシコトヲ理由トスルトキニ限リ控訴ヲ爲スコトヲ得ヘシ(本法第三百九十八條)又第二回ノ闕席判決ヲ爲スルハ第五百一條第三號ニ依リ職權ヲ以テ假執行ノ宣告ヲ附セサル可カラズ闕席判決ノ際出頭シタル相手方ニシテ新辯論期日ニ闕席セントキハ通常ノ規定ニ從フテ闕席判決ヲ爲シ又此判決ニ對シテハ故障ヲ申立ツルコトヲ得ヘシ

〔辨疑〕 或ハ云フ第二百六十三條ニハ故障ヲ申立テタル者辯論進行ノ期日ニ出頭セザリシトキノ規定ナシ然ラハ則續行期日ニ出頭セザルトキハ新闕席判決ヲ爲スコカラサルヤト曰ク第二百四十九條ニハ辯論進行ノ期日ニ出頭セザルトキハ闕席判決ヲ爲スコキノ規定アリ夫レ既ニ第一回ノ闕席判決スラ之ヲ爲シ得ヘキニ第二回ノ闕席判決ヲ爲シ得ラレザルノ道理ナシ故ニ第三百六十三條ニ此事ノ規定ナキハ蓋シ立法者ノ遺忘セシモノトスルノ外ナシト雖トモ此場合ハ况ンヤノ原則ニ因リ闕席判決ヲ爲シ得ラル可キモノト決セサルヲ得ス

○闕席判決

○ 闕席判決

〔參照〕 獨 第三百十條 異議ヲ呈出シタル口頭上審問ノ爲メ定メタル法廷又ハ審問ヲ延期シタル法廷ニ出廷セヌ又ハ本事件ニ付キ辯論セサル原告ノ一方ハ其異議ヲ棄却スル  
懈怠判決ニ對シ更ニ異議ヲ申立ルノ權ナキモノトス

第二百六十四條 故障ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テハ控訴ノ拋棄及ヒ其取下ニ付テノ規定ヲ準用ス

〔解義〕 本條ハ故障ノ拋棄及ヒ取下ノコトニ關シ示定セリ

故障ハ上訴ニ非ラスト雖トモ前判決ニ對シテ不服ヲ唱フル點ニ付テハ稍々控訴ト類似スルヲ以テ本條ハ故障ノ拋棄及ヒ取下ニ付テハ控訴ノ拋棄及ヒ取下ニ付テノ規定ヲ準用ストセリ故ニ故障取下ハ第三百九十九條ニ因リ辯論前ニ於テハ相手方ノ承諾ナク之ヲ爲スコトヲ得ヘク又一旦取下ケタルトキハ故障權ヲ喪失スルト雖トモ拋棄ニ付テハ控訴ノ章中ニ一ノ定ムル所ナキヲ以テ之ヲ準用スルニ由ナシ或ハ云ハン第四百八條ノ規定ニ因テ控訴ノ章ニ規定セサルモノハ地方裁判所ノ第一審ノ訴訟手續ヲ準用ス可キ定メアルヲ以テ第二百二十九條ニ復歸シテ之ヲ適用セハ可ナラント果シテ然ラニハ拋棄ニ付テハ依然地方裁判所ニ付テノ規定ヲ適用ス可キモノナルヲ以テ何ソノ控訴ノ拋棄ニ付テハ依テ準用スト云フヲ要セシヤ故ニ此點ニ付テハ究竟意味ナキ規定ト云フノ外ナカル可シ

〔參照〕 獨 第三百十一條 異議ノ拋棄及其取下ニ關シテハ亦控訴ノ拋棄及其取下ニ付テノ規定ヲ適用スルモノトス

第二百六十五條 本節ノ規定ハ反訴又ハ既ニ原因ノ確定シタル請求ノ數額ノ定テ目的物トスル訴訟手續ニ之ヲ準用ス

中間訴訟ノ辯論ノ爲メ期日ヲ定メタルトキハ其闕席訴訟手續及ヒ闕席判決ハ其中間訴訟ヲ完結スルニ止マリ本節ノ規定ヲ之ニ準用ス

〔解義〕 本條ハ反訴又ハ中間判決等ニモ亦本節ノ規定ヲ準用スヘキコトヲ示定セリ

反訴又ハ原因ノ確定シタル請求ノ數額ノ定テ目的物トスル訴訟手續若クハ中間訴訟ノ辯論期日ニ付テモ此節ニ定ムル闕席手續及ヒ闕席判決ヲ準用スルモノトス

反訴ニ付テ本節ノ規定ヲ準用スル場合ハ第百十八條ノ規定ニ從ヒ本訴ト反訴トノ辯論ヲ分離シタルトキナラシ即チ反訴ニ付テ定メタル辯論期日ニ其一方ノ闕席スルトキハ相手方ノ申立ニ因リテ闕席判決ヲ爲サ、ル可カラス而シテ反訴ヲ提起スル者ハ本案ニ付テハ被告ナレトモ反訴自體ニ就テ云フトキハ原告ノ位地ニ在ルヲ以テ若シ反訴ヲ提起セシ者闕席セシトキハ其相手方ノ申立ニ因リテ反訴棄却ノ判決ヲ爲サ、ル可カラス又原因ト數額ニ付キ爭ヒアルトキハ第二百二十八條ニ因リ先ツ其原因ニ付テノ判決ヲ爲シ其判決ニシテ原因アリト定マリタルトキ初メテ數額ニ付テノ辯論ヲ爲スコク而シテ其期日ニ一方ノ出頭セザルトキ闕席判決ヲ爲スハ固ヨリ其所ナリ又中間訴訟ニ付テ定メタル辯論期日ニ其一方ノ出頭セザルトキハ闕席判決ヲ以テ中間訴訟ヲ完結スルモノトス

〔參照〕 獨 第三百十二條 此節ノ規定ハ反訴ニ關シ又ハ理由ノ既ニ確定シタル請求額ノ

○ 闕席判決

○計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續 三百四十六

定メニ關スル裁判手續ニモ亦之ヲ適用スルモノトス

裁判期日ヲ單ニ中間訴訟ニ付テノ審問ノ爲メ定メタルトキ其懈怠裁判手續及懈怠判決ハ此中間訴訟ヲ完結スルニ止マルモノトス此節ノ規定ハ本項ニモ亦之ヲ適用ス

第四節 計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續

第二百六十六條 計算ノ當否、財産ノ分別又ハ此ニ類スル關係ヲ目的トスル訴訟ニ於テ計算書又ハ財産目録ニ對シ許多ノ争アル請求ノ生シ又ハ許多ノ争アル異議ノ生シタルトキハ受訴裁判所ハ受命判事ノ面前ニ於ケル準備手續ヲ命スルコトヲ得

第二百六十七條 準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡スニ際シ裁判長ハ受命判事ヲ指定シ決定施行ノ期日ヲ定ム可シ若シ裁判長此期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム又受命判事其委任ヲ施行スルニ差支アルトキハ裁判長更ニ他ノ判事ヲ任ス

【解義】〔的例〕第二百六十六條ハ或ル煩雜ナル訴訟事件ニ限リ受命判事ニ準備手續ヲ命シ得ヘキコトヲ第二百六十七條ハ準備手續施行ノ期日ヲ示定シ及ヒ受命判事ヲ命ス可キ

コトヲ示定セリ

計算ノ正否ヲ目的トスル訴訟、財産ノ分別ヲ目的トスル訴訟及ヒ此ニ類スル煩雜事件ヲ目的トスル訴訟ニ於テ計算書又ハ財産目録ニ對シ許多ノ争アル請求ノ生シ又ハ許多ノ争アル異議ノ生スルトキハ公廷ニ於テ普通規則ニ從ヒ審理スルモ徒ニ紛雜ヲ來シ訴訟ノ完結ヲ遲延スルヲ以テ此等ノ場合ニ於テハ合議裁判所ハ陪席判事ニ之カ準備手續ヲ命スルコトヲ得ヘシ準備手續トハ恰モ刑事ノ豫審ト均シク口頭辨論ノ際紛雜混亂セザラン爲メニ豫メ其下調ヲ爲スヲ云フ

計算ノ當否トハ例ヘハ社員若クハ管理人ノ爲シタル計算ニ於テ許多ノ紛争ヲ生スルカ如キヲ云ヒ財産ノ分別トハ相續人若クハ共有者ノ間ニ於ケル財産分別ニ關スル訴訟ノ如キヲ云ヒ此ニ類スル訴訟トハ例ヘハ許多ノ物品引渡ニ關スル訴訟ノ如キヲ云フ此等ノ訴訟ト雖トモ其請求又ハ異議ノ單一ナルトキハ故テ準備手續ヲ命スルノ必要アラサルヲ以テ必ス許多ノ請求ヲ生シ又ハ許多ノ争アル異議ヲ生スルトキニ限リ準備手續ヲ命スルモノトス

許多ノ争アル請求ノ生シ許多ノ争アル異議ノ生シトアリ其請求ト異議トハ之ヲ區別セザル可カラス數多ノ權利ヲ得ント請求スルアリ又處分ノ當否ヲ争フモノアリ前者ハ請求ニシテ後者ハ異議ノ訴トス本法ニ就テ一例ヲ示サハ第六百三十五條ノ訴ハ即チ異議ノ訴ナリ

○計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續 三百四十七

○計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續 三百四十八

第三百六十七條 裁判所ハ一應口頭辨論ヲ開キ普通ノ審理ヲ爲シタル上果シテ前條ニ掲クル事情アルトキ初メテ口頭辨論ヲ延期シテ準備手續ヲ命スル決定ヲ言渡スモノトス然レトモ當事者ニ於テ妨訴抗辯ヲ爲シタルトキハ必ス該抗辯ヲ完結シタル後ニ非ラサレハ此手續ヲ命スルコトヲ得ス(本法第二百八條)

又準備手續ノ決定ヲ言渡ス際之ト同時ニ裁判長ハ受命判事ヲ指定シテ其施行期日ヲ定メサル可カラス若シ裁判長ニ於テ豫メ之ヲ定ムル能ハス又ハ之ヲ定ムルヲ以テ便宜ト認メサルトキハ受命判事其期日ヲ定メ又受命判事病氣等ノ故ヲ以テ之ヲ施行スル能ハサルトキハ裁判長ハ更ニ他ノ判事ニ之ヲ命スルモノトス

〔參照〕 獨 第三百十三條 計算ノ正否、財産ノ分別又ハ類似ノ關係ニ付テノ訴訟ニ於テ一計算書又ハ一財産目錄ニ對シ數多ノ爭ヒトナリタル請求又ハ注告ノ生スルトキ訴訟裁判所ハ受命裁判官ニ於テナス準備裁判手續ヲ命スルコトヲ得

獨 第三百十四條 準備裁判手續ヲ命スル決議ヲ言渡スノ際裁判長ハ受命裁判官ヲ指名シ及決議ヲ完結スル爲メノ裁判期日ヲ定ムヘキモノトス此期日ノ定メヲナサハルトキハ受命裁判官之ヲナシ受命裁判官其命ヲ執行スルニ差支アルトキハ裁判長他ノ職員ヲ指名ス

第二百六十八條 準備手續ニ於テハ調書ヲ以テ左ノ諸件ヲ明確ニス可シ

第一 如何ナル請求ヲ爲スヤ及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ主張ス

ルヤ

第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃、防禦ノ方法ヲ爭フヤ又ハ之ヲ爭ハサルヤ

第二 爭ト爲リタル請求及ヒ爭ト爲リタル攻撃防禦ノ方法ニ付テハ其事實上ノ關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方法、主張シタル證據抗辯、證據方法並ニ證據抗辯ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ提出シタル申立

此手續ハ受訴裁判所ニ於テ訴訟又ハ中間訴訟カ判決又ハ證據決定ヲ爲スニ熟スルマテ之ヲ續行ス可シ

〔解義〕 本條ハ準備手續ニ於テ作ル可キ調書ノ作製方ヲ示定セリ

第三百三十條ニ因レハ調書ニハ其要領ノミヲ記載スヘキモノト又之ヲ明確ニスヘキモノトノ二種アリ其要領ノミヲ記載スヘキトキハ文字ノ示ス如ク陳述ノ要領ノミヲ記載シテ足レリト雖トモ之ヲ明確ニスヘキトキハ管ニ其要領ヲ記載スルヲ以テ足レリトセス之ニ關係スル陳述ハ總テ記載セサル可カラス本條ノ如キハ即チ第三百三十條第二項ノ第二號ニ該當スルモノナリ

準備手續ハ口頭辨論ノ下調ニシテ其調書ハ受訴裁判所ニ報告ス可キモノナルヲ以テ最モ

○計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續 三百五十

必要ナリ受命判事ハ必ス書記ノ立會ヲ得テ左ニ掲クル諸件ヲ明確ニセサル可カラス

第一 如何ナル請求ヲ爲スヤ及ヒ如何ナル攻撃防禦ノ方法ヲ主張スルヤ

當事者ノ請求スル所ヲ一々明確ニシ又其請求ニ付テハ如何ナル攻撃ヲ爲スカ其攻撃ニ對シテ如何ナル防禦ヲ爲スヤヲ記載セサル可カラス

第二 如何ナル請求及ヒ如何ナル攻撃防禦ノ方法ヲ争フヤ又ハ之ヲ争ハサルヤ

第一ニ掲クル請求又ハ攻撃防禦ノ中ニ就キ相手方力争フモノト争ハサルモノトヲ明確ニセサル可カラス

第三 争ト爲リタル請求及ヒ争ト爲リタル攻撃、防禦ノ方法ニ付テハ其事實上ノ關係及ヒ當事者ノ表示シタル證據方法主張シタル證據抗辨、證據方法並ニ證據抗辨ニ關シテ爲シタル陳述及ヒ提出シタル申立

第二ニ掲クル中争ト爲リタル請求争ト爲リタル攻撃防禦ノ方法ニ付テハ左ニ掲クル諸件ヲ明確ニセサル可カラス

一 事實上ノ關係

争ト爲リタル請求及ヒ攻撃防禦ニ付テノ事實上ノ情況ヲ記載セサル可カラス

二 當事者ノ主張シタル證據方法

當事者ハ如何ナル證據手段ヲ用フルヤヲ記載セサル可カラス證據方法ハ證據其物ヲ云フニ非ラサルナリ

三 主張シタル證據抗辨

相手方ノ主張スル證據方法ニ對シテ抗辨アルトキハ之ヲ記載セサル可カラス例ヘハ相手方ハ證據方法トシテ誰某ヲ證人ト爲サント申立ツレトモ其者ハ相手方ト何々ノ關係アルヲ以テ決シテ證人ノ資格アラスト抗辨スルノ類之ナリ

四 證據方法並ニ證據抗辨ニ關シテ爲シタル陳述

二及ヒ三ニ掲クル事ニ關シテ爲シタル陳述ヲ記載セサル可カラス

五 提出シタル申立

當事者力互ニ訴訟ノ結果トシテ望ム所ノ申立ヲ記載セサル可カラス

以上準備ノ手續ハ訴訟又ハ中間訴訟カ判決又ハ證據決定ヲ爲シ得ラル、マテハ之ヲ續行ス可キモノトス即チ受命判事ハ受訴裁判所カ最早訴訟ノ判決ヲ爲シ得ラル可キカ又ハ判決ヲ爲シ得ラレサルモ證據決定ヲ爲シテ證據調ニ着手シ得ラル可キカヲ熟考シ若シ判決又ハ證據決定ヲ爲スニ不充分ナリト考フルトキハ之ヲ完全スルマテ其手續ヲ續行セサル可カラス

〔參照〕 獨 第三百十五條 準備裁判手續ニ於テハ左ノ件々ヲ筆記シテ確定スヘキモノトス

第一 如何ナル請求ヲ申立ルヤ及如何ナル攻撃方及辨護方ヲ申立ルヤ

第二 如何ナル請求及如何ナル攻撃方及辨護方ノ争ヒトナルモノナルヤ又ハ争ヒトナラ

○計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續 三百五十一

サルモノナルヤ

第三 争トナリタル請求及争トナリタル攻撃方及辨護方ニ付テハ其事件上關係及原被告ノ指定シタル證據物申立テタル證據物辨駁竝ニ證據物及證據辨駁ニ付テナシタル陳述及呈出シタル申立

其裁判手續ハ訴訟區裁判所ニ於テ裁判關係トナリシトキ適用スヘキ規定ニ從テ之ヲナスモノトス其手續ハ訴訟又ハ中間訴訟ノ判決又ハ證據決議ヲ言渡スマテニ熟シタリト認ルマテ之ヲ繼續ス可シ

第二百六十九條 原告若クハ被告カ期日ニ於テ受命判事ノ面前ニ出頭セ

サルトキハ受命判事ハ前條ノ規定ニ依リ調書ヲ以テ出頭シタル原告若クハ被告ノ提供ヲ明確ニシ且新期日ヲ定メ出頭セサル原告若クハ被告ニハ調書ノ謄本ヲ付與シテ新期日ニ之ヲ呼出ス可シ  
原告若クハ被告カ新期日ニモ亦出頭セサルトキハ送達セシ調書ニ掲ケタル相手方ノ事實上ノ主張ヲ自白シタリト看做シ其主張ニ付テノ準備手續ハ完結シタルモノトス

第二百七十條 受訴裁判所ハ準備手續ノ終結後ニ口頭辯論ノ期日ヲ定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

〔解説〕 第二百六十九條ハ準備手續ノ施行期日ニ當事者ノ一方出頭セサルトキニ付テノ完結方法ヲ第二百七十條ハ準備手續ヲ完結シタルトキ口頭辯論ヲ始ムル方法ヲ示定セリ

第二百六十九條 準備手續ノ施行期日ニ當事者ノ一方出頭セサルトキハ受命判事ハ出頭シタル一方ノミニ對シテ前條ノ取調ヲ爲シ然ル後其調書ノ謄本ヲ作ラシメ之ヲ相手方ニ送達シテ新期日ニ呼出スモノトス而シテ新期日ニモ出頭セサルトキハ此ニ始テ調書ニ掲グル相手方ノ事實上ノ主張ヲ自白シタリト看做シ其手續ヲ完結スルモノトス  
右手續ヲ終リタルトキハ受命判事ハ調書ヲ受訴裁判所ニ交付スルモノトス

新期日ニハ其相手方ノミナラス出頭シタル者ニモ新期日ヲ定メタル旨ヲ告知シテ之カ出頭ヲ命セサル可カラズ而シテ新期日ニ至リ雙方出頭シタルトキハ先ツ前日出頭セザリシ者ヲ取調ヘ其申立ニ對シテ前日出頭セシ者ノ抗辨アルトキハ前條ノ規定ニ從フテ之カ調書ヲ作ラサル可カラズ猶ホ本條ニハ別ニ規定スル所ナシト雖トモ新期日ニ至リ其相手方ノミ出頭シ反テ前日出頭セシ者闕席セシ場合ニ於テ其相手方ノ申立ツル所チ一應前日ノ出頭者ニ知ラシメサレハ訴訟カ判決ヲ爲シ證據決定ヲ爲スニ熟セサルモノト思考スルトキハ本條ノ法定ニ基キ調書ノ謄本ヲ送達シテ新期日ニ呼出サ、ル可カラズ若シ然ラサルトキハ口頭辯論ノ際猶ホ煩雜ヲ免レンスニテ折角爲シタル準備モ其効ヲ奏セサルコトアルヘシ

第二百七十條 受訴裁判所ハ受命判事ヨリ手續終結ノ報告ヲ受ケタルトキハ辨論再開ノ



期日ヲ定メ職權ヲ以テ當事者ニ通知スルモノトス

〔參照〕 獨 第三百十六條

原告ノ一方受命裁判官ニ於テナス裁判期日ニ出廷セサルトキ其裁判官ハ出廷シタル一方ノ申立ヲ前條ニ從ヒ筆記シテ確定シ及新ナル裁判期日ヲ定ムヘキモノトス出廷セサル一方ハ筆記ノ謄本ヲ交付シテ新ナル裁判期日ニ之ヲ喚出スヘシ

其一方新ナル裁判期日ニモ亦出廷セサルトキハ送達シタル筆記ニ載セタル對手ノ事實上主唱ハ之ヲ自認セラレタルモノト看做シ其主唱ニ付テノ準備裁判手續ハ復之ヲ繼續セサルモノトス

獨 第三百十七條 準備裁判手續ノ終結後訴訟裁判所ノ口頭上審問ノ爲メニスル裁判期日ハ職權ヲ以テ之ヲ定メ原告ニ通知スヘキモノトス

第二百七十一條 當事者ハ口頭辯論ニ於テ準備手續ノ結果ヲ調書ニ基キ演述ス可シ

原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ準備手續ニ於テ争ハサル請求ハ一分判決ヲ以テ之ヲ完結ス其他ニ付テハ申立ニ因リテ闕席判決ヲ爲ス可シ

第二百七十二條 受命判事ノ調書ヲ以テ明確ニス可キ事實又ハ證書ニ付

キ陳述ヲ爲サヌ又ハ之ヲ拒ミタルトキハ口頭辯論ニ於テ之ヲ追完スルコトヲ得ス

請求、攻撃若クハ防禦ノ方法證據方法、及ヒ證據抗辯ニシテ受命判事ノ調書ヲ以テ之ヲ明確ニセサルモノニ付テハ後日ニ至リ始メテ生シ又ハ後日ニ至リ始メテ原告若クハ被告ノ知りタルコトヲ疏明スルトキニ限リ口頭辯論ニ於テ之ヲ主張スルコトヲ得

〔解義〕 第二百七十一條ハ口頭辯論ノ期日ニ於テ爲ス可キ手續ヲ第二百七十二條ハ口頭辯論ニ付テノ結果ヲ示定セリ

第二百七十一條 前條ニ因リテ指定シタル口頭辯論ノ期日ニハ受命判事ノ面前ニ於テ確定シタル準備手續ノ結果ニ基キ演述セサル可カラヌ故ニ準備手續ニ於テ作リタル調書ノ趣旨ヲ記憶スルトキハ之ト同一ナル演述ヲ爲シ若シ之ヲ記憶セサルトキハ調書ノ謄本ヲ求メ之ニ因リテ演述セサル可カラヌ若シ口頭辯論ノ期日ニ當事者ノ一方出頭セサルトキハ左ノ如ク判決セサル可カラヌ

- 一 準備手續ニ於テ争ハサリシ請求アルトキハ之ニ對シテ一分ノ終局判決ヲ爲ス
- 二 其他ノ請求即チ準備手續ニ於テ争ヒシ請求ニ付テハ出頭シタル相手方ノ申立ニ因リテ闕席判決ヲ爲ス

○計算事件、財産分別及ヒ此ニ類スル訴訟ノ準備手續 三百五十六

右第一ト第二トハ別箇ニ判決セストモ同一ノ判決ニ於テ言渡シテ可ナリ而シテ一分判決ニ對シテハ上訴ヲ爲シ闕席判決ニ對シテハ故障ヲ爲シ得ヘキヲ以テ同一ノ判決書ニ因リテ言渡ストキハ判然ト之ヲ書キ分ケサル可カラズ

第二百七十二條 第二百六十八條第三號ニ於ケル事實及ヒ證書ニ付キ陳述ヲ爲サヌ又ハ之ヲ拒ミタルトキハ口頭辨論ノトキ之ヲ追完スルコトヲ得ヌ如此制限ヲ附シタル所以ノモノハ準備手續ノ際此等ノ陳述ヲ爲スノ餘裕アルニ之ヲ爲サ、リシハ自己ノ怠慢ト云ハサル可カラズ若シ此等ノ陳述ヲ許ストキハ折角ノ準備手續モ其效ナキニ至レハナリ

第二項ハ前項ノ例外ニシテ自ラ權利伸張ヲ用ササルニ非ラサルトキハ請求攻撃若クハ防禦ノ方法證據方法及ヒ證據抗辨ヲ追完主張スルコトヲ許セリ即チ左ニ掲クル條件ヲ具備スルトキニ限り之ヲ許スモノトス

一 調書ニ於テ明確ニセサル事柄ナルトキ

二 準備手續完結後始メテ生シ若クハ知りタルコトヲ疏明シタルトキ

然レトモ訴訟ノ第二審ニ繫屬スルトキハ總テノ陳述ヲ追述シ且攻撃方法及ヒ其他ノ權利伸暢ノ方法ヲ追補スルコトヲ得ヘシ(本法第四百十五條第四百十七條)

〔參照〕 獨 第三百十八條 口頭上審問ノ際原被告ハ筆記ニ依テ準備裁判手續ノ結果ヲ供述スヘキモノトス

原被告ノ一方出廷セサルトキ準備裁判手續ニ於テ爭ヒトナラサルコトノ判然シタル請求

ハ一部判決ヲ以テ之ヲ完結スヘキモノトス其他ノ場合ニ於テハ申立ニ依リ懈怠判決ヲ言渡スヘシ

獨 第三百十九條 受命裁判官ノ前ニ於テ事實證書又ハ宣誓要求ニ付キ陳述ヲナス又ハ陳述ヲ拒ミタルトキハ口頭上審問ニ於テ復之ヲ補フコトヲ得ヌ受命裁判官ノ前ニ出廷シタル一方ノ陳述ヲナサ、ルモノト看做スヘキハ裁判官陳述ヲナスヘキコトヲ督促シタル部分ニ限ルモノトス

受命裁判官ノ筆記ヲ以テ確定セサリシ請求攻撃方辨護方證據物及證據辨駁ハ後ニ至リ始テ生シ又ハ一方ノ知了シタルコトヲ證明スルトキニアラサレハ口頭上審問ニ於テ之ヲ申立ルコトヲ得ヌ

第五節 證據調ノ總則

第二百七十三條 證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ以テ通例トス

證據調ハ此法律ニ定メタル場合ニ限り受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

此證據調ヲ命スル決定ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ得ヌ

〔解義〕 本條ハ證據調ハ受訴裁判所ニ於テ爲ス可キコト及ヒ其變例トシテ受命判事受託判事ニ之ヲ爲サシムルコトヲ示定セリ

○證據調ノ總則

本節ハ次節以下第十一節ニ定ムル證據調ニ關スル總則ヲ掲ケタルモノニツ要スルニ次節以下第十一節ニ定ムル證據調ノ何レニモ適用シ得ヘキ一般ノ手續ヲ規定セルモノナリ  
證據調ノ何タルコト及ヒ證據調ト證據方法トノ區別ハ前既ニ解説セシト雖トモ猶ホ簡單ニ其要ヲ舉クレハ當事者カ主張ノ事實ニ對シ何々ニ因リテ立證セントノ申立ハ即テ證據方法ノ申立ニシテ其申立テタル證據方法ヲ裁判所ニ於テ取調フル之ヲ證據調ト云フ而シテ舉證ノ責任及ヒ證據其物ニ付テノ効力如何ハ民法及ヒ商法ニ規定スル所ナルヲ以テ各其法ニ於テ講究セサル可カラズ本法ニ於テハ如何シテ證據ヲ提出ス可キヤ如何シテ證據上ノ辨論及ヒ取調ヲ爲ス可キヤヲ知ラシムルヲ以テ目的ト爲スカ故ニ特リ其點ニ付キ討究セハ可ナリトス

抑裁判所ハ本法中單ニ疏明ヲ許セル場合ノ外ハ當事者ノ主張セル事實ノ確然證明セラレタルトキ即チ其事實ノ眞誠ナルコトニ付キ疑團ナキトキニ限リ其事實ヲ採用セサル可カラズ又其事實ノ眞否ハ民法等ニ特定セル場合ノ外ハ裁判所ノ自由ナル心證ニ基ク所ノ判斷ニ因テ決定ス可ク(本法第二百十七條)隨テ裁判長ハ主張シタル事實ノ不充分ナル證明ヲ補充シ其他證據方法ヲ申立テシムルノ權アルヲ以テ(本法第一百十二條)裁判所ノ機關タル判事ハ最モ巧ミニ最モ周密ニ證據ヲ取調フルコトニ注意セサル可カラズ

證據調ハ受訴裁判所ニ於テ之ヲ爲スヲ以テ原則トシ受命判事若クハ受託判事ニ因テ之ヲ爲スヲ變例トス受訴裁判所トハ判事數名ヲ以テ組立タル合議裁判ト云ヘルノ意ニシテ決

シテ裁判所ノ訟廷ニ於テ爲ストノ意ヲ示シタルニ非ラス語ヲ換ヘテ之ヲ云ヘハ受命判事又ハ受託判事ニ因テ取調フルコトノ反對ヲ示シタルニ過キス故ニ訟廷外ニ於テ取調フルトキモ數名ノ判事立會フトキハ即チ受訴裁判所ニ於テ之ヲ取調ヲ爲スモノナリ  
受訴裁判所ノ部員一名ニ之ヲ命シ又區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトハ一箇ノ例外ニ過キサルヲ以テ必ズヤ本法中ニ特定セル場合ニ制限セサル可カラズ而シテ本法ニ特定セル場合トハ第二百九十六條第三百十八條第三百三十一條第三百四十八條第三百五十八條之ナリ

而シテ受命判事若クハ受託判事ニ因テ證據調ヲ爲スコトハ次條ニ定ムルカ如ク裁判所ノ決定ニ因テ之ヲ命スルモノナリ然ルニ受命判事受託判事ヲシテ證據調ヲ爲サシムルコトハ法律ノ特定セルトキニ制限スルカ故ニ之ニ對シ不服ヲ申立ツルノ謂ハレナシ又之ヲ申立テシムルノ道理ナキヲ以テ本條第三項ニ於テ斷然之ヲ禁止シテ旁々訴訟ノ滯滞ヲ豫防セリ

〔參照〕 獨 第三百二十條 探證ハ訴訟裁判所ニ於テ之ヲナスモノトス探證ハ此法ニ定メタル場合ニアラサレハ訴訟裁判所ノ職員又ハ他ノ裁判所ニ之ヲ委任スヘカラス  
其探證ノ方法ヲ命スル決議ニ對シテハ不服ヲ申立ルコトヲ得ス

第二百七十四條 當事者ノ申立テタル數多ノ證據中其調フ可キ限度ハ裁判所之ヲ定ム  
當事者ノ演述ニ引續キ直チニ證據調ヲ爲サスシテ受訴裁判所ニ於テ新

○證據調ノ總則

期日ニ之ヲ爲シ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之ヲ爲ス可キトキハ證據決定ニ因リ之ヲ命ス可シ

第二百七十五條 證據調ニ付キ不定時間ノ障碍アルトキハ申立ニ因リ相當ノ期間ヲ定ム可シ此期間ノ滿了後ト雖モ訴訟手續ヲ遲滯セシムサル限リハ其證據方法ヲ用ヰルコトヲ得

〔解義〕 第二百七十四條ハ數多ノ證據アルトキハ其調フ可キ限度ヲ制限スルコト及ヒ證據決定ニ因テ證據調ヲ爲スノ場合ヲ又第二百七十五條ハ不定時間ノ障碍アル證據調ニ付テハ相當ノ期間ヲ定ム可キコトヲ示定セリ

第二百七十四條 従前ニ於テハ當事者ノ申立テタル證據方法ハ悉ク之カ取調ヲ爲セシノミナラス假令申立テサル證據ト雖トモ判事ニ於テ必要ト認ムルトキハ職權ヲ以テ之カ取調ヲ爲シタリ然ルニ本法ハ不干涉主義ヲ採用セシテ以テ或ル場合ヲ除クノ外（本法第百十七條第百二十九條第百六十條）渾テ當事者ノ申立アルトキニ限り之カ取調ヲ爲スコト、セリ而シテ訴訟ニ必要アラサルコト一々之カ取調ヲ爲スハ徒ラニ訴訟ヲ遲滯シ冗費ヲ嵩ムノミナルヲ以テ當事者カ數多ノ證據方法ヲ申立テタルトキハ本法ハ反テ之カ干涉ヲ爲シ其調フ可キ限度ヲ裁判所ノ權内ニ因テ定ムルコト、セリ故ニ例ヘハ當事者ヨリ五名ノ證人調ヲ申立ツルトキ裁判所ニ於テ二名ヲ必要トシ餘ハ必要ナラズト認ムルトキ

ハ其二名タケニ付テ取調ヲ爲スコトヲ得ヘシ如此制限スルハ甚ク申立人ノ利益ヲ減殺スルカ如キモ第百八十五條ニ於テ證據調ノ補充ヲ決定シ得ヘキ規定アルヲ以テ決シテ此等ノ憂ナカル可シ然レトモ當事者カ口頭辨論ノ期日ニ其申立テタル證據方法ヲ悉ク提出シ得ヘキトキ例ヘハ證書ヲ提出スルカ或ハ證人ヲ同行セシトキ猶ホ之カ制限ヲ爲スハ却テ干涉ニ失スルノミナラス之ヲ制限スルノ必要アラサルヲ以テ此場合ニ於テハ悉皆ノ證據ヲ取調ヘサル可カラス

若シ當事者ノ演述ニ引續キ直ニ證據調ヲ爲ス能ハサルトキ即チ新期日ヲ定メテ之ヲ爲サル可カラサルカ又ハ受命判事若クハ受託判事ノ面前ニ於テ之ヲ爲サル可カラサルトキハ受託裁判所ハ其調フ可キ證據ノ限度ヲ定メテ之カ決定ヲ與ンルモノトス

第二百七十五條 證據調ニ付テハ不定時間ニ障碍アルコトアリ例ヘハ證人ノ遠國ニ旅行シテ目下ニ取調フル能ハサルカ如ク又書證ノ他手ニ轉帳シテ俄ニ提出スルヲ得サルカ如シ此等ノ場合ニ於テ相手方ノ申立アルトキハ裁判所ハ相當ノ期間ヲ定メ其期間内ニ之カ提出ヲ命セサル可カラズ然レドモ本條ノ精神タル訴訟手續ノ延滯ヲ恐ル、コ在ルヲ以テ其シヤ一定ノ期間ヲ經過スル後ト雖トモ之カ延滯ヲ來タザサル限リハ其證據方法ヲ提出スルコトヲ得ヘシ

〔參照〕 獨 第三百二十一條 證據ヲ採用スルニ付キ差支時間不定ナルトキハ申立ニ依リ期限ヲ定ムル可キモトス其期限空シク經過シタル後ハ裁判手續ヲ遲延セサルトキニ限り

○證據調ノ總則

其證據物ヲ使用スルコトヲ得  
獨 第三百二十三條 採證ニ付キ別段ノ裁判手續ヲ要スルトキ其手續ハ證據決議ヲ以テ  
之ヲ命スヘキモノトス

第二百七十六條 證據決定ニハ左ノ諸件ヲ掲ク可シ

第一 證ス可キ係爭事實ノ表示

第二 證據方法ヲ表示殊ニ證人又ハ鑑定人ヲ訊問ス可キキハ其表示

第三 證據方法ヲ申出テタル原告若クハ被告ノ表示

〔解義〕 本條ハ證據決定ニ掲ク可キ事項ヲ示定セリ

第二百七十四條第二項ニ因リテ證據決定ヲ爲ストキハ其決定中ニ本條第一乃至第三ノ事  
項ヲ掲ゲサル可カラズ而シテ此決定ハ書面ニ作リテ之ヲ言渡スコトヲ要セス當事者ヨリ  
證據ヲ申立テタルトキ例ヘハ證人ノ申出書證又ハ檢證等ノ申立ヲ爲シタルトキハ裁判所  
ハ直ニ當事者ニ決定ノ旨ヲ示シ之ト同時ニ法廷調書ニ錄取セシムルヲ以テ足レリトス  
〔本法第二百三十五條第五號〕猶ホ此決定ヲ爲ストキハ證據調ノ新期日ヲ定メテ當事者ニ出頭  
ヲ命シ置ク可キモノトス〔本法第六十一條末段〕

〔參照〕 獨 第三百二十四條 證據決議ニハ左ノ件々ヲ記載スルモノトス

第一 證據ヲ舉クヘキ爭ヒトナリタル事實

第二 證據物但尋問セラルヘキ證人及鑑定人アルトキハ其氏名

第三 事實上主唱ノ證明又ハ駁斥ノ爲メ證據物ヲ申立テタル原告ノ一方

第四 要求セラレ又ハ反對ニ要求セラレタル宣誓ヲサシムルコトヲ命スルトキハ其誓  
文

第二百七十七條 證據決定ノ變更ハ其決定ノ施行完結前ニ在リテ新ナル  
辯論ニ基クトキニ限り之ヲ申立ツルコトヲ得

證據決定ノ施行ハ職權ヲ以テ之ヲ爲ス

〔解義〕 本條ハ一旦證據決定ヲ爲シタル上ハ容易ニ之ヲ變更ス可カラサルコト及ヒ決定ノ  
施行ハ裁判所ノ職權ヲ以テ爲ス可キコトヲ示定セリ

前條ニ因リテ證據決定ヲ與ヘタルトキハ決定ノ施行完結前ニ在リテ新ナル他ノ爭點ニ關  
シテ辯論ヲ爲シタルトキノ外之カ變更ヲ許サ、ルナリ證據決定ノ變更トハ一旦決定シタ  
ル證人鑑定人ニ代ヘテ他ノ證人鑑定人ノ取調ヲ申立ツルカ如キヲ謂フ

施行完結前ノ文字ニ拘泥スルトキハ既ニ證據調ニ着手スルトモ未タ之ヲ終ラサル以前ナ  
レハ新辯論ニ基キテ變更スルコトヲ得ルカ如キモ決シテ然ラス已ニ取調ニ着手スルトキ  
ハ其中途ニシテ之ヲ變更セントスルモ最早施行完結ト同視シテ之ヲ許サ、ルノ精神ナル  
ハ明カナリ又新辯論ニ基キテ之ヲ變更スルハ大抵施行着手ノ前ニ在ル可キヲ以テ實際如  
此問題ヲ生スルコト勿ル可シ

○證據調ノ總則

○證據調ノ總則

證據決定ニ元來當事者ノ申出ニ因リテ爲スコシト雖トモ之ヲ施行スルニ至ラハ因ヨリ裁判所ノ職權ニ屬スルモノトス即チ證人ヲ訊問シ檢證ヲ爲ス等ノ手續ニ至リテハ當事者ノ容喙ス可カラサルモノトス

〔參照〕 獨 第三百二十五條 證據決議ノ完結前ニハ原被告ノ孰レニテモ前審問ニ依テ其決議ノ變更ヲ申立ルコトヲ得ス

第二百七十八條 受訴裁判所ノ部員カ證據調ヲ爲スコキトキハ裁判長證據決定言渡ノ際受命判事ヲ指名シ且證據調ノ期日ヲ定ム若シ其期日ヲ定メサルトキハ受命判事之ヲ定ム

受命判事其命ヲ施行スルニ差支アルキハ裁判長更ニ他ノ部員ヲ命ス

第二百七十九條 他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲スコキトキハ裁判長ハ其囑託書ヲ發スコシ

證據調ニ關スル書類ハ原本ヲ以テ受託判事ヨリ受訴裁判所書記ニ之ヲ送致シ其書記ハ之ヲ受領シタルユトチ當事者ニ通知スコシ

第二百八十條 受命判事又ハ受託判事カ證據調ノ期日ヲ定メタルトキハ其期日及ヒ場所ヲ當事者ニ通知スコシ

第二百八十一條 外國ニ於テ爲スコキ證據調ハ外國ノ管轄官廳又ハ其國駐在ノ帝國ノ公使若クハ領事ニ囑託シテ之ヲ爲ス其囑託ニ付テハ第五百五十二條及ヒ第五百五十五條ノ規定ヲ準用ス

第二百八十二條 受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲スコキコトノ至當ナル原因ノ爾後ニ生シタルトキハ其裁判所ニ證據調ヲ囑託スルコトヲ得此囑託ヲ爲シタルトキハ當事者ニ之ヲ通知スコシ

第二百八十三條 受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ノ際ニ爭ヲ生シ其爭ノ完結スルニ非サレハ證據調ヲ續行スルコトヲ得且其判事之ヲ裁判スル權ナキトキハ其完結ハ受訴裁判所之ヲ爲ス

〔解義〕 第二百七十八條乃至第二百八十三條ハ受命判事若クハ受託判事ニ依リテ證據調ヲ爲サシムルコトニ付テノ規定ナリ

第二百七十八條 第二百七十三條第二項ニ因テ受訴裁判所ノ部員カ證據調ヲ爲スコキトキハ裁判長ハ第二百七十四條及ヒ第二百七十六條ニ因リテ證據決定ヲ言渡スノ際陪席判事ノ中誰某ヲ以テ受命判事ト爲シ何日ニ證據調ヲ爲サシムル旨ヲ指定セサル可カラズ若シ裁判長ニ於テ期日ヲ定ムル能ハサルトキ又ハ之ヲ定ムルヲ以テ反テ不便ナリト認ムルトキハ當事者ヘハ追テ受命判事ヨリ期日ノ通知アル可キ旨ヲ達シ置キ受命判事ニ之ヲ任

○證據調ノ總則

○證據調ノ總則

ス可キモノトス

受命判事病氣其他ノ事故ニ因リ其命ヲ施行スルニ差支ユルトキハ裁判長ハ更ニ他ノ部員ニ其取調ヲ命スルモノトス此場合ニ於テハ他ノ部員ニ代ヘタル旨ヲ當事者ニ知ラシメストモ取調ノ期日ニ於テ其命ヲ受ケタル部員ヨリ其旨ヲ告知シ取調ニ着手セハ可ナリ何トナレハ同シク判事ナルニ於テハ何人ノ取調ヲ受クルトモ當事者ニ異議アルノ謂ハレナクソハナリ

第二百七十九條 第二百七十三條第二項ニ因リテ區裁判所ニ證據調ヲ囑託スルトキハ裁判長ヨリ其囑託書ヲ發送スルモノトス

囑託ヲ受ケタル區裁判所ニ於テ證據調ヲ終リタルトキハ受託判事ヨリ證據調ニ關スル書類ノ原本ヲ受託裁判所書記ニ送致シ受託裁判所書記ニ於テ之ヲ受領セシトキハ其旨ヲ當事者ニ通知スルモノトス

第二百八十條 受命判事又ハ受託判事ヨリ其期日及ヒ場所ヲ當事者ニ通知スルハ當事者ヲシテ之ニ立會ハシメンカ爲メナリ然レトモ之ニ立會フト否トハ當事者ノ隨意ニシテ又仮令立會ハストモ其取調ヲ止ムルモノニ非ラサルナリ(本法第二百八十四條)

第二百八十一條 本條ハ一讀明了ニシテ別ニ解釋ヲ要セス

第二百八十二條 受命判事又ハ受託判事ハ他ノ裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトノ至當ナル原因ノ爾後ニ生シタルトキ例ヘハ取調ヲ可キ證人カ他ノ裁判所ノ管内ニ移轉セシ

等ノ場合ニ於テハ受託裁判所ヘ報告ヲ爲サシテ直チニ其裁判所ニ證據調ヲ轉囑スルコトヲ得ヘシ此場合ニ於テモ證據調ニ立會フノ機會ヲ得セシメンカ爲メ當事者ニ之ヲ通知セサル可カラズ

第二百八十三條 受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ一箇ノ争ヲ生シ其争ノ完結スルニ非ラサルハ證據調ヲ續行スルコト能ハス且其判事ニテ其争ヲ裁判スル權ナキトキハ之ヲ受託裁判所ニ報告シ受託裁判所ニ於テ其争ヲ完結スルモノトス

受命判事受託判事ハ其命セラレタル事柄ニ付テノ取調フルノ權ヲ與ヘラレタルニ過キサルヲ以テ第三百十九條ニ於ケルカ如ク特ニ權限ヲ與ヘラレタル外ハ概チ裁判權アラサルモノトス

〔參照〕 第二百二十六條 訴訟裁判所ノ職員探證ヲナスヘキトキハ證據決議ヲ言渡スノ際裁判長受命裁判官ヲ指名シ探證ノ爲メニナル裁判期日ヲ定ムルモノトス

其裁判期日ノ定メナサザルトキハ受命裁判官之ヲナシ受命裁判官其命ヲ執行スルニ差支アルトキハ裁判長他ノ職員ヲ指名スルモノトス

第三百二十七條 他ノ裁判所探證ヲナスヘキトキハ裁判長其囑託書ヲ發スヘキモノトス

探證ニ關スル審問書ハ受託裁判官訴訟裁判所ノ書記ニ原本ヲ以テ之ヲ送致シ裁判所書記ニ其受領シタルコトヲ原被告ニ通知スルモノトス

○證據調ノ總則

○證據調入總則

三百六十八

獨其第三百二十八條 外國於探證ヲナスヘキトキハ裁判長權限ヲ有スル官署ニ證據

ヲ採用シ囑託スヘキモノトス

獨逸領事探證ヲナシ得ルトキハ之ニ囑託スヘキモノトス

獨 第三百二十九條 外國官署證據ヲ採用スルコトヲ囑託セラルトキ裁判所ハ立證者

ニ於テ囑託書ヲ處理シ其囑託ノ完結ヲ擔當スヘキコトヲ命スルヲ得

裁判所ハ其命令ヲ立證者探證ニ付キ外國ノ法律ニ適スル公製ノ證書ヲ差出スヘキコトニ

限ルヲ得

第二項ノ場合ニ於テハ證據決議ヲ以テ立證者ニ於テ證書ヲ裁判所書記局ニ納付スヘキ期

限ヲ定ムヘキモノトス此期限空シク經過シタル後ハ裁判手續ヲ遅延セサルトキニ限リ其

證書ヲ使用スルコトヲ得

立證者ハ成ルヘク探證ノ地及時ヲ遅延ナク對手ニ通知シテ之ニ其權利ヲ相當ナル方法ヲ

以テ實行スルコトヲ得セシムヘキモノトス其通知ヲ爲サルトキ裁判所ハ立證者ニ於テ

證據審問書ヲ使用スルノ權アルヤ否及其程度ヲ定ムヘシ

獨 第三百三十條 受命裁判官又ハ受託裁判官ハ他ノ裁判所ニ探證ヲナサシムルコトヲ

至當ト認ルノ理由後ニ至リ生スルトキハ其裁判所ニ探證ヲ囑託スルノ權アルモノトス此

處分ハ之ヲ原被告ニ通知スヘシ

獨 第三百三十一條 受命裁判官又ハ受託裁判官ニ於テナス探證ノ際訴訟ヲ生シ其訴訟

ノ完結スルニアラサレハ探證ヲ繼續スルコトヲ得ヘカラスシテ其裁判官之ヲ裁決スルノ

權ナキハハ訴訟裁判所其完結ヲナスヘキモノトス其中間訴訟ニ付テノ口頭上審問ノ爲メ

ニスル裁判期日ハ職權ヲ以テ之ヲ定メ原被告ニ通知スヘキモノトス

第二百八十四條 當事者ノ一方又ハ雙方證據調ノ期日ニ出頭セサルトキ

ハ事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ證據調ヲ爲ス可シ

原告若クハ被告ノ出頭セサルカ爲ニ證據調ノ全部又ハ一分ヲ爲スコト

ヲ得サル場合ニ於テハ其追完又ハ補充ハ此カ爲メ訴訟手續ノ遲滯セサ

ルトキ又ハ舉證者其過失ニ非スシテ前期日ニ出頭スル能ハサリシコト

ヲ疏明スルトキニ限リ判決ニ接着スル口頭辯論ノ終結ニ至ルマテ申立

ニ因リ之ヲ命ス

〔解義〕 本條ハ證據調ノ期日ニ當事者ハ出頭セサリシ場合ヲ示定セリ

證據調ノ期日ハ第二百七十四條第二項第二百七十八條第一項第二百八十四條第二百八十二

條等ニ依リ豫テ當事者ニ通知セルニ其一方又ハ雙方ノ出頭セサルトキハ自ラ其利益ヲ抛

棄セルモノナルヲ以テ之カ爲メ證據調ヲ遷延スルノ謂ハレナシ又當事者ノ出頭セサルト

モ之カ取調ヲ爲シ得ラレサルノ道理ナキヲ以テ其事件ノ程度ニ因リ爲シ得ヘキ限リハ之

カ取調ヲ爲ス可キモノトス而シテ此ニ云フ期日トハ訟廷内ニ開クトキノミニ限ラス訟廷

外ニ限ラズ

○證據調ノ總則

三百六十九



○證據調ノ總則

外ノ證據調例ハ證人ノ居室ニ就キテ取調フルトキモ又檢證スルトキモ悉ク包含スルモノナリ

然レトモ當事者ノ出頭セサルカ爲メニ證據調ヲ爲ス能ハサルコトアリ例ヘハ證書ノ眞否ヲ檢眞セシメ爲メ鑑定人ヲ呼出セシニ檢眞ヲ求メタル一方ノ出頭セサルトキハ其證書ノ存在セサルヲ以テ之ヲ鑑定セシムルニ由ラシ又境界ノ争ニテ實地ニ臨檢セシニ當事者カ出頭セサルカ爲メニ係争ノ實地ヲ知ル能ハサルノ類之ナリ此等ノ場合ニ於テハ妄ニ追完補充ヲ申立ツルコトヲ得ス僅ニ左ノ場合ニ限リ之カ申立ヲ爲スコトヲ得ルモノトス

一 追完補充ヲ爲スコトモ訴訟手續ヲ遲滯セサルトキ

二 證舉者其過失ニ非スシテ前期日ニ出頭スル能ハサリシコトヲ疏明スルトキ

〔參照〕

獨第三百三十二條

原告ノ一方又ハ雙方探證ノ爲メニスル裁判期日ニ出廷セサルトキト雖探證ハ事件ノ現狀ニ依リナスコトヲ得ル部分ニ限リ之ヲナスヘキモノトス

後日ノ探證又ハ探證ノ補充ハ裁判手續ヲ遲延セサルトキ又ハ一方其過失ナクシテ前裁判期日ニ出廷スルコト能ハサリシコトヲ證明スルトキ及補充申立ノ場合ニ於テハ一方ノ出廷セサルカ爲メ探證ノ重大ナル不完全ヲ生セシコトヲ證明スルコトヲ判決ノ憑據トナル口頭上審問ノ終結ニ至ルマテハ申立ニ依リ之ヲ命スヘキモノトス

第二百八十五條

裁判所ハ事件ノ未タ判決ヲ爲スニ熟セスト認ムルトキハ證據調ノ補充ヲ決定スルコトヲ得

〔解義〕 本條ハ證據調ノ補充ヲ決定スルコトニ付キ示定セリ

第二百七十四條第一項ニ因リテ當事者ノ申立テタル證據ヲ制限シ其中ノ二三ニ付キテ取調ヲ爲セシニ未タ眞正ニ事實ヲ認ム可キ心證ヲ得サルトキ即チ判決ヲ爲スニ熟セスト思量スルトキハ裁判所ハ數證據ノ中猶ホ餘レル證據方法ニ付キ之カ取調ヲ判決スルコトヲ得ヘキナリ此時ハ更ニ第二百七十六條ニ因リテ決定ヲ爲シ其證據調ノ期日ヲ當事者ニ告知スルモノトス

第二百八十六條

證據調又ハ其續行ノ爲メ新期日ヲ定ムル必要アルトキハ舉證者又ハ當事者雙方前期日ニ出頭セサリシトキト雖モ職權ヲ以テ之ヲ定ム

〔解義〕

本條ハ職權ヲ以テ證據調ノ期日ヲ指定スル場合ヲ示定セリ

口頭辨論ノ期日ニ於テ當事者ヨリ一定ノ申立事實ノ演述ヲ爲セシニ已ニ時刻ヲ過キタルカ又ハ事務ノ都合ニ因リテ其日ニ證據調ヲ爲ス能ハサルトキ又證據調ニ着手セシモ其日ニ之ヲ完結スル能ハサルトキハ舉證者又ハ當事者ノ雙方出頭セサリシトキト雖トモ裁判所ノ職權ヲ以テ新期日ヲ指定スヘキナリ

本條ノ事タル辨論續行ノ期日ヲ指定スルニ過キサルヲ以テ第百六十九條ニ因リテモ亦之ヲ爲シ得ヘキハ明カナリ

〔參照〕

獨第三百三十三條

探證又ハ其繼續ノ爲メ新ナル裁判期日ヲ必要ナリトスルト

○證據調ノ總則

○證據調ノ總則

キ其期日ノ立證者又ハ被告雙方前裁判期日ニ出廷セザリシトキト雖職權ヲ以テ之ヲ定ム  
ヘキモノトス

第二百八十七條 受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ストキハ其期日ハ同時ニ

口頭辯論ヲ續行スル期日ナリトス

受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ證據調ヲ爲ス可キコトヲ命シタル  
トキハ受訴裁判所ハ證據決定中ニ併セテ口頭辯論續行ノ期日ヲ定ムル  
コトヲ得若シ之ヲ定メサルトキハ證據調ノ終結後職權ヲ以テ其期日ヲ  
定メ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

〔解義〕 本條ハ受訴裁判所ニ於テ證據調ヲ爲ストキハ其期日ヲ以テ辨論續行ノ期日ト爲ス  
コト又受命判事受託判事ニ依テ證據調ヲ爲ス場合ニ於テ受訴裁判所カ證據決定中ニ辨論  
續行ノ期日ヲ定メサルトキハ受命判事受託判事ヨリ證據調終結ノ報告ヲ受ケタルトキ職  
權ヲ以テ其期日ヲ指定シ之ヲ當事者ニ通知スルコトヲ示定セシマテニシテ別ニ解釋ヲ要  
セズ

〔參照〕 獨 第三百三十五條 訴訟裁判所ニ於テ探證ヲナストキ之ヲナス裁判期日ハ同時

ニ口頭上審問ヲ繼續スルノ期日トナルモノトス

受命裁判官又ハ受託裁判官ニ於テ探證ヲナスヘキコトヲ命スル證據決議ヲ以テ同時ニ訴

訟裁判所ニ於テナス口頭上審問ヲ繼續スル裁判期日ヲ定ルコトヲ得之ヲ定メサルトキハ  
探證ノ終リタル後職權ヲ以テ其裁判期日ヲ定メ原告ニ通知スルモノトス

第二百八十八條 舉證者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ證據調ノ費用ヲ豫納  
ス可シ若シ其期間内ニ豫納セサルトキハ證據調ヲ爲サス但期間ノ滿了  
後ト雖モ豫納シタルトキハ訴訟手續ノ遲滯ヲ生セサル場合ニ限り證據  
調ヲ許ス

〔解義〕 本條ハ證據調ノ費用ヲ豫納スルコトニ付キ示定セリ

證據決定ヲ爲シタルトキハ其舉證者ハ裁判所ノ定ムル期間内ニ證據調ノ費用ヲ豫納セサ  
ル可カラス第三百二十一條第三百三十二條ニ證人鑑定人ハ訊問期日ヲ終リタルトキ直ニ  
日當旋費其他ノ費用ヲ請求シ得ヘキ規定アリ又實地臨檢ノ時モ多分ノ費用ヲ生スルヲ以  
テ舉證者ヲシテ此等ノ費用ヲ豫納セシメ置クハ殊ニ必要ナリ

若シ裁判所ノ定ムル期間内ニ其豫納ヲ爲サハルトキハ裁判所ハ證據調ヲ爲サスシテ直ニ  
判決ヲ爲ス可キナリ然レトモ時日ヲ後レテ豫納ヲ爲ストモ其レカ爲メニ訴訟手續ヲ遲滯  
セサルトキハ證據調ヲ許スヘキモノトス

第六節 人 證

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ民事訴訟ニ

○人 證

關シ裁ニ於テ證言スル義務ナリ

〔解義〕 本條ハ何人ニテモ法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ裁判所ニ於テ證言スルハ義務アルコトヲ示定セシモノニシテ法律ニ別段ノ規定アルトキ即チ第二百九十七條第二百九十八條ノ如ク證言ヲ拒ムコトヲ得ル場合ノ外ハ貴賤貧富ノ差別ナク裁判所ニ於テ證言スルノ義務アルモヘトス何トナレハ吾人ノ幸福安全ヲ得ンニハ交互ノ協力ニ由ラサル可カラサレハナリ故ニ正當ノ事由ナク此義務ニ背戾スルトキハ第二百九十四條第三百二條ノ處罰ヲ免カル能ハス抑刑法第三十一條ニ於テ證人トナルヲ一ノ公權ト認メタルハ大ナル誤リニシテ不日刑法ノ改正ト共ニ此項ヲ削除セラル、ヤ必セリ

證人タル者ハ單ニ己ノ見聞シタル儘チ吐露スルニ止マリ決シテ見聞ノ事柄ニ付キテノ眞否ヲ定ムルモノニ非ラス故ニ當事者ノ主張セル事實ヲ見聞シタルコトナク毫モ之ニ關係アラサル者ハ決シテ證人トシテ喚問ス可キモノニアラス  
民法ニ依レハ金額五拾圓以下ニ限リ證人ヲ許セリ此他證人ノ効力ニ至ラハ民法ニ於テ研究ス可シト雖トモ其證言ヲ採用スルト否トハ決極裁判官ノ權内ニ在ルモノトス

第二百九十條 官吏、公吏ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬廳ノ許可ヲ得タルトキニ限リ證人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス

此許可ハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐アルトキニ限り之ヲ拒ムルコトヲ得

右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求メ且證人ニ之ヲ通知ス可シ  
〔字解〕 公吏トハ官吏ニ非ラス又常人ニ非ラサル公ノ吏民ヲ云フ市町村長公證人執達吏ノ如キ之ナリ

〔解義〕 官吏公吏ハ皆ニ在職中ノミナラス退職ノ後ト雖トモ職務上ノ秘密ヲ守ラサル可カラサルノ義務アリ若シ此等ノ秘密ニ關シ訊問セントスルトキハ受訴裁判所ハ豫メ官吏公吏ノ所屬官廳ニ若シ官吏公吏ノ退職後ナレハ最後ノ所屬廳ニ照會シテ其許可ヲ得サル可カラス而シテ所屬廳ヨリ許可ノ回答アリタルトキハ之ヲ證人ニ通知シ始メテ訊問ニ着手スルモノトス此場合ニ於テハ假令第二百九十八條第一號ヲ規定アルトモ證人ハ決シテ證言ヲ拒ムコトヲ得サルモノトス

各省ノ大臣ハ最高ノ官吏ニシテ之ノ上ニ許否ヲ決ス可キ者ナキヲ以テ天皇陛下ノ勅許ヲ得サル可カラス  
總テ受訴裁判所ノ請求ニ對シテハ證言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐レアルトキノ外之カ許否ヲ拒ム可カラス

〔參照〕 獨 第三百四十一條 官吏ハ已ニ其職ヲ離レタルトキト雖其職務上默秘ノ義務アル事情ニ付テハ其職務上所屬官署又ハ其最後ノ職務上所屬官署ノ許可ヲ得ルニアラサレハ之ヲ證人トシテ尋問スルコトヲ許サズ 獨逸宰相ニアリテハ皇帝宰相ニアリテハ各邦君主共和市府元老院ノ議官ニアリテハ其院ノ許可ヲ要スルモノトス  
其許可ハ證言ヲナスニ依リ 獨逸國又ハ各邦ノ安寧ニ妨害ヲ加フヘキトキニ限り之ヲ拒ムコトヲ許ス

其許可ハ訴訟裁判所之ヲ受テ證人ニ通知スヘキモノトス

第二百九十一條 人證ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ノ訊問ヲ受ク可キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

〔解義〕 本條ハ人證ノ申出方法ヲ示定セリ

證據方法中人證ノ申出ヲ爲ストキハ證人ノ住所氏名及ヒ證人ニ對シ訊問ス可キ事實ヲ表示セサル可カラズ

準備書面中ニ誰某ヲ證人トスル旨ヲ記載スルトモ口頭辨論ノ際ニ之カ申出ヲ爲サ、ルトキハ決シテ取調ヲ爲ス可カラサルモノトス

口頭辨論ノ際主張ノ事實ハ誰某ヲ證人トシテ立證スル旨ヲ申出テ證人ヲ同行セサリシトキハ第二百七十四條第二項及ヒ第二百七十六條ニ因リテ證據決定ヲ爲シ第二百八十八條ニ因リテ日常旅費等ノ費用ヲ豫納セシメ置キタル後次條ニ從フテ呼出狀ヲ作り書記職權

ヲ以テ之カ送達ヲ爲スモノトス

〔參照〕 獨 第三百三十八條 證人證據ノ申出ハ證人ヲ指名シ及ヒ證人ヲ尋問スヘキ事實ヲ舉ケテ之ヲナスモノトス

第二百九十二條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 證人及ヒ當事者ノ表示
- 第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ尋問ヲ爲ス可キ事實ノ表示
- 第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時
- 第四 出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨
- 第五 裁判所ノ名稱

〔解義〕 本條ハ證人呼出狀ノ式ヲ示定セリ

證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備セサル可カラズ

第一 證人及ヒ當事者ノ表示當事者ヲ表示スルハ證人ヲシテ誰某ノ間ニ起レル訴訟タルコトヲ知ラシメンカ爲メナリ

第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實ノ表示證人ヲシテ豫メ訊問ス可キ事實ヲ知ラシメンカ爲メナリ

第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時證人ヲシテ何ノ裁判所若クハ何ノ出張先ニ又何日